
片腕の救世主

あに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片腕の救世主

【Nコード】

N6530T

【作者名】

あに

【あらすじ】

異世界召喚された救世主は世界を救った……自らの片腕を代償に戦争を終わらせた元救世主は彼の新しい“右腕”と共に隠居生活を送っていた。

しかし、世界に再び争いの気配が現れるとき、再び召喚の儀式が行われ、召喚されたのは平凡な高校生……な上にヘタレで弱虫で逃げ腰？

「別に救世主なんかにならなくてもいいんじゃないの？」

面倒くさがりな元救世主とビビりまくりの救世主候補が自分の平穩

のために戦う物語。

プロローグ『最初の終結』

それは10年前のことだった。

アルカトス大陸の東に位置しているシュトレイン王国と南に位置しているイオカリス帝国が中心となり、大陸全土を巻き込んだ大戦争「アルカトス東南大戦」が起きた。

起こるべくして起こされたとされるその戦いは、20年間続いた長期に渡るものとなり、多くの犠牲を伴った。

ある者は兄弟を殺され……

ある者は将来を失い……

ある者は利用され……

ある者は居場所を奪われ……

ある者は策に溺れ……

多くの人間が負の感情に流されていった。

戦いの終結する時には全てを失った者もいた。

彼らを救うものは誰もいなかった。

誰もが国のためと言って、自らの戦う理由を問う者はいなかった。

「これは戦争だ」

それだけが理由だった。

降りしきる雨の中、互いの軍が膝をつき武器を支えにうずくまっていた。

地面にはどちらが流したのかさえもわからない血が雨に薄まって流

れている。

あらゆるところに大きなクレーターや折れた剣などがばらまかれ、多くの兵が肩で息をし、相手を睨んでいた。

中心には自国の旗印を掲げ、一際目立つ鎧を着た人物たちが見合っている。

「降服を受け入れた以上、戦う理由はありません」

「しかし、けじめは必要です。これは戦争なのですよ、王女殿下」

王女と呼ばれた女性はその場に似合わないドレス姿を泥まみれにして、それでいて気高い雰囲気を出して立っていた
彼女の眼の前には兵に拘束され膝まづいている敵の將軍であった。

「剣を取らぬ者を殺すのはただの殺戮者です。剣を引きなさい」

自国の將をしていた男に命令を下すが、ここは戦場……彼のテリトリーなのだと言気が告げている。

拘束されている將軍に剣を向けたまま彼は失礼ながら続けた。

「たとえ10の子供でも、一国の軍の將として戦に出た以上、我らはこの首をとらねばなりません」

子供、そう言われたのは拘束されている將だった。

諦めたように、また、決心を決めたかのように目を閉じて最期を待

っていた。

「この方は戦う意思はありません。将であったとしても、一人の人間です」

「この子供に同情でもなされる気か!? 我等の国を犯した帝国の代表ですぞ!?! この首は我らが勝利の証となるのですぞ!?!?」

そつだ、相手の將軍の首を取ること、その首を掲げること、相手に敗北を告げ味方に勝利を伝える。

「殿下、ここは『戦場』です!」

その一言に王女は唇を噛み、顔をゆがめた。

そんな彼女を多くの兵が見守り、護衛を務めていた騎士も悔しげな顔を隠さない。

「そつだな、お前たち軍人は名誉だ国のためだと言いながら物的な証拠を欲しがる」

バチャバチャと水をはじく音を立て、前に出る人間がいた。

王女の肩を安心させるようにたたき、後ろに下がらせ自分は男の前に出る。

彼は血にまみれていた服を脱ぎ捨てており、体中に包帯を巻いて雨にぬれていた。

この世界にはいない漆黒の髪を濡らし、この大戦ではドラゴンを従わせ戦場を駆っていた「救世主」と呼ばれる存在だ。彼の登場に周囲がざわめき、事の成り行きを見守る。

「俺はこの戦いを終わらせることを契約に戦った。だから俺はもう戦わない」

「それはあなたの都合だ。この者が生きている限り再び戦は起きる。この世界の人間ではないあなたにはわかるまい」

男が嘲うかのように捨て台詞を吐き、睨みをきかせる。

その言葉に何かが緩んだのか、救世主はくくくと笑いだした。

「何がおかしい。」

「くくく、はっはっは……この世界の人間じゃない、か」

だんだんと彼の周りに魔力が集まるのがわかった。

彼の強大な力がなければこの戦争には勝てなかったことを理解している。

だからこそその救世主だ。

「お前たちが救世主だの何だのとくだらない戦争に巻き込んでおいて、関係ないから引っこんでろって？知らない土地に召喚されて、わけもわからず戦わされて、拳句の果てには戻れませんか。それでお前はこの世界の人間じゃないから口を出すなと？」

笑わせてくれるじゃねえか。

「戦争は終わりだ。俺が終わらせる」

その時、魔力が形をなし、大きな刃となって現れた。
襲撃か、と武器を構える兵たちを尻目に救世主はにやりと笑う。

「こいつの命は俺がもらう」

彼が右腕を水平に掲げた時、後ろにいた王女は驚愕した表情で駆け出そうとしていたが、騎士に止められていた。

「やめて!」

「証が欲しいなら」

「くれてやる」

バシユツ！！！

風の刃は一気に振りかざされ、ギロチンのように振り降ろされた。切られた勢いでそれは地面に落ち、切断面は綺麗であって血もじわじわとあふれてきた。

「そんな……………」

「あ……………」

「馬鹿な……………」

痛みもない切れ味に自嘲気味に笑い、傾きそうになる身体をなんとか支え、それを拾い上げる。ぼたぼたと血が流れ、包帯を赤く染めていく。

「お前たちが欲しいのは勝利だけだろ」

切断部分から雨と一緒に流れる血液が水に溶けていった。

「別に、俺はお前たちを勝たせたいわけじゃねえんだ。どっちだつていい……………」

目の前で起こっている出来事に、敵の将は眼を見開いていた。大きな瞳に雨が落ち、まるで涙を流すかのように頬を伝う。

「戦は、終わりだ」

痛々しい光景を周囲に焼きつけ、彼は静まったその場に言い放った。

「こいつが……終結の、証だ。」

だらりと持たれた腕が手渡される。

震える手でそれを受け取ったが、その重みはずっしりと彼を襲った。

「これで……契約は終わったな、王女様」

振り返って笑った顔にはなぜか晴れ晴れとした表情が浮かんでいた。
向けられた王女は涙を流し、小さな声ではい、と返事をした。

こうして戦争は終わった。

勝利の歓声も敗者の言葉もないまま、ただ静かに幕を閉じた。

救世主の腕をその証として。

その戦争は10年前に終結。

そう、たった10年だ。

プロローグ『最初の終結』（後書き）

初投稿です、よろしくお願ひします。

『プロローグ』伝説

シュトレイン王国には多くの伝説が存在している。

実際に起きた出来事になぞらえてできたものもあるが、それらはどこかで折り曲げられている。
都合のいいように、皆が尊敬するように、感動するように。

この国は大陸ができた時に最初にできた国だとか

この土地の地下には大きな遺跡が眠っているとか

そこには伝説級のドラゴンの骨が埋まっているとか

実は王族はもともと異世界の人間だとか……

事実になぞらえてあるものから、全く作られたものまで、さまざま

だ。

そこに新しく伝説が刻まれる。

架空の物語ではない、証拠のある伝説だ。

『大戦を終わらせた英雄』

彼はシュトレイン王国の危機を救い、戦の勝利へと導いた。先陣を切り、片腕を失くしてまで戦った、この国の救世主。敵の将を討ち取り、世界に平和をもたらした。

戦場に出た者以外は真実を知ることはない。

戦争終結の際の出来事は国家機密とされ、折り曲げた伝説を噂として流した。

誰が流したとは定かでないその伝説は今では国中の誰もが知っている。

国の宝物庫には厳重に保管されている固定魔法のかけられた救世主の片腕が眠っている。

先の大戦で“斬り落とされた”腕。

救世主は戦争終結とともに消え去り、誰も行方を知らない。風のように現れ、風のように消え去った彼を誰もが称えた。

夢を見る子供は「救世主様のようにになりたい」と将来を語る。

「馬鹿みたいだ。」

夢を語る少年少女を視界の端に入れながらちびちびと飲んでいた酒を一気に飲み込んだ。

『ブローグ』選ばれた救世主？』

僕は桐谷^{キリヤ} 蓮^{レン}、ごく普通の平凡な高校生男子だ。

部活の大会が終わり、疲れた体をシャワーで癒した後、いつものジヤージを着ていざ！と布団にダイブした。

柔らかい感覚、ふんわりと僕を包んでくれる唯一のサンクチュアリ。

が、

ゴツッ

「あだああああっ！！！！？」

後頭部から倒れるように布団にダイブした僕の身体の先には柔らかい感触はなく、硬い場所に頭を打ち付けたような衝撃が襲ってきた。というか打ちつけた。

背中也打った！背中也打った！

手をついて座るとその感触に疑問をもった。

あれ？

フローリングじゃない。

僕の部屋の床はフローリングで、その前にベッドにダイブしたはずなのに……

「なんで?!なんで?!」

「あの

視界をあげるとそこには可愛い女の子がいた。

コスプレ付きだが。

僕は平凡な……

はず。

第1話『動く日』

大きな魔力が動いた。

これはあの時と同じだ……俺が呼ばれた時と同じ力。

釣竿を揺らしながら空を見上げた。

ぽちゃん

「あ、逃げた」

アルカトス大陸の極東の海沿いの町フィニア。
漁業が盛んで町人のほとんどが自給自足の生活をしている豊かな街
で、シュトレイン国に属しているが、ほぼ完全に独立しているとい
つていい。
自衛も住民が行い、国税を支払う必要がない為、かなりの自由がき
いていることから、商人なども自由に行き来し活気のある街になっ
ている。

「いよっしゃあああ！きたあああ！！」

石で固定していた釣竿を手に持ち、一気に引き上げる。
遠くの方で水しぶきが立ち、巨大魚が宙返りをし……

ぽちゃん。

魚は海に返りましたとき。

呆気にとられて思わず尻もちついちまったじゃねえか。

「完全に食いついてなかったか……はあ」

「よーお、ユーガ！なんだあ、そのへっぴり腰はー！」

「なっさけねえぞー！」

声をかけてきたのは船に乗っている漁師のおっさんたちだった。砂浜に尻もちをついている俺の姿を見て網を引き上げながら笑いあっていた。

町の外れに家を建て、住み始めてから彼らとは知り合った。

釣りを教わったのもおっちゃん達からで、よく魚を分けてもらったりして交流がある。

「うっせえー、今日はキャッチ&リリース気分なんだよ！」

「なんだそりゃ！」

あっちじゃ釣りなんかしたことなかったからなあ。

なんて思ってみたりする。

俺は10年前、いわゆる『異世界トリップ』というものを経験した、元地球人だ。

名前は染井雄そめいゆうが呀。

こちらの世界で言うと、ユーガ・ソメイとなる。

ちなみにこちらに来てから10年経ち、26歳となったが、魔力が高いせいで外見は一寸も変わっていない。

変った所と言えば腕が一本ないところかな。

いきなり召喚された世界では国同士が戦争していて、その戦争を終わらせるための救世主となってほしいと美人に頼まれ、流されるままに戦う道に立っていた。

もちろん人を殺したし、憎しみや怒り、悲しみなど、縁がないだろうと思っていた感情を経験していった。

英雄なんて、救世主なんてものになりたいとは思わなかった。

救世主なんて呼ばれて、行き着く先はろくなものじゃない。

戦争を終わらせるため、俺は代償に剣を持つ腕を……右腕を切り落とした。

今の俺は片腕だ。

肩の先からすっぱりと切れ、服に隠れているがさらに包帯で覆い隠している。

片手生活は苦になることがあるが、出来のいい“弟子”が俺の右腕をしてくれている。

元々肉体的に超人だから重い物も持てるし、魔法が使えるから大体のことはそれですませる。

今思えば安い買い物だ、と思うのが本心だ。

あんな腕一本で今の平穩を手に入れたのだから、後悔なんてない。

魔法で腕を生やすこともできるが、これは戦争が終わったという“証拠”なんだ。

俺はもう世界の為には戦わない。

もし、また戦争が起きたとしても、それは俺には“関係ない”ことだ。

救世主は死んだ。

「だからって、また召喚するとか……学ばないねえ」

魔力が動いた気配。

きつと俺と同じように召喚された救世主という都合のいい代名詞を持つ“犠牲者”が来たに違いない。

魔力は大きいけれど、俺ほどじゃない。

弱弱しい気配がビンビン伝わってくるし。

可哀そうだが、王道展開に進むか、俺みたいに分岐するか……

「がんばれよ、きゅーせーしゅ」

そっと呟くと潮の匂いが鼻を掠めた。

あ、潮の流れが変わったかな。

「おっちゃん、今日は向こうの方が魚いそうだぜー！」

「本当かー？」

「ほんとほんと！釣れたら分けてくれー！」

「わあかったよー！大漁だったらなー！」

俺の収穫無しだからおっちゃん達には頑張ってもらわねえとな。

釣竿を固定し直し、空のバケツを持って家に戻ることにした。

コンッ！

コンッ！

家の近くに来ると薪割りの音が大きくなってきた。

この音も釣りと同じようにいつもの日課となっている。

「なんだ、帰ってたのか」

止んだ音に近付くと、小さな家の裏で割った薪を拾い集めている愛弟子がいた。

俺に気づいていたらしく、拾う手を止め、こちらを振り返っていた。

「おかえりなさい、師匠^{せんせい}」

「ただいまー、カザス。今日のクエストは簡単だったのか？随分早えじゃん」

バケツを置いて、近くに落ちていた薪を一本拾う。

綺麗な金髪と碧眼のカザスは俺の弟子であり、俺の右腕でもある。

右腕を失った直後から俺の新しい右腕となった。

ーから鍛えたが、今では剣術は俺を抜き、修行の一環としてギルドのクエストを受けさせている。

いや、生活費がどうこうとはけっしてない。
むしろ食い物には困っていないのだ。

ギルドの報奨金は全てカザス本人の小遣いにしていいと言っている。

「A級の魔物だけで、すぐに終わったので。ついでに町で買い物」

A級って聞けばギルドの人間は多少ビビるのだが、カザスには雑魚だったらしい。

「珍しいものだったので」

と、言って取り出したのは大きなつぼで、あいにくと俺には鑑定眼はないので違いがわからん。

薪を持っている為受け取らないが、貰わなければいけないのだろう。

「また買ってきたのか？お前、その収集癖どうにかしろよ」

「収集ではなく、師匠にお土産です」

「ってか、俺にじゃなくて自分のために使え」

それはもう何度も言っていることで……

最初のうちは珍しい物が増えてすげえおもしろーい！とか喜んでしまったが、それに味をしめたのか、遠出のクエストを受ける度にその町で俺に“お土産”を買ってくる。

その“お土産”は今家の隣に設置した倉庫を埋め尽くしている。

俺は別に欲しいと言った覚えはないのだが、こいつは飽きずに貢物のように買ってくるのだった。

「まあ……」

もう倉庫に置くところないし。

「傘立てにでも使つか」

「はい」

「玄関の方にも置いておけ、ほら」

持っていた薪をカザスの持っていたつぼに入れ、バケツを倉庫にしまったため、倉庫に向かう。

「あ、そうだ。」

再び薪割りを再開しようとしているカザスはきよとんと俺を見つめている。

俺が気にしているのはさっきの魔力の気配のことだ。

(あいつも成長したとはいえ、面影はあるからな……)

そのうち再び争いが起きる。

最初は小さく、だんだんと大規模になっていく。
カザスをその中心に持っていくことは避けたいな。

異世界からの召喚を行ったということはすでに起こり始めているその渦に巻き込ませるわけにはいかない。

「しばらくは依頼を受けるとき気をつけるよ」

「何か起こったのですか？」

真剣なまなざしを向けてくる愛弟子はきつと巻き込まれる確率が高いからな。

「これから、な。お前は大丈夫だろうけど、ギルドの方は慌ただしくなるだろうから」

「……はい」

「あと……お前も釣りを覚えろ！」

おっちゃん達よりも大物を釣って目にもものを見せてくれる！

そう宣言した俺に無表情だったカザスはほんのり笑って返事をした。

第2話『逃げる男』

僕は今窮地に立たされています。

僕がベッドにダイブしたはずのそこには硬い石畳があり、周りにはなんかローブを着たおっさんと一人だけ可愛いお姫様っぽい女の子がいた。

(いやいや、コスプレ？夢？でも痛かったよな。後頭部絶対コブできてるよこれ！)

「あの……」

お姫様？が心配そうな顔をして僕を見下ろしていた。周りにはざわざわとざわめき、僕を見て何やら話している。

「ようこそいらっしやいました、救世主様！」

きゅーせーしゅ？

「あー、人違いですよ」

「いいえ、その黒い髪、黒い瞳、貴方様は救世主様です！」

いや、日本人はほとんど黒い髪ですよ。

お姫様？は感激しているのか僕の手を握って涙を流している。
女の子と手をつないだ経験が皆無の僕としては赤面ものだが、今の僕には反応できない。

さっきの痛みは本物だったのだから、現実だ。

彼女の手の感覚も……柔らかい。

「お願いです、救世主様……この国を御救いください！！」

僕の腕時計で1時間後。

「救世主様！！」と歓迎ムードになり、なぜかいきなり剣を持たされ、いかにも強そうな人に「戦え！」と迫られ……向かってきたその人に驚いて思わずしゃがんだら僕につ躓き、勝手にこけて歓声が上がった。

何が何だかわからないうちに僕「救世主」という方程式がこの人たちの中で定着してしまったらしい。

なんか……

怖い！！！！

僕は部活で空手部に入っている。
練習で鍛えることは好きだけど、
実戦は得意ではなく、
今日行った

部活の試合も一回戦負け。

睨みつけてくる人を目の前にすると足が竦むか、魂が抜けそうになるほど逃げたくなる。

理由はいわゆるトラウマで、幼稚園の頃めっちゃ強面のばんちょーと呼ばれる隣のひよこ組の園児に、「おれのあいちゃんをとるやつはゆるさねー」とわけのわからないことを言われ、ぼっこぼこにされたあげく一か月包帯が取れなかった。

幼い僕には一生残る心の傷だ。

そのせいか、睨みつけられたりすると僕のスキル、逃げ足が発動し、今では足だけは陸上部をも超える。

剣を持って相対しただけでも褒めてもらいたいくらいだ。

なのに！

「冗談じゃないよ、こんなわけのわからない場所にいきなりっ」

今現在僕は絶賛隠れ中です。

これ以上こんな場所にいたら、こ……殺される……！

広い敷地があるらしい城をこそこそと隠れながら出口を探しさまよっていた。

まるで迷路のように感じる。

『いたか？』

『いや、上だ』

見つかるの早っ！！？

足音は消してるはずなのに、逃げる先には必ず兵士っぽい人が先回りしている。

兵士の人もそれっぽい鎧着てるし、ただでさえチキンハートなのにこれ以上心臓に悪いことが続いたら僕はどうなるのだろうか。

ガチャガチャ

「(やばい……っ!?)」

廊下が行き止まりになっていて、逃げられそうな場所がない。

あるとすれば扉が背後にあるだけだが、入って誰かいたらそれでもうアウトっ！なことになる！

どうする、僕！

と、覚悟をきめようとした瞬間だった。

ガバツ！！

「!?!」

急に扉が開き、部屋の中に引き込まれた。

ボタンと扉が閉じた後、兵士の足音が部屋の前まで近づいてきた。

「なっ」

「しっ。静かに、これをして！」

そう言って僕の腕にはめられたのは綺麗な腕輪だった。

驚いた僕の口を手で覆い、しーっという仕草をしたのはさっきのお姫様にちよつとにている美人なお姉さんだった。足音が扉の前に来て、ノックされる。

『殿下、失礼します』

「どうかなさったの？」

『こちらに不審な人物が来たと思うのですが……』

ふ、不審だとー?!

好きで来たわけじゃないのに！

「それならば先ほど魔力を感じましたが、すぐに遠ざかりました。それと、その不審者というのは？」

『い、いえ、ただのコソ泥です』

「そうですか、早く捕えてくださいな」

『は！失礼いたしました！』

ガチャガチャ……

早足でかけていく足音が遠ざかる。

ゆっくりと僕の口を覆っていた手が外され、お姉さんが離れる。

「ごめんなさいね、とつぜん」

「いいいい、いえ、助かりました！」

思わず大きめの声を発してしまったが、はっと口を覆い、すみませんと謝った。

お姉さんはくすくすと笑い、ソファに座った。

とても広くて豪華な部屋だが、無駄なものはなかった。

一つ一つが高級そうだが、オブジェとか絵画とか、そういう類の鑑賞物はテーブルの上の一輪の花だけだ。

「どつぞ、コソ泥さん」

「か、勘弁してください。僕、何も盗んでませんよ」

「冗談ですよ」

座ったソファはすごく座り心地がよくて、今までにない感触だ。柔らかすぎず、硬すぎず……欲しいなあ。

感動に浸っていた僕にお姉さんはそつと紅茶を差し出してきた。

「あなた、『チキユウ』の方でしょう?」

「えっ、知ってるんですか?!」

「ええ、前にも召喚された方がいらつしゃったから」

前にも僕みたいに召喚された人がいたのか……

「でも、また召喚の儀式が行われるなんて……僭越ながら国を代表して謝罪させてください」

急に頭を下げた彼女にかなり焦った。

こんな綺麗な人、しかも会って数分も経たない人にこんな土下座並の謝罪をされては困る。

「頭上げてください!お姉さんに謝られるいわれはないし……」

「いいえ、あなたを召還したのは私の妹でしょう。私の他に召喚の儀式を行える巫女は彼女だけですから」

「巫女って？」

「シュトレイン国の王族の女にあらわれる特別な血を持つ者のことです。その血がなければ召喚の儀式は行えません。私も、その一人であり、元々あなたの召喚をするのは私でした」

「ええっと……でも、お姉さんじゃなかったんだよね」

あの場にいたのはお姫様っぽい女の子。

彼女はお姉さんの妹さんだったのか……ん？王族って言ったか？

もしかして……

「お姉さんとあのお姫様っぽい子って王族ってこと……ですか？」

「ええ」

「すみません！なんか、お姉さんとか馴れ馴れしく呼んで……！」

「ふふ、構いませんよ。私、そのように呼ばれるのは初めてです。

あ、私、シュトレイン国第1王女アウリア・メリア・シュトレインと申します」

「僕は桐谷蓮キリヤレンといいます」

「キリヤレン……こちらでいうと、レン・キリヤでしょうか」

「はい、たぶん」

きつと僕の前に召喚された人が同じ日本人だったのだろう。
なんか、賢いお姉さんだなあ。

「ではレン様とお呼びしますね」

「様はちよつと……ま、いつか」

にこにこ逆らえない笑みに負けた。

改めてみるととても綺麗な人だ。

天然なのか、プラチナブロンドが透き通り、眼は綺麗な青だ。

そんじょそこらのモデルさんより綺麗だな……

「それで、先ほどの続きですが」

「は、はい」

やば、見惚れてた。

「私はレン様を……救世主という存在を召喚することには反対しました」

彼女はドレスを握りしめて悔しそうな表情をしていた。

召喚された場所にいた人たちは喜んでいたのに、彼女はなんだか違
った。

「救世主というのは私たちの国、シュトレイン国と隣り合う国、イ

オカリス帝国との戦争に勝利を導き、我が国に栄光と平和をもたらす存在とされています。10年前長きに渡ったこの大陸『アルカトス大陸』で起きた大戦を治めたのも召喚した救世主でした……

彼はとても強い力を持ち、シュトレイン国に勇気を与えてくれました。

戦争も彼なしでは終わることはなかったでしょう。

しかし、私たちは全てを彼に押し付け、彼を苦しめてしまった。

彼には戦う義務があると追い詰め、全てを彼に……

戦争を終わらせてくれる彼に期待という責任を背負わせてしまった。

それでも彼は戦ってくれた。

そしてその手で戦争を終わらせてくれた。

その時に約束したのです。

この国を争いのない国に変えると。

なのに……再びその過ちを繰り返そうとしている。

また、争うことを求めている人がいる。

私たちが生んだ争いをまた救世主に押し付けるということは愚かなことです。

だから私は召喚の儀式を反対しました。

あなたを呼んでしまったのはまだ何も知らない妹が行ったこと。

それでも、私たち巫女があなたを巻き込んでしまったことには変わ

りありません」

冷めてしまった紅茶で乾いたのを潤すが、手が震えて飲みにくかった。

「その……救世主の人って戻れたんですか？……元の世界に」

「わかりません……戦争終結とともに消えてしまいました。生きているのかどうか……」

戻れない。

そう言われているような気がした。

「あの、どうして匿ってくれるんですか？」

「あなたを逃がしたいのです。でも、その前にあなたの魔力を消す必要があります」

「魔力？」

「この世界には魔法というものが存在します。あなたの世界に『力ガク』というものがあるように」

「それでその魔力が僕にある？」

「ええ。とても強い魔力が。それを感知されたせいで兵たちがあなたを追ってきていたのですよ」

どつりで逃げても追ってくるわけだ。

僕の逃げ足スキルが衰えたわけではなかった。

「今はその腕輪が制御の代わりをしてくれています」

「あ、さっきの」

綺麗に腕にはまっているそれは小さな宝石がちょこんとはめられている以外は特別装飾はない。

「魔力の制御ができるようになればそれも必要なくなります、しばらくはしていたほうが良いですね」

「何から何まで……」

「申したはずですよ？私はあなたに逃げて欲しい。それに……」

優しい笑みを浮かべたお姉さんは紅茶のおかわりを入れながら言った。

「あなたは争い事には向いていない。優しい魔力をしているから」

まるで……

彼のよう。

「護衛を用意します」

唐突に言い出したお姉さんは小さなベルを取り出し、ちりと鳴らした。

そのすぐ後にノックが聞こえた。

足音も気配もなかったためかなりビビったが、お姉さんは当然と言
うように入りなさいと言った。

静かに入ってきたのはいかにも騎士っぽい服装をした釣り目の可愛
い女の子だった。

僕と同じ年くらいだろうか。

「失礼します、殿下」

深くお辞儀をした彼女の横に立ち、顔を上げさせる。

「この子はジェスティア・ルンブルク。私の騎士のひとりです」

赤い髪が特徴的で長い髪はポニーテールにしている。

「ジェティ、この方はレン・キリヤ様。例の方です」

「存じております。準備も万事整えました。すぐにでも出られます」

「えっと、レンです」

僕がそう言って手を差し出すとジエスティアさんはその手を見つめ戸惑いがちに握り返してきた。

その様子を嬉しそうに見ていたお姉さんは握手している手に自分の手を重ねた。

「ジエティ、この方をお願い。王女としてじゃない、親友として……」

「わかっている、アリア」

「レン様、ジエティは頼りになる子です。あなたを安全な場所まで連れて行ってくれます」

「お姉さん……」

窓の外がざわついてきた。
きつと僕を探している人たちだ。

「急ぎましょう。レン様」

「ジエティ、この転移魔法の陣を使って。探知にかからない代わりに一度だけで、王都の外まではいけないけれど……」

「はい」

陣の用意をするジエスティアさんを目で追っていたが、お姉さんが

僕の手を握った。

「もし……もし、彼に会ったら伝えてください」

彼……それは僕の前の救世主のことだろう。

「『今度は私が戦います』と」

陣に立ち、僕とジエスティアさんは光に包まれる。
見送るお姉さんの顔は悲しそうだった。

「お姉さん、ありがとうございました」

そう言うと、お姉さんは笑ってくれた。

視界が白くなり、何かに吸い込まれるような浮遊感に包まれた。

いってらっしゃい。

そう聞こえた気がした。

第3話『旅立つ前』

「うーみーはーひろいーなーおーきーいなー。」

「ふんふーんふーんふふふーんふーん。」

「……」
「そう、俺は心が広い。この海のように……空のように……」

「……」
「だから！別に！初心者のお前が俺より大量に釣れたとしても俺は別に悔しくなんかない……！」

「……」

「たとえお前のバケツの中がでかい魚で敷き詰められていて、俺のバケツは空だとしても！」

「……」

「俺は！キャッチ&リリースの心を忘れていないだけだ！」

「師匠は優しいですから。」

「男前のおんちゃん、ああいうのはな、負けず嫌いっていうんだぜ。」

「

「そつだぞ、一匹も『きゃっち』も『リリース』もしてねえからよ。」

「

「うっさいぞ、そこのおっちゃんA・B！」

今日は浜辺で釣り大会をしています。

初心者であるカザスに釣りを教えると言ったらなぜか漁師のおっちゃん達が出てきて、一緒に釣りをしながら教えることになった。

容量がいいカザスはすぐにコツを掴み、あっという間にバケツを魚だらけにしていた。

別に羨ましくはない。

俺は固定した釣竿をちょんちょんつつきながら、空のバケツを見つめる。

別に悔しくはない！

魚は餌に食いつくのに、うまく上げられないのだ。
左手しか使えない俺にとってまあ不自由なものだったが、釣れた時の快感は半端じゃない。

でも、それでバカにされるのは納得いかない！

とって、怒っているわけでは一切ない！！

「そついや知ってるか？」

餌をつけかえながらおっちゃんAが話題を上げる。

「王都の方で徴兵令が出ることが決定したらしいぞ。」

「まあた戦争が起きんかねえ？」

「……………」

釣竿をつつく指を止め、持ってきていた数本の薪を近くにくべる。

「どうも、イオカリス帝国の方が荒れてるらしくてな、この前町にきた商人に聞いたんだが、こっちの方にもそのうち御触れが来るかもな。」

また戦争が始まる。

前の戦争ではどちらも統率できるストツパーが存在した。

しかし、今のイオカリス帝国は統制がバラバラで様々な派閥に分かれているという。

シュトレイン国と争おうとしているのは過激派らしい。

二つの国で締結したはずの条約を破ろうとしているのだ。

元々先の戦争の理由は領土の問題と、政治上のすれ違いだった。

条約で定めた領地の統治分割を納得できない者たちや、再び実権を握ろうとしている人間たちが徒党を組んでいるらしい。

国民にとってはいい迷惑だ。

「俺たちや平和に暮らしてるってのにな。」

「この国守る前に俺たちや自分たちの暮らし守らねえとだからな。」

この町の中にも戦争に参加した人は少くない。

このおっちゃんたちも後衛でだが参加していたらしい。

俺はその最前線だった。

今でも忘れない血の臭いと硬い武器、軟らかい肉……

終わった後の虚無感とそれと同等の晴れ晴れとした気持ち。

「ユーガもあんちゃんも、行かないでおくれよ。」

おっちゃんAが声のトーンを下げてつぶやいた。

「そうだぞ、ユーガが来てからなんか最近楽しいんだからよ。」

薪をくべる手を止め、おっちゃん達を見ると楽しそうに笑っている。カザスは無表情だが、魚が掛かっているのにおっちゃん達と俺を見比べていた。

なんだよ、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか。

俺はにやりと笑ってくべた薪から数歩下がった。

「おっちゃん達もな。」

指を鳴らすと薪に火が灯り、揺らめいた。

「今日もなかなかいい火じゃねえか。」

「ちゃんと火加減してあるんだろうな。前みたいに焦がすなよ。」

「うっせえ！カザス、魚焼くから貸せ。」

「はい。」

空のバケツに入っていた水を捨て、新しく魔法で水を入れる。カザスが移動させたバケツの中から適当に魚を掴み洗う。

「あと、網と塩、醤油持って来い。」

「はい。串はどうしますか。」

「それも。」

「わかりました。」

釣竿を話して家に向かうカザスをおっちゃんA・Bは見届けていた。魚を洗って魔法で食える部分以外を消す作業をしている俺は気付かなかったが。

急におっちゃん達が笑いだしたのだ。

「どしたんだよ。」

「いや、はっはっは！お前ら夫婦みたいだよな。」

「『おい、塩』『はい、どうぞ』ってか？」

「「はっはっはー！」「」

気持ち悪いこと言うな！と反論するがおっちゃん達は完全に笑いのスイッチがONになってしまったらしい。
おっちゃんたちは笑いながら『シヨーク』もうまいな、いや、塩も
いいと言いだめた。

ちくしょう、鳥肌が立って思わず魚の頭消しちまったじゃねえか。

「でもよ、良いあんちゃんじゃねえか。」

「顔が？」

俺が言うとおちげえよ、と返ってくる。

「お前の世話して、ギルドにも登録してるんだろ？」

「こき使いすぎじゃねえか？」

こういうことを言われたのは何も今回が初めてではなかった。

この町に着く前に転々としていた場所でよく言われていた。

まるで奴隷のように扱う様を快く思っていない人間が、俺に問う。

彼を解放してやれ、と。

「俺は使ってるわけじゃない。」

そう言うとおっちゃん達ははてなマークを浮かべる。

そうだ。

俺にとってあいつは“右腕”だ。

あいつにも最初から言ってる。

『俺はお前を右腕として扱う。でもお前を奴隷にするわけじゃない。お前は俺の一部、意思を持つ腕に……俺が必要とする腕になれ。拒否したいときはすれればいい。俺がお前に下すただ一つの命令だ。』

それからカザスは強くなりたいたいと言い、俺の教えられる全てを叩き込んだ。

あいつは言う。

俺の右腕になれたことは自分の誇りで唯一だ、と。

「あいつは俺の自由な“右腕”だからな。」

夕方になり、おっちゃん達は家に帰って行った。
焚き火を“消し”、釣り道具を片づける。

カザスが座って魚を数えている左隣に座り、探査魔法をかけた。

あれ？あの魔力が消えた。

すぐに魔力が制御できるわけでもないから、制御魔具でも付けたんかな？

「師匠？」

ぼうつとしていたのか、カザスが話しかけてきた。

「ん、いや……どうしようかな、と。」

きつと今のままではいられなくなるんだろうな、といっしかつぶやいたことがあった。

そのときカザスが聞いていたのか、心配そうにこのままがいいです、といったことを覚えている。

「お前さ。」

「はい？」

「俺のこと大好きだねえ。」

「俺は貴方の一部ですから。」

「だね。」

当然のことだが、改めて言われると恥ずかしい物がある。
言いだしっぺは俺だけど！

「旅しようか？」

「西の方、ですか？」

そつえば西の方に行ってみたいと言ったような……
よく覚えてたな。

「西にはさ、ドラゴンの谷って言うのがあるらしい。」

「師匠の召喚獣にもドラゴンはいますよね。」

「だってあいつらでかすぎて呼びにくいし……ドラゴンの谷っていうくらいだからいろんなドラゴンいるだろ？こつ……ちつこいドラゴンとかいねえかなあ。」

かわいいよなあ、ドラゴン。

ワイバーンとかは見たことあるけどちゃんとしたドラゴンはあまり
出逢わない。

俺は召喚魔法も仕えるため、召喚獣としてドラゴン2体と契約して
いる。

あいつらは……でかいからな。

「気になることもあるから王都ルートを通りたかったけど、難しい
だろつな。」

転移魔法を使ってもいいけど、あの浮遊感があまり好きではない。やはり旅といたら道中を楽しむものだし。

「南も微妙です、王都よりも酷いかもしれません。」

「でもまあ、近いうちにここは出る。」

運が良ければ先日召喚された人間に逢うこともできるかもしれない。自分は今もう地球に帰ることは諦め、この世界に骨も埋める覚悟があるが、きつと俺の後輩君は違っただろう。

できれば戻してやりたい。

つてか召喚された奴ってどんなやつだろ？

王道的に言くと平凡なやつだよな。

でも、もしかして変化球でちょう強そうなマッチョとか……

うおー！気になる！

でも、今はどうでもいいか。

「まあそのうち、だけどな。そしたら、俺もギルドカード作らなきゃだなー。」

国境を通るには特別な通行証が必要となる。それは国が発行するものと、ギルドが発行するものしかない。ギルドはあらゆる土地の依頼が集まる為、どこにでも行けるといいうステータスがある。

「師匠、そろそろ冷えてきます。」

「ああ……今日の晩飯は魚尽くしだな。そうだ、寿司握れよ。」

「『スシ』ですか？あれは力加減が大変です。」

「それが寿司つてもんだよ！後3年位修行すれば一流の寿司職人になれるぜ。」

「10年修行すればうまい寿司は作れる！たぶん！」

「俺は師匠が満足するなら頑張ります。」

「おう、がんばれよ少年。」

帰った俺が寝ようとしたとき、ふと感じたことのある魔力を感じた。

俺がいつしか作ってある人にあげた魔法陣だ……

「まだ持ってたんだな……」

出発は明日に決まりだな。

第4話『初ギルド』

フィニアの町外れに住んでいる俺はカザスと違ってあまり家を離れない。

出歩くのが面倒だというのもあり、町に行くのはたまに暇つぶしで月に2・3度。
たまに商人が増えていたり、子供がでかくなったりして、その変化を楽しんでいる。

今日町に来たのはギルドに登録するためだ。
カザス連れ市場を回りながら食料を買い、旅支度を整える目的もある。

「テントはいらねえし、食料もオツケー、あと何が欲しい？」

「現地調達で十分かと。」

「んじゃ、ギルド行くか。」

町の中央に向かう大通りを歩き、所々にある武器屋や道具屋を横目に見ながら珍しい物を探してしまう。

ふと目に入ったのはこじんまりとした店で、近付いてみると魔力が漂っているのに気づく。

「へえ、魔具専門の店もできたのか。」

魔具は魔力が込められた石、魔石を使った魔法の道具だ。主に武器などに使われているが、モンスターや精霊の魔力が影響していて、手に入れるのは困難とされている場所にあることが多い。

かく言う俺も、前は魔石狩りじゃーっとモンスターの巣を荒らしてたな。

今では俺自身で生成することができるし、金に困ったらそれを売ればいい。

ちなみにカザスは俺の作った武器を使用している。

全体が高密度の魔石で作られた、黒い大刀で名は魔剣シユヴァルツ。魔法無効化と固定化をかけている為、俺ず、魔法も打ち消せるといふ優れもの。

邪魔ならば指輪に変えることができるのに、こいつは背負っている。

なぜかと聞いたら、この方が落ち着くから……らしい。意味がわからん。

「町の通りにも行商が増えたとし、にぎやかになってるな。」

「はい。」

「お、ここか。」

町の中でも一際大きな建物を見つけた。木造だけど固定化かけてあるな。

「どつどつ。」

ギルドの支部を見ていた俺より先にカザスは扉を開けて待っていた。扉もでけえし、初めてギルド見たけど、結構本格的なのな。

建物内も広く、かなり多くの冒険者らしき人間が談笑したり、喧嘩したりしている。

「知り合いいるか？」

「いえ、興味ないので。」

無表情で俺と話す以外無駄なことは口にしないこいつに知り合いができるわけないか。

しかし、こいつの知らぬところで有名にはなっているらしい。

カザスが入ってきた瞬間、ちらちらとこちらを見たり、仲間とそわそわしているやつらがいる。

どうでもいいけど。

「俺、受付済みますけど、依頼見てくるか？」

「はい。」

カザスが離れた後も俺をちらちら見てくる奴がいるのはなぜだ。

「受付ってここ？」

いかにもといった感じで女の子が座っているカウンターに向かい、尋ねると、笑顔で肯定してきた。

「本日はどのような御用件で？」

「ギルドに登録したいんだけど。」

「新規ですね、ではこちらにご記入お願いします。」

そう言っって一枚の紙を渡された。

ペンを渡され、交互に見比べるが……困った。

今まで左だけで生活していたが、文字の練習は何度しても上達せず、謎の古代文字のようになってしまっうのだ。

せっかくこっちの言語を理解して読めても書けない。

「お姉さん書いてくれないの？」

困ったように笑っ受付嬢。

「本人様のご記入となりますので。」

「代筆とかは？」

「可能ですが、こちらでお願いします。」

「良かった。」

カウンターに肘をつきながらあたりを見渡す。

紙が貼られている掲示板のような場所に一人、謎の空間を作っているカザスがいた。

Sの文字が刻まれている板に張られている紙をじっと見ている。

周りの人間は近寄りがたいのだろう。

いくら男前でも纏っている空気がバリヤー的なものを作っているに違いない。

「カザス！こっちこい！」

すぐに振り向いて早歩きしてきたカザスにペンを渡す。

「代筆可能だつてよ。」

「すみません、書類記入があることを忘れていました。」

そう言つて記入を始めた奴を受付嬢は驚いたように見ている。

「師匠、この代筆者との関係という枠はどうしましょう。」

「んー師弟でよくね？ただの書類だし。ほんとのことだし。」

「わかりました。」

「家族でもいいけどな。」

「怖れ多いです。」

「なんだそりゃ。」

固まっている受付嬢に紙を渡すと、はっとして慌ただしく手続きを済ませていった。

「こちらがギルドの証明書のカードとなるので、なくさないようにしてください。失くしてしまった場合、カードの再発行は可能ですが、紛失したカードの使用停止と、再発行のための料金として銀貨10枚かかりますので。」

銀10枚か。

銅貨が100枚で銀貨1枚、銀貨1000枚で金貨1枚だったつげ。最近金使うのはカザスに任せつきりだったからな。

結構安いな。

「依頼受領手続きについての説明はしますか？」
クエスト

「いや、大丈夫。」

常連のカザスがいるからな。

「では、ギルドランクはFランクからとなります。クエストごとにポイントが記入されており、達成しますとポイントが加算され、一定のポイントまで獲得しますと、ランクアップになります。」

経験値稼ぎみたいだな、簡単な構造でわかりやすい。

「依頼は自分のランクより2ランク上まで受けられますが、パーティを組んだ場合、その平均のランクの2ランク上まで受けられますので初心者の方はパーティを組むことをお勧めしております。」

「パーティって手続き必要？」

「いえ、依頼受領時に申請していただければいつでもパーティを組むことができます。」

以上です、と説明が終わると俺は礼を言ってカザスが見ていたクエストボードという掲示板の前に来た。かなりの数の依頼が並んでいて、悩む。

「西に行く依頼あるか？」

俺より身長が高いカザスに上の方を担当させ、西の国境をこえるための通行証を発行できる依頼を探した。あまりの量に、重なり合っている紙もあるためいちいちめぐりつつ確認する。

「南と王都行きの護衛とモンスター退治がほとんどです。」

「んー。」

俺たちがパーティ組んだとしてもカザスはSS、俺はF。

平均でCランクなわけだから、2ランク上、つまりAランクまでで探さなければいけない。

「西はないか…王都に行ってそこからの依頼探した方が早いな。」

「いいんですか？」

「しょうがないだろ、王都に寄る用事もあるしな。」

王都行きも条件追加、たとえば、カザスは一枚の紙をはがした。

依頼内容

調達と王都までの配達。

依頼人

鍛冶屋ドン。

依頼物

東の町フィニア付近の森に生息するゴブリンの巣で採れる魔石を親指の大きさを5個。

ランク：B

「そついやずつと前にそんなもの手に入れたな。結構でかかったからそれ1個でもいいかな？」

「はい、小さな魔石5個よりも大きな魔石1個の方が希少価値が高いですから。」

「決まり。」

再び受付嬢のもとに行き、受領手続きをする。

「パーティで受領ということでもよろしいですね。」

「そう。平均でCランクチーム、Bランク依頼ね。」

「はい、確かに。ではこちらが依頼受領書となります。依頼主にこの受領書を渡して以来確認を行いますのでなくさないよう注意してください。」

「いやあ、ゴブリン様様だな。」

依頼もすぐに決まって、これであとは町に出るだけだ。

そんな俺たちは一服するためにギルド内の2階にある酒場で酒を飲んでいた。

カザスもシュヴァルツを立てかけ、水を飲んでいる。

ちなみにカザスは酒を飲まず、いつも茶か水しか飲まない。

俺はこちらの世界にきて、未成年のうちにかぶがぶと飲んできた。今じゃ精神年齢は26歳です。

「丁度いい依頼が見つかってよかったぜ。」

「王都でも西行きの依頼があればいいですね。」

「なかつたら南にでも行くか。北は寒そうだし。」

「はい。」

ジヨッキを傾け一気に飲んでいると、階段をうるさい足音が駆け上がってきた。

カザスがコップを置き、俺を隠すように座り直す。

「師匠。」

「任すよ、俺飲酒中はやる気なし。」

「はい。」

4人組のいかつい鎧を着た冒険者らしき男たちが2階に上がってくるなり周囲を見渡し、こちらを見た瞬間向かってきた。

ドストドスと迷惑な音をたてて俺たちのテーブルの前に立った。

腰には自分で狩ったのだらう魔物の牙が装飾品のようにぶら下がり、剣も年季が入ったように使い古されている……が、こいつには合っていない。きっと追剥かなんかして手に入れたのだらう。

「おい、てめえ、Bランクのクエスト受けた奴ってのはてめえだろ。」

ああ、そういうこと。

俺は納得したようにため息をつくが、カザスは無表情のまま眉一つ動かさず彼らをじっと見ていた。

「あれは俺たちが狙ってた依頼だぞ！どうしてくれんだ！」

「なんか言ったらどうだ?!」

カザスの胸倉を掴み、椅子から立たせると、壁に叩きつけた。

それでも表情を変えないこいつにイラついた態度を隠せないらしい。

「ってかカザスがどいたから俺丸見えですよ。」

「あ?てめえ、こいつの連れか?」

「俺がそいつの連れっていうか、そいつが俺の連れ。」

「じゃあ、てめえが俺たちに謝罪するんだな。」

何が謝罪だよ。

男たちは俺を取り囲み、武器に手を出さないものの、雰囲気は戦闘モード。

そして、男のリーダー格っぽい奴が俺の外套を掴み立たせた。

「ん?」

違和感に気づいたのだろう、外套を放した。

「おい、こいつ腕無しだぜ。」

「それでギルドに入ってるのか?馬鹿じゃねえの!」

馬鹿にした笑い声は俺の心には入ってこない。
俺よりもキレるやつが隣にいるのだから。

「何言つてんだ？俺にはあるぜ、立派な“腕”が。」

ドカツ！！

その時壁に叩きつけられていたカザスが、つかんでいた男を逆につかみ俺の目の前にいる男に向かって投げ飛ばした。

さらに背後にいた男2人も頭を掴み壁に叩きつけた。
勢いと衝撃で頭は壁の中に埋め込まれ、カザスが手を放すとそのまま頭は壁の中だった。

「カザス、壊すなつて言つてあるだろ？直すのは俺なんだから。」

「すみません。」

襟をつかんで男たちを壁から出すと完全に鼻がつぶれていた。

「まだまだだな、お前も。」

パチンと指を鳴らし、壁の穴がふさがっていく。
男たちは気絶したままでギルドの係りの人間が引きずるようにして連れて行った。

ジヨッキを空にした俺は立ち上がり、シュヴァルツをカザスに手渡す。

「行くぞ。」

「はい。」

いつも以上に大人しく、捨てられた犬のように沈んだ空気を纏っているカザスに大通りで好物のお菓子の焼き物を買ってやり、ご機嫌をとった俺だった。

あとから聞くと、ギルド内でカザスを見てたのはこいつがこのあたりで唯一のSSランクだかららしい。
そのカザスがFランクの俺につき従っているのが驚かれたのだという。

しかも犬を呼ぶように名前を呼んでいた俺を奇妙な目で見てくる奴もいたらしい。

ついでにいうと、受付嬢はカザスのファンだそうだ。

第5話『僕と彼女』

シュトレイン王国都 中央街

王都で一番の大通りの中央街はいろんな町や国からの行商が並んでいる有名な場所だ。

旅装束を買い、魔石で髪の色を茶色に変えた後、これからのことを話し合うべく、現在大きな食堂にきている。

私、ジエスティア・ルンブルクはシュトレイン王国第1王女殿下付の近衛騎士団の騎士だ。

殿下とは私が見習騎士の時から親しくさせて頂き、し、親友といわれる程に良くしてもらっている。

現在私が殿下の護衛から外れているのは、目の前にいる異世界からの救世主様を安全な場所まで連れて行くという役目をいただいたからだ。

ここまで来るのに立ち寄った店を見回してはこれはなんだ、あれはなんだ、とまるで子供のように聞いてくる。

楽しく歩いていると思ったらいきなり壁に隠れたり、私の背後に移動したりと不思議な行動をする。

私が魔石で髪を染めるのを見て『魔法みたいだ！』と喜んでいたり、ではなく実際にはこれは魔法だと言ったらさらに喜んでいました。

レン・キリヤは今は髪を私よりも濃い茶色に染まっているが、黒い髪に黒い眼という、10年前にいた救世主と同じ容姿だった。

水をつまいうまいと飲み、ただの肉の料理にも目を輝かせて食べている。

おもしろいやつだ。

「ジエスティアさんは……」

「ジエティでいいです。」

「じゃあ僕はレンですよ、様とかなんか合わないってどうか。」

そう言っつて肉をつついていいる姿は、本当に救世主として呼ばれたのか？と疑問を持たせる程だった。

しかし、身体は腕を見る限りかなり鍛えられ、第2王女の騎士団長を膝まづかせたと聞いたが、あながち嘘でもないらしい。

「あと敬語も……たぶん同い年くらいだと思っつから。」

「そうか、実は私もかしまつた話し方は苦手でな。」

「どうやら心も豊かなようだ。」

「ジエティっつて僕と同い年なのに騎士なんてすごいよね。」

「そ、そうだろうか。私より幼くして騎士団に配属されていいる者もいいるからそんなふうと思つたことはないな。」

よく言われるのは『女』であること。

女のくせに騎士になるなんて、と家の者や同僚に言われてきたが私は殿下に恩を返さなければいけない。

恩返しというよりも、殿下は私にとって友であり、母のような存在なのだ。

なんだか私自身を見てくれている殿下に似ていいる。

「レンも身体を鍛えていいるようではないか。私は体格的に力の付き方に限界があるが、君はそう見ええない。」

羨ましいと言っつとレンは顔を真っ赤にした。

「僕は鍛えても、いざ戦っつぞっつて時になると、動けなくなっつちゃっ

て……暴力が怖いんです。」

「レンは優しいのだな。」

「いえ、あの、弱いだけなんです。」

居づらそうに俯く姿に、何も言えなくなった。

「身体を鍛えてればいつか心もついて行くかなって思ってたんですけど。」

「焦ることはない。きっとその時になれば、君の答えが見つかるさ。」

それまでは私が君を守ろう。

本当に異世界に来てしまったのだと実感がわいた。

初めてのテレポートで空間酔いというものを体験して、ジエステイアさんに背中をさすってもらった。

浮遊感と何かが曲がり出てくるような感覚に耐えきれなかった。
情けない……

小さな路地裏のような場所に転移したらしく、ジエステイアさんは僕にここで待てと言い、数分いなくなつた後、マントを抱えて帰ってきた。

僕がマントを着ている時、隣でジエステイアさんは小さな石を取り出して何かを言うと彼女の綺麗な赤い髪が茶色に染まっていた。

「えっ！何それ！！？」

「あ、はい、染色用の魔石です。瞳の色は変えられませんが、黒い眼は探せばいますし。」

魔石は魔力が凝縮された希少価値の高い物らしい。

僕の髪に魔石をあて、呪文を唱えると、僕の黒い髪が焦げ茶に変わっていった。

すごい！

「魔法みたいですね！」

「魔法ですよ。」

うおおお！なんかテンションあがってきた！

本物の魔法だよ！

さっきも転移魔法？っていうのかな、それを体験したけど、その後が最悪だったから……

すごいな。

「これは魔力がなくならない限り何度もつかえますから。」

1つだけプレゼントされ、ポケットに大切に入れた。

服装と髪を確認した後、裏路地を出て大通りらしき場所に入った。

ファンタジーみたいに剣を持っていたり、ピンクや青い髪の人が多にいたり、なんか馬じゃなくて恐竜みたいなのが馬車をひいてたりする。

きよるきよる見ていると時々ジエスティアさんがその店は武器屋です。とか説明してくれる。

立ち止まれば彼女も立ち止まってくれた。

しかし、その分冒険者っぽい厳つい顔をした人とすれ違う度、なんだか睨まれているような気がして、つい隠れてしまう。壁に隠れられない時はジエスティアさんの後ろに隠れてしまう。なんて男なんだ僕は。

必要な買い物を終えたのか、食事をしようとレストランっぽいところに入った。

知らないメニューばかりが並び、とりあえず水を一口飲んだ。

「……………うまい。」

何これ、天然水よりなんか透き通ってて甘い感じがする。

地球って水がまずかったのか……………？

運ばれてきた肉料理に恐る恐るフォークを差すと、見た目よりも柔らかかった。

食べると牛肉のような味がして、しかもとてつもなくうまかった。

食べているのに夢中になっていた僕はジエスティアさんの視線に気づいた。

あ、そうだ。

「ジエスティアさんは……………」

「ジエスティイでいいです。」

そういえばお姉さんもそう呼んでたな。

「じゃあ僕はレンですよ、様とかなんか合わないっていつか。」

「ってか女性に下の名前で呼び捨てにされるのって母さんしかいないし！」

「うわ、なんか恥ずかしくなってきた。」

「肉をつついて心を落ち着かせる。」

「あと敬語も……たぶん同い年くらいだと思っから。」

「そうか、実は私もかしこまった話し方は苦手だな。」

「な、なんか話し方が男前すぎる。」

「格好いい!!」

「じえ、ジエティって僕と同い年なのに騎士なんてすごいよね。」

「そ、そうだろうか。私より幼くして騎士団に配属されている者もいるからそんなふうに思ったことはないな。」

「へえー。」

「僕ぐらいでもう働いている人がそんなにいるんだ……でもジエスティアさん……ジエティもすごいよな。」

「レンも身体を鍛えているようではないか。私は体格的に力の付き方に限界があるが、君はそう見えない。羨ましいよ。」

やっべえええええ！

すっげえ嬉しいんですけど！

女の子に褒められるとなんか恥ずかしさ半分嬉しさ半分だ。

「僕は鍛えても、いざ戦うぞって時になると、動けなくなっちゃって……暴力が怖いんです。」

「レンは優しいのだな。」

優しい……とは違うな。

弱虫なだけなんだ。

「いえ、あの、弱いだけなんです。」

な、なんか自分が情けなすぎる。

「身体を鍛えてればいつか心もついて行くかなって思ってたんですけど。」

「焦ることはない。きっとその時になれば、君の答えが見つかるさ。」

そう言われてなんだか少し心が軽くなった。

「それで、今後だが……王都を抜けることは難しい。警備が厳重になってしまっているから、通行証がないと通れないだろう。」

「どうすればいいんだろう。」

ジェティは地図を広げ、王都はここだと指でさす。

この大陸は東西南北にきっちり分けられて見えるほどに奇麗だった。この国は東の国と呼ばれ、この国から出ることが今の目標。

王都の門の前には兵が警備を厳重にしたせいで、検問も厳しくなっているとか。

「しばらくは出られないだろう。長期滞在できる宿を探して方法を考えよう。」

「そうだね。」

「すまない、君を安全な場所に送ると言っておきながら……」

地図をしまいながらジェティは申し訳なさそうに言った。

ジエティはまったくもって悪くない。

こんな僕を召還した人たちのせいにするべきだろう。

「レン、君が安全になるまで私が君を守る。約束するよ。」

それはまるでプロポーズのようで、固まってしまった。

そして、今日から僕とジエティの二人暮らしが始まった。

第6話『黒と黒』

「では次の方、どうぞ。」

「隣のは俺の連れで、はいこれ二人分。」

収納袋からギルドカードと通行証を取り出した。
入念にチェックされた後、お通りください、とにこやかに言われる。

大きな扉をくぐれば、そこはシュトレイン国の心臓、王都だ。

「やっぱり馬は駄目だな、ケツがいたい。」

ずきずきする尻を擦りながら門を通る。

フィニアで買った馬はかなりの暴れ馬で、何度か振り落とされそうになったが睨んだら大人しくなった。
それでも乗馬はやはり俺の尻には優しくなかった。

乗馬が得意なカザスは何ともないようで、依頼書を見ている。

「今度馬に乗るときはお前だけで乗れ。俺はシグニスに乗る。」

シグニスというのは俺の召喚獣の一匹で大きな銀狼だ。

毛並みがかなりよくてあいつなら長時間跨つても苦にならない！
と、思う。

「とにかく、王都も久しぶりだぜ！」

「はい、来ることはないと思っていましたから。」

かつて俺が召喚されたのはこの王都にある城の地下だった。

それからはずっと戦いを強いられていて、王都の街並みをこの視点で見るのはきつと戦後以来だ。

「やっぱり変わるもんだな。」

「はい。」

「こんなに平和なのに、何が不満なんだろうかねえ。」

とりあえず依頼を終わらせるために鍛冶屋を探すか……

あ、あれは!!!?

「カザス！カザス！あれ食べよう！」

「トリの実のお菓子ですか。」

トリの実とはこの世界で俺が一目惚れしたかなり好みの甘さの実で、月に一度王都からくる商人からしか手に入れないものだ。俺が生成してもいいのだが、やはり天然モノに限る。

カザスを引っ張って財布を出させる。

「お姉さん、これ10個。」

「お姉さんだなんて、うまいこと言うねえ、2個おまけしちゃう！」

さんきゅーおばさん！

金を支払うカザスの横でおまけに貰った分を食べる。

桃まんのような形と色で、まったく甘すぎず絶妙な美味しさだ。

「師匠、鍛冶屋はこの通りの先だそうです。」

道を聞くのも忘れないとは、成長したな。

ほら、とおまけの1個をカザスに渡した。

2人でトリの実菓子を食べながら鍛冶屋を目指す。

今の俺はフードをし、カザスはそのままの姿でいる。

黒い髪と黒い瞳の組み合わせはこの世界には存在しないらしい。
黒い瞳はあるらしいが、俺が救世主をしていた時、めっちゃ黒髪黒
眼さらしていたので、隠す必要があった。

魔石で染めてもいいのだが、面倒だ。

カザスの場合、金髪はよくある色らしく、目立つとしたら本人の容
姿だけなので気にする必要なし。

「もぐもぐ……あとで宿も取った後にギルド行くか。」

「依頼主に場所を聞きましょう。」

「そうだなーもぐもぐ。」

しばらく歩くと武器が飾られている建物を見つけた。
入ってみると結構綺麗に整頓されている店内だった。

店員はおらず、カウンターに置いてあつてベルを鳴らしたが、何分
か経っても誰も出てこない。

「留守か？にしても、鍵かけねえなんて不用心だぜ。」

ベルを鳴らし続けていたら、店内の2階あたりから魔力を感じた。
これは魔石の反応だな。

カザスも気づいていなかったみたいだし、かなりの使い手か……？

「カザス、下がってる。」

後ろに下がったのを確認し、魔法を発動させる。
指に小さな風を生み、それはナイフのようにとがった形を成した。
それを天井に向かって向ける。

「『斬り裂け』」

風は円を描いて天井を円形に切断し、パラパラと木の粉と、重力に逆らえなかった天井が抜け落ちてきた。

ドガアアアアンツ！！

砂埃が収まり、そこには仰向けに気絶している少年がいた。

ジエティと生活するための最初の問題は宿だった。

どこも長期滞在するには今あいていないらしく、さまよっていたところを鍛冶屋のおじさんに助けてもらった。

店の手伝いをするという条件付きで、お世話になることになった僕たち2人は相変わらず隠れながら暮らしている。

「ちよっくら買いたし行ってくるから店番頼むぜ。」

カバンを持っていうおじさんの後ろには茶髪のジエティがいた。

「はい。」

「私もついて行くが、大丈夫か？」

「うん、いってらっしゃい。」

と、任されたのは良かったのだが……

昨晚徹夜で魔力の制御の仕方の本を読んでいたため寝不足だった僕は店番を任されたにもかかわらず、2階の部屋で寝こけてしまった。

ちりーん。

ちりーん。

「んー……」

ちりちりちりちりちりちりちりちりーん

「はっ!!!?!」

ヤバい寝てしまった!

急いで起きて、下に行こうとするが、今日は髪を染めるのを忘れていたため、急いで魔石で髪を染める。

……と、次の瞬間だった。

床を突き抜けて僕を囲むように風が起き、床ごと落ちていくような感覚に襲われた。

怖くて動けずじままのため、床と一緒に落下し、バランスを保てず後頭部から落ちていった。

この世界に来てから後頭部にこぶを作り続けている僕だった。

落ちてきたのは茶髪の少年。

「なんだ、いるじゃねえか。」

後頭部から落ちて気絶で済むとは、こいつはかなり丈夫なやつだな。その手には魔石が握られていて、魔力の質から言って染色専用の魔石だとわかる。

「カザス、扉閉めとけ。」

「はい。」

かちやりと音がした後、とりあえず床を元に戻し、少年の下に外套を敷いた。カザスのも畳んでまくら代わりにし、茶髪に染まっている頭に魔力を当てる。

「やっぱりな。」

染色魔法が解け、現れたのは俺と同じ真っ黒の髪だった。

然と見てくる。

俺の髪を見ているのだろう。

「あれ……………黒い。」

「そりゃ日本人だもんよ。」

「あ、僕もです。」

「やっば日本人は黒だよなー。」

「そうですよねー。」

「「あはははははは……………」」

バタン

「慌ただしいやつだな。また気絶しやがった。」

第7話 『先輩と後輩』

なんだかあつたかい。

ぼわぼわと光が包んでいるようだ。

この光は何だろう、とそつと瞼をあげた。

そこには僕と同じ黒があった。

少年が再び気絶してから一時間ほど経った。とりあえずカザスに2階まで運ばせる。

2階には小さな小部屋が二つあって、落ちてきた部屋の真上がこいつの部屋だったのだらう。ベッドに寝かせ、手をかざす。

掌に水属性の魔力と光属性の魔力を組み合わせ小さな光を作り出した。

俺の手から光が溢れ、それを額に当て少年の魔力と同化させていく。水属性の鎮静魔法と光属性の治療魔法を合わせることで痛みと傷を自然回復させることができる混合魔法だ。

普通、治療魔法は傷を癒すが本人の細胞を活性化させるだけで、その細胞の寿命はかなり短くなってしまふ。

だが、水属性の鎮静魔法を加えることでその急激な活性化の負担をなくすことができる。

これは自分の魔力と対象の魔力をうまく混ぜなければいけない。

水と光の属性持ちではないと無理ということだ。

表情が柔らかくなり、瞼がびくびくと動いたと思うと、ゆっくりと目が開いた。

先ほどよりも俺を見る視線はちゃんとしたものだ。

「今度は気絶するなよ。」

「は、はい……」

戸惑いがちにうなずくのを見て手を引っ込めた。
茫然としながら上半身を起こし、後頭部に手をやると不思議そうに見てくる。

「とりあえず2個分のタンコブは治しといたからな。」

「す、すみません……」

「僕は桐谷蓮です。」

「レンだな、俺は染井雄呀。ユーガって呼べ。この世界じゃ名前呼びが主流だからな。」

そうだったのか、と呟くのを聞いて背後にいたカザスを手招きする。

「こいつは俺の弟子でカザスだ。」

無言のまま小さくお辞儀をしたカザスは再び後ろに下がる。
こいつ本当に俺以外と全然しゃべらないのか。

「俺以外には基本無口だから気にすんな。」

今まで漁師のおっちゃんとも全然話さなかったしな。

「はぁ……」

「レンは最近召喚されたんだっただな。」

「知ってるんですか？」

「お前の魔力で分かったって。俺には劣るがかなりでかかったぞ。」
笑えるくらい魔法の才能はなさそうだけど。

こういった探知魔法が使える人間は魔力探知に長けているため、魔法を使わなくても大雑把なことは探知できるのだ。

俺はその上で、魔力の質で識別できる。

こいつはそう言うのじゃなくて、もっとほかの方面にスキルがずば抜けてそうだ。

座るぞ、と言ってレンが座っているベッドの足もとに腰を下ろす。

「で、どうだ？こっちに來た感想は。」

「どうも何も……すごく怖かったですけど、魔法とかはすごいと思
いました。」

「それで現在逃亡中ね。」

凶星を突かれ、沈んだレンは大きなため息をついた。
起こっているわけではないのだが、こいつは沈みやすい性格なのか
もしれない。

「別に馬鹿にしてるわけじゃねえぞ。」

「え？」

「どうせ、救世主様」とか言われていきなり戦わされて、世界を救
ってくださいーとか何とか言われたんだろ？」

「まさにその通りでした……」

やっぱりな。

でも、あの城からよく独りで抜け出せたな、と言つと、どつやら連
れがいたらしい。

今は鍛冶屋の店主と買い出しに行っているらしく、しばらく世話に
なっていると話した。

「城の中で逃げてる時、王女様に助けられて……」

「プラチナブロンドの美人か？」

「知ってるんですか？」

「まあ、俺を召還したのあいつだし。」

こいつが使ったんだろう転移の魔法陣は俺がそいつにやったやつだ。助けたということはこいつの召喚に反対したのかもしれない。

あいつはもう“俺”を見ているからな……

俺が王都から姿を消す前、あいつと一度だけ壁越しに話をしたことがあった。

戦場の応急テントで肩を止血した後、外にいたあいつが言った。

「救世主なんて呼んではいけないかったのね。」

俺は何も言わなかったが、本心だとは分かった。

最初は強引な性格だなんて思ってたけれど、今はどうなんだろうな。

「じゃあ、俺の前の救世主って、ユーガさんのことなんですか？」

「あ、ああ。そうだけど……さんとかつけるな。外見は同じ年くらいなんだから。」

「はいい！」

中身は26のおっさんだけだな。

涙目になって返事をしてんのはまあ、許そう。

だが……

さっきからかなり気になっていたのだが。

「なぜ後ずさる。」

「え？あ、えっと、な、なんとなく……」

話す間もどンドン枕もとに近づき、眼を逸らす。

きよろきよろと挙動不審なのは動揺しているのかと思ったが、これは違う。

一瞬睨むとかなりの反射神経で頭を押さえた。

「んなことビビってどうする………それでも俺の後輩か!!!!?」

話すときは人の目を見る!!

「えええええええっ?! (後輩ってなんですかああああ?!)」

で、

「お前の性格はよく分かった。」

仁王立ちする俺の後ろには先ほど治したものよりもでかいタンコブを3段重ねにされたレンがいる。

もちろん力ザスに殴らせた（ある意味黄金の右腕）。

かなり痛そうにうなっているレンは悶えている。

「へたれで」

グサッ

「弱虫」

グサッ

「ゴビラの」

グサッ

「チキンか。」

どうだ、当たりだろ……ってなんかさっきよりなぜか空気がどんよりしている。

これ以上虐めるのもかわいそうか。

なんかこいつ見てると虐めたくなるな。

「そついやお前、逃亡したんだよな？」

「はい、でも王都の警備がかなり厳重で出られないんです。」

「……………はあ？」

話を聞けば、本当は王都を出たいのに検問を通過するための通行証を入手できず、立ち往生しているらしい。

何か方法を探しているがいい案が思いつかないのだと言う。

一言言っておこう。

「お前は馬鹿か。」

カザスに入れさせた茶を飲みながら（レンに入れさせたのはまずかった）、この馬鹿に説明してやる。

「通行証なんてな、ギルドで登録して国外の依頼受ければもらえんだよ。検問はどうだかしらねえが、フードかぶって髪見せなければたいていはどうにかなるんだ。あいつらが見てるのは魔法で色形偽ってるかどうかなんだから。」

俺たちもその口だしな、とギルドカードを見せる。

意外にこの世界の警備は甘っちょろいからな。

連れの奴はそんなことも知らないのか、と聞くと知らないと思いま

すと帰ってきた。

だめだ、こいつらのたれ死ぬ。
絶対。

「俺たちの場合は外からだっから中の検問とは違うが、だいたいはそういうもんだ。門のところに兵士のほかに魔術師っぽいやつがいたら十中八九魔力検査してるな。」

「へえ、じゃあ僕たちが髪を染めてるのって……」

「街の中じゃ大丈夫だが、検問はぜってえ引つ掛かる。」

「うっ。」

失敗したことに気づいたな。

もしかして召喚されたての俺よりひどくないか？

「その、ギルドってというのは誰でもはいれるんですか？」

「そうだな、身分証明書とかもいらねえし、俺も最近登録したばっかだから最低ランクのFだ。」

上げる気はないけど。

俺にとってギルドに入ったのはただ単に移動のための通行証が欲しかっただけで、別に賞金稼ごうとかステータスにしようとか、そんなことは考えていない。

戦いたいと言う欲求もないし（めんどいし）、俺が依頼をやってしまったらカザスがやる分がなくなるし。

優しいな、俺。

「ギルドに入るのか？」

「ジエ……連れに話してから行ってみます。」

「そうか、決めるのはお前だからな。」

どっこいしょ、と椅子から立ち上がり、外套を纏う。

扉を開けたカザスを見て踵を返そうとすると、レンに呼び止められた。

真剣な黒眼で俺を見てくる。

「おね、その、逃がしてくれた王女様が、『今度は私が戦います』って。」

『「めんなさい……っ、こんな……こんなはずじゃなかったのに！」』

「……………そっか。」

扉をくぐり、カザスが閉めようとする。
俺は隙間からレンを見た。

臆病で

弱虫で

逃げ腰。

でも……

「“また”な、後輩。」

放っておけねえなあー！。

第8話『王女と問題』

いつもは静かなシュトレイン国の城内は騒がしいほどに兵士が行き交い、騒然としていた。

南の隣国、イオカリスとの関係が悪化していく中、国内の安定も保たれていないまま、国境近くの町で市民による暴動が起きた。

領主の貴族屋敷への放火により、屋敷は全焼した。

市民は税の値上げに、貴族の横暴に、積もり似に積もっていた憤りが爆発したのだ。

その町はシュトレインの国でも大きな町の部類に入り、かなりの人数の国民人口が国に反感を抱いたと言っても過言ではない。

事態の収拾に兵を挙げるのにも遅くなり、今ではフィニアのように独立をしようとしてしまっている。

その町が独立をしてみれば、国に入る税の金額が減り、国営が苦しくなり、さらに国民の税が上がり、伝染病のように不満が蔓延していくだろう。

「ただでさえ救世主殿が行方知れずとなってしまうたという時に…」

先日、国のために召喚の儀式で呼んだ救世主は黒髪黒眼の魔力の高い人間だった。

アウリア第1王女が儀式を反対した時は、何を血迷ったか、と重鎮達は不信感を募らせたが、国王の支持と妹君であるティエル第2王女が巫女の血を持っているということで、アウリア第一王女の反対はなかったこととなった。

しかし、王女以外にも反対していた派閥は多く、その多くは兵士や騎士といった戦場に従事している者たちだった。10年前は進んで召喚に賛成していた騎士団団長も今回は首を縦には振らなかった。

召喚に成功した時は救世主を見て疑問の声がざわついていたが、王女が感じたのはとてつもなく強い魔力だったのだ。

彼は救世主である。

その噂が城内の誰もが知ることとなったとき、近衛騎士団の副団長であるアトル・ロツデイスが救世主の模擬試合をすることとなった。誰もが注目する中、救世主は手を出すまでもなく、アトルを地面に伏させたのだ。

まるで攻撃が読まれていたようだった。

と、彼は言った。

“今回の”救世主も国に平和をもたらすための礎となってくれらるう、とだれもが期待した途端に起こった。

救世主の失踪。

追跡した兵士が言うには追尾していた魔力が急に消え、足取りがつかめなくなってしまったという。

まさか、そんなことが、と包囲網を広げ、警備を厳重にし、検問を徹底的にするようになった。

だが、未だに救世主は見つかってはいなかった。

「陛下、本日はリオ・カインの件でバールティン家当主が謁見に。」

「騎士団長に任せて良い。わしは救世主の件でティエルと話がある。わしの部屋に来るように伝えよ。」

「はっ。」

王の私室の前にいた兵士は早足で去った。

自分の年老いた皺くちゃの手を見ながら、怒りのこもった大きなため息をつく。

10年前のような大きな戦いが始まるのを防ぐために呼んだ救世主

がまさかいなくなるとは思ってはいなかった。

“前の”救世主は戦いが終わったと同時に姿を消し、彼のことを伝説の英雄と煽る者までいる。

戦争が起きてしまったとしても新たな救世主が再びこの国に平和を施すことを約束してくれると希望を持っていた。

「なんと、信じがたいことが……っ。」

コンコン

『父上、ティエルです。』

「はいね。」

入ってきたのはアウリアと同じく綺麗なプラチナブロンドの髪をもつティエルだった。

アウリアの代わりに巫女として儀式を行い、救世主の召喚を行った。しかし、彼女が目を離れたうちに救世主はいなくなったのだ。

「救世主殿はまだ見つからんのか？」

「は、はい……魔力の探知も無意味でこの国にいることは確かなはずです。」

検問をしている為、かならずそういった情報は入ってくる。
黒髪黒眼、もしくはそれを隠すために髪を染めていた人間の報告は
まだ受けていない。

「この国は壁で覆われておりますから、町の正門しか出る場所はありませんから。」

「町の方にも搜索は出しておるのだろうか?」

「はい……」

王都はかなりの面積を誇っており、その分、家や店などが列をなしている。

一つ一つ当たることはかなりの時間がかかるのだ。

「徹底的に探させるようにしろ、よいな? ティエル。」

「はい! 必ず見つけ出してみせます!」

意気込む彼女とは逆に、姉は落ち着いた様子で部屋の中から空を見ていた。

傍らには彼女の近衛騎士が立っている。

年齢的にはアウリアよりも低いが、腕はかなりのものである青年だ。

彼は腰に独特の剣を下げ、微動だにせず直立している。

「彼は大丈夫でしょうか。」

「ルンブルクがついていますから、隠れてはいるでしょう。」

「さすがに通行証を用意することは無理でしたから、心配です。」

彼女の声色はかなり落ち込んでいて、青年はお茶を淹れましよう、と言った。

「あなたも、本当は彼について行きたかったのではなくて？」

ティーカップを剣だこのできた手で器用に扱う手元を見た。動揺するそぶりを見せない彼にふふ、と笑った。

「できれば、と言いたいところですが、自分は殿下から離れることはできないので。」

近衛騎士は王族付きで選抜された者で構成されている。

王族の信頼が厚い者や、実力がある者の集まる為、エリートといわれることもある。

許可なく国を出ることを禁じられ、常に王族のそばに控えている。

「それでは私が城を出たら、ついてきてくれるかしら？」

「?!それは……。」

「あなたも、あの人に会いたくはないのですか？」

いつしか消えてしまった彼の恩人。

まだ騎士になりたてだった青年の前を歩いていた背中を思い出す。

もし、また会えるのなら、一言だけでもいい。

会って、話たい。

「会いたいでしょう?」

「……しかし、国内の治安が沈静化していない中、王都から出るのは危険が高すぎます!」

自分は近衛騎士として殿下を危険な目に合わせるわけには……っ

「なんて、冗談です。」

真面目に考え、説得しようとした彼の表情が呆気にとられたものに変わった。

「で、殿下……」

「あら、おちやめでしょう?」

(あの人がいなくなっただけから、殿下は変わることはなかった。)
召喚の儀式を反対している彼女の必死さは目に見るだけでも十分辛

そうだった。

しかし、召喚してしまった後も、部屋にこもり、何かを考えている様子だった。

「でも、会いたいと思うのは本心です。会わないほうがいいということは分かっていますけど。」

自嘲気味に笑い、紅茶を飲む。

最近になってよくからかわれる対象になってしまった青年としては慣れてしまった会話だ。

それでも、心労は増える。

「自重してください。」

第9話『少年と少女』

染井雄呀と名乗った人は僕の前の救世主だった。

同じ日本人で、詳しい話はできなかったがギルドの話をしてくれたし、いい人……なのかもしれない。

そんな彼は僕の頭に3個のタンコブを残して去っていった。

帰ってきたジエティにタンコブを見られ、何があったか根掘り葉掘り聞かれた。

その時、ユーガのことを話すのは大丈夫なのだろうか、と考えた。

彼は戦争が終わった後、姿を消したと聞いた。

なぜこの町に来たのかも聞けなかったが、姿を隠して生きてきたに違いない。

ジエティには悪いが黙っておこうと決め、階段から落ちてできた嘘をついた。

ギルドの話はお客さんから聞いたと言い、すぐにギルドへ行くことになった。

なぜギルドのことを知らなかったのか尋ねると、ギルドと騎士はあまりに方向性が違うため、うまが合わないらしい。

そのため、お互いのことを干渉ということにし、いっさい関与しないことにしているらしいのだ。

「私は立場的にギルドに登録することはできないが、偽名なら大丈夫だろう。」

そう言ってギルド登録に賛成してくれた。

大通りに出ると警備兵が増えているような気がした。

初日に宿を探す際、警備兵に注意するようにとジエティに言われ、見分け方を教わったから、今までよりかなり厳重になっていることがわかる。

「早くギルドに向かった方がいいだろう。」

「たしか、鍛冶屋さんは大通りをまっすぐ行けばあるって言ったよね。」

少しだけだが、見知らぬ土地を歩くことになれ、隠れることはしなくなつた。

おどおどしていると余計に怪しまれると思ひ、出来る限り堂々とジエティの隣を歩く。

(でも、女の子の隣歩くのって不思議な感覚だ)

身長はわずかに彼女の方が高く、大人っぽい雰囲気でお姉さんという感じが。

兄弟いないからわからないけど。

彼女だからなのか、とても安心する。

ガラガラガラガラッ!

「危ない!」

ぼーっと考えていた僕は後ろから来ていた音に気付かず、ジエティに手を引かれた。

助けられた僕はひかれた反動で倒れそうになったのを支えられた。

「大丈夫か、レン。」

「ありがとう……」

「いや、怪我はないようだな。……しかし、今のは貴族の馬車か。」

今はもう小さくなってしまった姿を見てそう言ったジエティは眉を顰めた。

あんなにスピードを出して、この世界では規制速度というものはないのだろうか……

「普段もあんな速さなの？」

「せっかちな貴族はそうだが、あの家紋はバルティン家のもので、普段はもっとゆっくりだ。」

それに、大多数の貴族は皆権力争い以外にはのんびりだ。そう言って再び歩き出す。

「何か急ぎの用件があったのだろうか。」

「ほ、僕のことじゃないと良いけど。」

「心配することはない。すぐに国を出よう。」

気づくと大きな建物の前にいて、周囲にはいかにも冒険してますという風貌の人たちが溢れていた。

「レン、私から離れないでくれ。」

「わかった。」

ずいぶんと大きな建物だ。

市役所みたいな感じなのかな、と地球風に例えてみた。

ジエティに『シヤクシヨ』とはなんだ、と聞かれ、あわててなんでもない、と言った。

「おい、邪魔だ、どけ！」

「ちょっと、足踏んだぞ！」

「ちっ、クエストとられたぜ。」

「んだあっ?! やんのかコラア?!！」

に、逃げたいです。

わくわくして入ったそこは地獄でした。

すたこらと入っていくジエティに置いて行かれないように必死に歩いて行く。

歩くたびに他の人にぶつかりそうになる。

「おい、餓鬼! 気いつける!」

「すみません!」

泣きそうになりながら謝り、またぶつかっては誤り……

気が滅入る。

「ぎ、ギルドってこんなに混んでるところなの？」

「私も初めてだからわからないが、異常だと思うね。」

やっと受付らしき場所を見つけた。

そこは案外空いているらしく、やっと落ち着いた。

「大丈夫か？レン。」

「うん。はやく受付すませて帰ろう。」

受付には女性がいて、何か作業をしていた。

「すみません。」

「あ、はい。こんにちは。」

驚いた表情で頭をあげた女性は丁寧にあいさつしてくれた。
こんにちは、と返す。

「ご登録の方ですか？」

「はい、二人分お願いします。」

では、こちらにご記入をお願いします、と用紙を渡され、ペンを持った。

こちらの文字は本を読んだだけでなぜか理解できた。
何故かはわからないが、それが僕に与えられた力の一部なのかもし

れない。

記入が終わり、女性に渡すと確認作業の後すぐにカードが渡された。

「ギルドについての案内はこちらの注意事項に書かれているので、よくお読みください。」

そう言って薄い一冊の本を渡された。

「すぐく丁寧だな、と思ってパラパラとめくってみると、かなりの量の文章があった。」

あ、後で読もう。

「依頼掲示板と受領カウンターは2階になります。」

「ありがとうございます。」

「頑張ってください。」

「なんか、あつという間だったね。」

「でも、これから王都外への依頼を見つけなければならぬな。」

「そうだった……」

依頼掲示板を探していると見たことのある後ろ姿があった。

人が大勢いても金色に光るその髪は動かずに掲示板を見ているだけだった。

「どうした？」

「いや……」

先日は一緒だったはずのもう一人の姿はなく、どうやら一人らしい。それにしても、かなりの存在感だ。その背負っている大刀もそうだが、何かが発せられているのがわかる。

彼……カザスさんの周りにはあまり人が集まらず、避けているように見える。

カザスさんが見ているのはAと書かれた依頼掲示板だった。

「あの男。」

「え?!」

僕が見ていたことがばれたのかと思った。

「あの背負っているのは魔剣だな。」

(ち、違った……よかった)

彼女はカザスさんの背負っている剣を見て驚愕の表情を浮かべていた。

魔剣……やっぱりそういうのはあるんだ。

彼が背負っているのは真っ黒……漆黒と言った方がいいか。

小さく目立たない程度に装飾が施されているが上品で高価に見える。

「魔剣ってやっぱり珍しいもの？」

「ああ。その製造方法から素材まで謎が多いんだ。剣自身も使用者を選ぶらしい。」

「へえ。」

カザスさんはこちらに気づかないみたいですがどこかへ行ってしまう。

その時も周囲の人間は微妙に道を開けていた。まるで関わりたくないといったような感じだ。

僕たちも依頼を見ようと思い、踏み出そうとすると誰かとぶつかってしまった。

ガスッ

「あだっ」

鼻に衝撃が行き、ぶつかったのは何か硬い物でかなり痛かった。

「ちょっと!」

「ふえ？」

鼻を押さえていると下の方から声が聞こえた。

見下ろすと小さな女の子が僕を睨んでいた。

カザスさんよりも茶に近い金髪をツインテールにして、ビキニのよ

うなものにショートパンツ風の露出度の高い服を着ている女の子だ。身長は僕の胸当たりより小さい。

彼女は僕を指さした。

「気をつけなさいよ！ほんっと人間つてのろまが多いのよね。」

そう言っ**て**ぶつか**った**物……巨大な槍斧ハルバートらしきものを背負い直した。身長よりかなり大きい為、背負っても床を引きずっている。

「今度あたしにぶつか**った**ら……埋めるから。」

ドスの利いた声で言われ、思わずちびりそうになった。

「ごめん！」

「ふんっ」

そっぽを向いて依頼掲示板に向かう彼女も冒険者なのだろう。ズズズと槍斧を引きずり歩く姿はかなり勇ましい。

ポケットしていると、ジエティがいつの間におらず、依頼掲示板にかじりついているのを見つけた。

「なにかあった？」

「いや……DからFランクで王都外行きは難しいな。」

見れば、どれもこれもお使い程度のも**のだ**った。

犬の散歩。

落とし物探し。

掃除。

ぼ、ボランティアかなんかなのか？

「あ、これはどうだ?!」

「なになに……郵便配達か、宛先はココン?」

見せてもらった地図には確か、王都を出て少し行った先にある森の中にある場所だった。

「これなら近いからすぐ依頼も終わるし、王都から出られる。」

「これにしようか。」

依頼掲示板から破り取り、カウンターに持っていく。

パーティ申請をして確認すると、郵便物を渡され、ジエティが持っている袋に入れた。

とりあえず目的は達成した僕たちは混んでいるギルドを出てとりあえず空気を吸った。

「「すう……はぁー」」

二人して一緒にしていたので、思わず顔を見合せて笑ってしまった。

「出るのは明日にしようか。店主殿に礼もしたいし。」

「そうだね、商い通りの方に行く？」

「いい案だ。」

大通りの隣の通りには商い通りと名前が付いていて、その名の通り外から来た行商が場所を借りて商売をしている。珍しい物が多く、大陸中の商品が集まると噂もある。

通りに出るとそこにも人は集まっていた。

「うわぁ……やっぱりすごいよね、ジエ」

と、話しかけようと横を見たが、誰もいなかった。

「あ、あれ?!」

周りを見てもジエテイらしき人が見当たらず、焦りを感じた。
人、人、人……

や、やばい……迷った？

「どうしよう、ジエティがお金持ってるから何かしら買ってきてくれると思っけど……」

とりあえず壁際に行き、人混みから外れることにした。

「すみません、すみません。」

そう言っつてぶつかる人に謝り……あれ、なんかデジャブ？と思いつながら、壁際に辿り着いた……と、思ったら路地裏に入ってしまった。

転移した時よりも道は広いが、暗くて、夜になったら完全に見えなくなるんじゃないかと思うくらい陽が当たらない場所だった。

「なんかじめつとしてるな……」

湿った地面を感じていると奥の方に気配を感じる。

怖い感じの気配ではないのはわかり、恐る恐る物陰を覗くと影が見えた。

そこには小さく丸まったぼろい布があった。

第10話『聞きたいことと聞けないこと』（前書き）

PV100・000ビットありがとうございます。

まだまだ未完成な部分もありますが、よろしく願います。

第10話『聞きたいことと聞けないこと』

「『あ』『い』『う』……」

コンコンコンコンコン……

一定のリズムでインクの付いたペンを紙の上で叩く。
ジワリと紙にインクがしみこんでいく。
静まり返った部屋の中、机にあるのは文字？が書き連ねられた紙
の山と開いてある数冊の本。

コンッ……

「カザス、遅えなあ。」

誰もいない宿の部屋で備え付けの机に向かい、ひたすら文字の練習
をしていた。

10年間続けていた自分の努力は実る兆しが全く見えない。

俺はなぜかこの世界にきてから左手が異様に不器用になり、武器を持つ時も右手か両手持ちとなっていた。

左手で武器を持っても空振り、手からすっぽ抜け、思わずカザスにぶつ刺さりそうになったことがある。

物を投げてもどこに飛ぶかは運次第で、殴るかつかむか、用途は限られる。

さらに、俺自身に流れていた魔力が腕の分、削られたのを知ったのは、魔力に違和感を覚えたことからだった。

右腕を斬ってからは剣を持つこともできず、その分さして問題のない壮大な魔力での魔法が俺にとって最重要のものとなっていった。

俺の腕が城にあることは噂で知っている。

英雄の腕なんて言われ、宝物庫に保管されているという噂は国中に広がっていた。

今更腕が戻ればいいとは思っていない。

いや、戻すことはできるが、俺にとってそれはカザスの存在を否定し、自分自身の心を否定することに繋がる。

わがままなだけかもしれない。

戦いたくないと駄々をこねて、カザスを連れて、王都から逃げて……
まるで戦争には勝ったのに負け犬みたいだった。

レンのこと、馬鹿にできねえよな。

ペンを放って、ベッドに寝転がる。

魔力を失った魔術師と剣を使えない剣士は戦場には立てない。魔術師が魔力を失くすことはただの人となり下がること。剣士が持つべき武器を扱えなくなることもまたしかり。

二つともそれは死を意味する。

この世界の人間は伝説や宗教、規則を重んじる。

特に、シュトレインは平和に危機が訪れた時、救世主を呼んだという伝説を信じ、実際に俺を召喚した。

戦争も将が死ぬことでそれが終結される。

それが唯一の方法。

ただ将が生きてさえいれば戦いは終わることはない。だから示す。

『この首は戦争終結の証の価値を持つのですぞ』

コンコン

ノックをして入ってきたのは確認しなくてもわかる。

背負っていた剣を立てかけ、向かいのベッドに座るのを横目で見た。

「何かありましたか。」

抑揚のないその言葉には彼なりに意味を込めたのだろう。

ずっと一緒にいたが、無表情の彼が心の中でいろいろ考えているのがだんだんわかってきた。

無表情なのはそう言ったものと無縁な生活だったせい。

言葉が少ないのは何を言えばいいのか整理がつかないから。

不器用なやつだ。

「あるとすれば、左手で生み出したこの古代文字もどきだな。」

俺の不器用さを身に感じて知っているカザスは机に広げられた紙の束をまとめ始めた。

その後ろ姿を見て、でかくなったよなあと親心を覗かせる。

ちっさかったのに、いつの間にか俺を追い抜いて……

俺より剣が強くなって。

今までずっと俺の右腕として生きてきた。

俺がいらない、と言ったらこいつはどうするのだろう。

俺の腕となつて、剣となつて戦うカザス。

さっき、こいつがいなかったとき、俺が消えたら……そう考えるのは初めてじゃない。

レンに護衛にやるのもいいかな。

「お前さ、」

話しかけると何があっても必ず反応し、振り向く。

俺が死んだらどうする？

「師匠？」

「お前、えっと、俺がレンについていけって言ったら行くか？」

「いきません。」

「だよなー。」

はっはっはと自分を誤魔化し笑った。

「俺は師匠以外の誰とも一緒にいるつもりはありません。」

俺は、師匠の右腕です。

決まりきったセリフを吐くバカで可愛い弟子は意外に頑固だ。
本当に何をして俺についてくるに違いない。

俺が切り捨てない限り……

カザスはまとめた紙をごみ箱に詰め、一冊の本を懐から取り出し俺に差し出してきた。

表紙には『釣りの極意（初級編）』と書かれている。

今回のお土産か。

渋々身を起こし、受け取った。

膝に置き、表紙をめくるとファンシーな絵が出てきて、これまた可愛い字で書かれた文章が。

『釣りをするときには天気に注意してね』

『釣針は、人にさしちゃだめだよ』

『お魚さんにはやさしくね』

いらねえよ！

天気なんてそんなもんわかってんだよ！

釣針なんかで人はささねえよ！

つてか最後の意味わかんねえよ！

いろいろと突っ込みどころのある本を勢いよく閉じた。収納袋にそっと入れ、封印することにする。

今までで一番イライラする土産だ。

「師匠、それで依頼のことですが。」

「ああ、忘れてた。めぼしい依頼はあつたか？」

「いえ、ありませんでした。明日になれば依頼が更新されますから、また確認しに行きます。」

「そのころには鍛冶屋にまた行つて、依頼終了させねえとな。」

ギルドの依頼は2つ同時に受けることはできず、先ほど王都のギルドの偵察がてら依頼掲示板を見に行かせた。

元々宿で一泊する予定だったから少々の狂いは問題ない。

「傭兵崩れもいただろ？」

「はい。」

この宿もやつとの思いでとれた部屋だ。

戦場を稼ぎ場所とする傭兵が集まり、王都に滞在しているのはいつしかおこる戦争に参加するためだ。

それだけ鍛冶屋も傭兵も稼ぎ時となる。

「なにもなかったらどうな？」

「はい、俺はSSランクなので、喧嘩を売ってくる人間もいませんでした。」

「よかったよかった。」

いろんな意味で。

こいつが1人で喧嘩なんか買ったら、そこはもう地獄と化すだろう。一度だけそれを見たことがあるが、愛剣のシユバルツを神速の如く

振り回し容赦なく相手をめった切りにしていた。(その後俺がその被害者が死ぬ寸前に助け、カザスをなだめた。)

俺を無駄に自分のせいで働かせてしまったことに後悔したのか、その後ずつと俺の後ろをとぼとぼと歩いていたのを思い出す。

最終的に次は気をつけるよ、と声をかけてから、喧嘩を買うつきはなぜか喧嘩を売ってきた相手を俺の前に引きずってきて、「喧嘩をしてもいいですか?」と聞いてくるようになった。

あの時、相手は土下座して泣いていた。

なんか最近昔を思い出すと気分が沈んでくる。
俺も年かな?

「ええい！カザス、出るぞ！」

「?」

どこに?といった表情に俺は窓の外を指さす。

「さっきおかみさんに聞いたんだけど、大通りの隣に商い通りつて言うのができたらいいんだ。珍しいもんがあるかもしれないからお前が帰ってきたら行こうと思ってたんだ。」

行くだろ?

初めて来た場所はあまり感動できなかった。

「すげえ人だな。」

俺がいた頃はただの道だったが、他国との国交を含めて行商に開いたのだろう。

「はい。」

カザスは定位置の一つである俺の右隣にしっかりと立ち、同意した。賑やかで店もたくさんあるのはわかるが、その店が見えなくなるほど人が行きかっている。

「これじゃはぐれるかも知れねえ。」

魔力で探知する方法はカザスには使えない。

カザスは魔力を持っていないから反応がないのだ。逆にカザスはなぜか俺を見つけてるのが得意で、レーダーが何かついているのか、と聞いたら『れえだあ』とはなんですかと逆に聞かれた。

「師匠、俺から離れないでください。」

「それは俺のセリフだ。」

とりあえず店がありそうな場所に目星をつけ少しずつ進んでいく。いい匂いがしたり、店員の大きな声が聞こえたり、楽しい場所だな。

しかし、たまにすれ違う騎士服の人間はレンの捜索をしているのだろうか。

広域探査魔法を使える人間は少ない。

多少感じるくらいでもすごいのだ。

王都にいる探査魔法使いは検問に配備されているはずだ。

(ほんと、甘い警備だ。)

「師匠。」

「ん？」

「迷子になりますよ。」

「おまえなあ……」

商品を手に取り俺を見る。

「なんだそれ。」

「魔笛だそうです。」

魔笛は魔具の中でも呪術に用いられるもので、その音色は不幸を招き、聞いた人間に死をもたらすとされている……が、伝説だ。

その手にあるのは魔力の欠片もないただの装飾の凝った笛であり、
魔具ですらない。

「やめとけ。」

「はい。」

別段、気に行っていたわけではなかったらしく、すぐにもどし、さら
に他の商品を手に取っていた。

次にとったのはほんのり魔力を含んだ、小さな真珠くらいの大きさ
の魔石がワンポイントの髪止めだった。

「お前、そんな趣味あったか？」

髪止めをつけるカザスなんて……似合うか？

美形だから似合うとかはないな、こいつは男前だから絶対に浮く。

「いえ、細工が細かったので。」

「それもそうだな……俺、芸術方面はからつきしだから、ただの髪
止めにしか見えん。」

欲しいなら買えばいいと言っても元の場所にそつと戻していた。

この髪止めについていたのは光属性の魔力が凝縮されている魔石。
持っていれば治癒魔法と光属性の結界魔法が2、3回しようだきる
だろう。

カザスがいいなら言う必要もないか。

（お？）

ふと、眼に入ったのは微量だが、魔力を纏っている腕輪だった。よく見ると表側に小さな封印魔術の陣が描かれている。

昔、奴隷に嵌められているのを見たことがある。

解除はこの腕輪を嵌めた人間か、魔術師にかできない。

魔法というのは魔力が絶対的なもので、それがなければ魔法は使えないし、魔力があってもそれを魔法に変換する能力がないと魔術師とは言えない。

主に魔法というのは二つの方法の上に成り立っている。

1つは詠唱による発動。

詠唱はその言葉に魔力を乗せ、術に変換する行為だ。

詠唱が途中で止まると、魔力の流れが止まり、術は発動しなくなる。上級魔術師は詠唱破棄というものを使うことができるが、それは詠唱ではなく術名そのものに精密さとその術に必要な魔力を込めるものだ。

それは簡易的なものと見えるが実はかなり難しい魔力操作を行っている為、出来たとしても中級クラスの詠唱破棄までしか詠唱破棄は今現在不可能と言われている。

もう1つは魔法陣による発動。

魔法陣とは詠唱とは別に、魔力で陣を刻み術を発動させる古いやり方だ。

魔法陣に刻む文字は古代アトス語と呼ばれる古い文字で、今のアルカトスの言語であるアトス語の原型とも言われている。

術ごとに詠唱が異なるように、陣に刻む文字も一つ一つ違う。

魔法陣の特徴は詠唱する必要がなく、さらに、その陣の色は発動する魔法の属性によって違うところ。

火なら赤、水なら青といった具合である。

陣を描くには古代アトス語による魔法の理解と、高レベルの魔力操作が必要となる。

陣を刻むのに時間はかかるが、魔力操作に長けるものほど陣の形成が早く、有利になる。

さつきも言ったが、魔法陣は魔力で刻まれるものだ。

その魔法陣は魔力が発動者しか消すことができず、この腕輪の陣も魔力によって刻まれているもので、これをした人間は魔術師でない限り、自分では何もできないに等しい。

こんな腕輪をされたらたまったもんじゃないよな。

「それは……」

「お前は縁遠いかもしれないけど、これには気をつける。この陣から察するに動きを封じる術が掛けられてる。」

俺がいるからすぐに外せるけど。

「それは魔具なのですか。」

「封印……というか、すでに拘束用だな、こりゃ。」

このままにしておくのも、変な奴が買って行ったらえらいことになる。

「おっちゃん、これもらうよ。」

「銀3枚だよ。」

それを聞いたカザスが銀3枚を払う。

腕輪を袋にしまと、興味があるのかそれをじっと見ているカザス。

「どうするのですか？」

「ん？お前が暴れそうになったらこれで………なんて、するわけねえだろ。用心のためだよ。」

固まった顔をしたままのカザス後ろに、店から離れる。

次行くぞ次！

と、勇ましく進んだはいいものの、人の波は予想以上に凄まじかつ

た。

「かぁーざすうー、せんせーをおいてどこいったんだよーい。」

壁際に寄りかかるようにしてしゃがみ、人込みに向かって行ってみた。

これであいつが気付いたら俺探知レーダー説は本物だ。そうしたらカザスをメカザスとよんでやろう。

「あいつのことだから女に囲まれてたりすんのかな。」

顔はいいからな。

俺が生活力皆無のおかげで家事もできるし。

もう、ありゃ主夫だな、主夫。

俺も女の子に囲まれたい……と、無駄な夢は見ないことにしている。

「だからはぐれるなって言ったのに。」

そう言つてのんきに青い空を眺めているとふと近くで魔力が動くのを感じた。

「（あー、これは火属性かなー……魔術師かあ。魔力の質が同じだから1人、喧嘩か？）」

魔力が発せられ消え、再び発せられ消え……相手は魔力使っていないのに魔法で攻撃とか、プライドないねえ。
俺もそんなプライドはありませんけど？
ムカつくやつは魔法でぶっ飛ばす主義ですけど？
よほどできる魔術師でない限り、普段はカザスに任せているからそんなことはめつたにないが。

「ただの喧嘩ならいいか……ん？」

ピリツと……違う魔力が感じられる。

この魔力は知っている。

痛い流れを持っている魔力は俺の魔力を刺激してくる。

「（これは……あのたんこぶか。）」

カザスのことは後にし、すぐに立ち上がって方向を確かめると小さく探知されない程度の転移魔法発動した。

その場から一人がいきなり消えても、流れていく人々は気付くことはなかった。

1人、大きな剣を背負った青年以外は。

第10話『聞きたいことと聞けないこと』（後書き）

近いうち、題名改変を予定しています。

題名改編後は告知します。

第11話『奴隸と勝負』

「あ」

「?!」

僕が声をかけようとする布の中からびくうっという効果音を思わせるほどに頭が出てきた。

煤が顔についていて、痩せているが可愛い感じの女の子だった。蹲っていた姿から変わらず、頭を少し上げて僕を見る。

その瞳は見覚えがある。

誰かに怯え、何もかもが的に見える目。
鏡越しに見たことのある自分の目だ。

女の子に合わせてかがむと、またびくっとしていた。

「どっしたの?」

「……」

「お母さんは?」

「……」

「じゃあ、お父さんは？」

「……」

この姿は迷子……じゃないか。

こういう世界だとかういう子は言うてはいけないのだろうけど、奴隷ってやつなんだろう。

ふと布の隙間から見えた手首に何かがはめられているのがわかった。手をとろうとすると後ずさられた。

「大丈夫だよ、ちょっと手を見るだけだから。」

そう言ってもなかなか見せてくれない。

それもそうか、急に手を見せてはないもんな……

「（うーん……）あ、そうだ。」

僕はポケットから使いなれたものを出した。

現代社会の必需品、携帯電話！

電波も何もないが、充電はいっぱいだったのでまだ使える。

携帯を操作している最中、ちらりと女の子の方を見ると少しだけ興味深そうに見ている。

ちよっと笑って目的の物を見つけ、女の子に見せる。

「ほら。」

「……」

目を見開いて携帯電話の画面に注目している女の子。
彼女に見せているのは僕の愛猫、ぼたもちちゃん（ ）だ。
ふわふわの毛並みにいつも癒され、勇気づけられてきた可愛い可愛い家族だ。

ああ……いまどうしてるだろうか。

「可愛いでしょ？まだあるんだよ、えっとね、これがおなか出して寝てる姿で、こっちが猫鍋だよ。」

「……」

何も言わないが、すごく興味を持っているらしい。

「元気出た？」

「……」

ゆっくりだが小さく女の子はうなずいた。
そして、戸惑いがちに片手を出した。

そこには銀色の腕輪のようなものがはめられ、何かが刻まれていた。

「これは……」

女の子は差し出した手を自分の喉元にやり、その後もう片方の手と合わせて×マークをつくった。

「声が出ないの？」

そう聞くと、腕環を指さし先ほどと同じ動作をした。きつとこの腕輪に何かしら魔法みたいなものがかけられていて、そのせいで声が出ないのか。

「ユーガさんならどうにかできるかな……」

でも、いつあの人に会えるかどうかもわからないし……
僕、ほんと何もできないなあ。

「……」

はあ、と俯いていると頭に感触があった。
頭を上げると女の子が小さい手で撫でていた。

「……！」

僕が見ていることに気づくとすぐに手を引いて、俯いてしまった。

「あはは。」

似た者同士と思って笑ってしまった。

それを聞いて女の子も顔をあげ、茫然と見ている。

僕は女の子の手を取り、立たせた。

「おいで。」

「……？」

「それを外せるかもしれない人を知っているんだ。まだ、町にいるかもしれない。」

女の子に言って手を握ったまま路地裏から出ようとした。
ほっと安心した時だった。

ゴォーンッ!!

頬を熱風が通り過ぎるのを感じた。

僕たちの真横に大きな火の塊が飛んできたのだ。

それは壁を破壊し、勢いで飛ばされそうになった女の子をかばって
僕は彼女ごと壁に叩きつけられた。

不思議と痛みはなかったが、驚いて破壊された壁を茫然と見てしま
った。

再び何かが向かってくる気配がして、反射的に避ける。

先ほどまで僕らがいた場所の手前には焦げ跡だけが残っていた。
まるで映画のように爆弾を投げられたような風景だった。

「（い、いつたいなんなんだよー！）」

かなり内心パニックになりながらも女の子の様子を見ながら近くの壁に隠れた。

コッ……コッ……

「あーあ、なあって避けんのさあ。」

影になっていた通りから一人の男が出てきた。

焦げ茶色の髪に黒に近い赤く染まったマントを着こんで、その手には細身の剣が握られ方に乗せるようにトントンと叩いている。

こちらに近づくとぼくらの姿が見えたのか、にやりと笑った後、僕と女の子を見比べた。

「いち、にーい……んあ？一人じゃねえじゃん、あの糞貴族、ここらに逃げ込んだ奴隷ってどっちだよ。」

ザクッ

ちっと舌打ちして叩いていた剣を地面に刺した。

そして何を思ったのか地面にしゃがみ込み、はあーと深い深いそれ

は深いため息をついた。
そして頭をガサガサと搔いたあと、急に止めたかと思うとバツとこちらを見た。

女の子と一緒に僕はそれにびくつとした。

「あー、あのさあ、おたくらさあ、どっちが奴隷さん？」

奴隷……この子のことなのか。

「俺あどっちでもいいから、連れてって、金もらって、とっとと」
「っから出ていきたいのよ。」

わかる？と首をかしげる。

二人が何も言わないとわかると、男はむっとした表情をしてはいはい、そうですか、と言って立ち上がり剣を取った。

「しっかたねえ、それっぽいそっちのぼろっちい“ちびっこ”を連れてくか。」

独り言のように呟き、男は動いたと同時に僕の目の前に来た。

「とりあえず、お前は邪・魔。」

「（み、見えなかった!!?）」

剣を振り下ろした男から女の子を連れて後方に飛びのいた。
避けたことが意外だったのか、わずかに目を細めたがそれも一瞬ですぐに僕に追い付いてくる。

「いい、逃げ方だが……」

女の子を庇いつつ剣を避けたがその先に剣が閃き、かろうじて避けた僕の頬にピリツと痛みが走った後腹を蹴り飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「お前、俺についてくるたあ何もんだ？ガキ。」

「た、ただの一般市民です……よっ!!」

「!?!」

近づいてきた男の足を払い体制を崩し、間合いを取る。

いきなり斬りつけられて驚いたが、ついていけない速さではない。

何故かこの世界に来てから体が軽く感じる。

あのお城の中を気配を消しながら走り続けても疲れは決してなかった。

「（剣は怖い……けど、あの子はもっと怖いんだ……っ）」

ちらりと隠れている少女を盗み見る。

「まったく、奴隷つれてくただけですぐ終わると思ってたんによっ。」

ゆっくりとした動作で構えていた剣をおろし、マントの下にしまった男は、その手にしていたグローブを確認するようになりとっけ直した。

その行動に構えていた僕は冷や汗をかき、足が震えそうになるのをこらえた。

「俺は本気のサシ勝負をするときは相手に合わせる。てめえが拳で来るなら同じ条件でやり合う！それが俺の流儀だ。」

さっきまで悪役っぷりを発揮していた男は、にやりという効果音が似合う表情を浮かべ拳を構えた。

先ほどとは違うまったくの別人のような気配だった。

ごくりと唾を飲み、手汗を握る。

ヒュツといった呼吸音と共に一気に距離がなくなり、互いの拳が行き交った。

軽い身体は自然と僕の心を押しているように思うように動く。対峙している相手は恐ろしく強い、怖い相手……

僕は何をしているんだろう。

「ちっ、かてえ、なっ！お前！」

「はあっ、はあっ。」

ガードをとき懐に飛び込みアッパーで突き上げるが交わされ逆に後ろ回り蹴りを喰らう。

とっさに腕を使うが風圧と共に飛ばされる。

この世界の人間は化け物ばかりか？！

「そろそろお開きにするぞ。」

もう気配を感じた瞬間には遅かった。

「うがつ?!」

「つーかまーえた。」

首を掴まれ壁に抑えられる。

片手でつかまれていてもかかわらず、その握力はかなりのものだ。叩きつけられても痛みは少なかったのに、やはり器官を圧迫されるのは違う。

「俺もさあ、暇じゃねえんだ。」

抑えている腕とは反対の手が差し出され、「フレイム」と呟いた男の手に炎が灯る。

「お前には悪いけど、見た奴は殺さないとお金もらえないんだよね。」

だから……

「悪いな。」

炎の灯った手が僕に迫り、眼を閉じた。

こんな世界に呼ばれて、こんなことになって……

それで……これで終わりなのか？

僕は……

「その手を離せ。」

炎の熱さが消え、眼を開ける。

男は僕ではなく自らの後ろに視線を向け、だが動けずにいた。

彼の背後には銃を突きつけるように男の首に人差し指を当てているユーガさんがいた。

前にあつた時とは違う、真剣な目だ。

「首から上が惜しかったら離せ。」

「……………わあつたよ。」

冷え切つた声色で言われ、男はすぐに僕の首から手を放し、両手をあげた。

僕は解放され、力が抜けたように壁をずるずるとへたり込むように座り込んだ。

「あ……………」

どろろ……………」

「離れたんだから、これ、どけるよ。」

視線でユーガさんの指を見て言った。

戦意を感じない今の男に少しの警戒心を残し、そつと指を外したす
ぐに、僕のそばにきて無理やり立たせた。

男はマントのフードをかぶり、こちらの様子を見ている。

「さっきの爆音で警備兵が来る。てめえもいけ。あと、その幼女
は奴隷じゃない。おいていけ。」

「いやいや、そりゃ困るってもんよ。俺だって文なしだし。」

「知るか。さつさと消えろ。」

おちゃらけた様子の男の言葉を一蹴した。

その言葉に先ほどの脅しが重なったのか、素直にはいいい、と言っ
て背を向けた。

「ま、俺も“仕事”だったから。こつちもまあ喰らったし、どっこ
いどっこいだな。」

最後に僕を見てからまるで友人に挨拶するようにじゃーねえ、と手
を振りつて男は歩き出した。

暗闇に溶け込むように消えていった男の後ろ姿を見ていた僕は、い
きなり頭を叩かれた。

「ぼーっとしてんじゃねえ、さつさとここからずらかるぞ。」

はっと気付くと男が去っていた方向と逆から数人の足音が向かって
くるのが聞こえる。

舌打ちをしたユーガさんは僕と女の子の手を引きあたりを見ている。

「転移するにも3人で魔力隠蔽はきついな……」

「お前たち！なんださっきの騒ぎは！？」

警備兵らしき人たちは剣を構えこちらに向かってくる。

僕は結構ぼろぼろで戦えないし、ユーガさんはやばいといった顔をしている。

女の子は僕にしがみついている。

僕たちの様子を見て、あやしいと思ったのか拘束する！と向かってきた。

やばいっと思った瞬間だった。

向かってきた兵士が一気にとつぜん糸が切れたように地面にスライディングして転んだ。

(い、痛そう……)

彼らが倒れた後ろから現れたのは大剣を背におさめているカザスさんだった。

音も気配も感じなかった。

「師匠。」

そう言った彼に反応したのはユーガさんで、「め、メカザス……」
とわけのわからないことを言っていた。

「あの、この人たち……」

「生きてるから大丈夫だろ。それより、行くぞ。」

「は、はい。」

女の子はカザスさんがそつと抱き上げ、ユーガさんたちと一緒に僕も彼らの宿に行こうとしたが、ジエティのことを思い出した。

彼女とはぐれてしまったことを話すと、彼女は僕を探してこの路地裏の近くにいたが、カザスさんが気を失わせて彼らの宿に運んでおいたことを無口だった彼から伝えられた。

なぜ彼女のことを知っていたのか聞くと、王女の騎士は有名で、一度顔を見たことがあり、覚えていたらしい。

「さすが俺の右腕。」

と、彼の頭をガシガシ撫でる。

「師匠ならそれを望むと思ったので。」

と、まるでエスパーのような、電波のようなことを言ったぼさぼさ頭のカザスさんの声は抑揚のない無機質な声色だった。

第12話『首と右腕』

王都街貴族館

王都の貴族が住む屋敷が点々と並ぶそこを、ひとまとめで貴族館と呼んでいた。

上級貴族から下級貴族までがいるそこはどこよりも整備され、綺麗な通りを保っている。

綺麗な身だしなみをした貴族たちやその使用人などが歩いている貴族館の道を、この場にふさわしくないマントをかぶっている人間が、迷わずにしっかりとした足取りで一つの屋敷に入っていた。

扉の前に来ると警備兵が立っており、顔を知っていたのか要件を知っているようですぐに扉を開けた。

屋敷に入れば、無駄に豪華な内装が広がり、それすら目に入らぬ様子でまっすぐに目的の部屋にノックもなしに足蹴で強引にあけた。

バキッ

バコンッ！

枠から外れた扉は穴が空き室内に向かって倒れた。

部屋の中にいた貴族の男はそれを見て憤慨している。

しかし、それを無視して、座っている男の顎を掴み顔を寄せる。

「奴隷は死んじまってたぜ？」

「ななな、なんだとお?!あれは父上からもらった奴隷なのに！」

「ほら、さつさと金出せ金。奴隷を探すつてのはやってやったんだからよ。」

剣をちらつかせ、貴族の男に言うと、懐から小さな音を聞き取った。胸元に手を差し込み何かを掴み出した。

「ちゃんとあんじゃねえかよお。へっ……まいどお。」

銀貨が入っている袋をそれごと懐にしまい、顎を放す。

貴族の男はまだ脅しが効いているのか、一言も話そうとしない。

もう用済みだと言わんばかりにマントを翻し、窓の方へ向かう。そして、手すりに飛び乗ると音も立てずにそこから飛んだ。

貴族館の敷地を囲むようにして建てられている塀の上に着地し、商
い通りの方角を見る。

「また、会いたいもんだねえ……」

大きな風が吹き、マントがたなびくと同時に彼の姿は消えた。

小さな宿の奥の部屋、そこには5人の人影があった。

ベッドに座らせた女の子の腕を優しくとり、細部まで見る。

隣に立っていたカザスに目で合図し、代わりに彼女の腕を持たせる。雄呀は人差し指で彼女に嵌められている腕輪の魔法陣をそつと撫でた。

すると腕輪はそつと彼女の手を滑り抜け、床にカランと音を立てて落ちた。

女の子は腕輪の取れた手を見て驚いている。

「どうだ？声は出るか？」

「あ……う……」

まるで生まれた赤子のように言葉を発する。だが、話すというレベルではないようだ。

「たぶん話し方を知らないんだろうな。小さい頃からずっとこれされてたんだろ。」

外れた腕輪は雄呀の手の中にあり、それを忌々しげに見た後、袋にしまわれる。

彼らの後ろの向かいのベッドには、傷の手当をされている蓮と看病

しているジェステアがいた。
ぼろぼろの蓮が部屋に来た時、ジェステアは起きていて、血相を
変えて蓮を抱きしめた。

『なにかあつたのか?!』

蓮と一緒に来た雄呀たちに何かされたのかと詰め寄られたが、助け
てもらったと話すとな得できないような顔をしつつも手当てが先だ、
と置いておいてくれた。

今は眠っていて、傷もここに来る前に少々治癒しておいたためか、
大きな怪我は見当たらない。

「お前、名前は？」

「うなあ。」

「うな？」

ふるふる

「いうな。」

「いうな？」

「ユーナではないのか？」

背を向けるようにして座っていたジェステアは女の子の方を見て
そう言った。

そうなのか？と聞くと、縦にぶんぶんと首を振った。

「ユーナ、ね。」

女の子、ユーナは名前を呼ばれて嬉しそうに足をバタバタさせた。解放されたことになり喜んでいる様子で、うーやらあーやらと足をバタバタさせている。

「んっ……」

「レンっ！」

「あれ……じえてい？」

蓮が起きたことでユーナはベッドから飛び降り、蓮が寝ているベッドに飛びつく。

「あー！」

「君は……」

「起きたか、タンコブ小僧。」

上半身を起こし、飛びついてくるユーナを抱き止める。

上から雄呀の声が降ってきて、びっくりして思わず謝った。

「あやまんな。」

「カザスさんも、ありがとございます。」

無表情な彼が小さく目を細めたのを見て蓮は彼の怖いイメージが薄れていくのを感じた。

「それで。」

「あ……じえ、ジエティ……」

ベッド脇の椅子に座り腕を組んでいるジエスティアは背後にどす黒いオーラを纏って蓮を見ている。

「どういうことが、教えてもらおうではないか。」

「は、はひ……」

ことのいきさつを？い摘んで話すと、ジエスティアはすまない、と頭を下げた。

「ジエティが謝ることじゃないよ！」

「いや、君から目を離した私の責任だ。」

「僕が勝手に迷子になっただけだから。」

どンドン2人の謝り合戦になっていき、蚊帳の外な雄呀はカザスに

ユーナを任せた。

2人のヒートアップする口論に待ったをかけた。

「今回はこのたんごぶ小僧のせいだ。お前も騎士なら、叱ることも覚える。」

「そ、それは……」

それと、と頭を軽くかき、ジエスティアを見た。

「お前はあいつらと一緒に飯でも食って来い。俺はこいつと話がある。」

「しかしっ!」

「ジエティ、僕は大丈夫だから。」

蓮が落ち着かせるとジエスティアは眉を下げ、立ちあがった。

心配そうに見ながらカザスとユーナが待っているドアの外に出た。

2人きりになった部屋で、雄呀はジエスティアが座っていた椅子に座る。

外套は脱いで壁に掛けてある。

蓮は静かな空気に耐えられず、視線をうつろつかせると彼の力のない右袖に気がついた。

雄呀はそんな蓮の視線の先に「ああ」と左手で右肩の部分を握りしめる。

それは肩から先がぱったりと存在していないことを知らせていた。

「それ……」

「俺も、この世界に来てからいろいろあつてな。」

これでも元救世主様ですから、と笑いながら言った。
その笑顔を見て蓮は苦しそうな表情を浮かべる。

この世界に来てから何かが狂って行くような気がした。

「僕も……僕も、救世主ってやつにならなきゃいけないんでしょうか……？」

戦っている時に感じた、この身に起きた異常。
対峙した相手と拳を交える度に体中に何かが溢れてく感覚。

(怖かった……)

何度も逃げたくなって、睨みつけられる度に吐きそうになった。
女の子を守らなきゃと思つて、必死だったけど……
今思うと手足ががくがくと震えていく。

これがこの世界に召喚され、救世主となる為に備え付けられた力なのか？

「僕……」

自分の両手を見て、眼の奥から熱が溢れてくる。

「こんなつ、僕に、どうしろっていうんだよ！あんな、化け物みたいな人たちと戦えってこと?!」

「お前は どうしたい?」

興奮している蓮とは別に、冷静に彼を見ている雄呀。

「ユーガさんは強い、僕はユーガさんみたくにはなれないよ……」

救世主になって、戦争を止めて……
いろんな人を助けられる。

この理不尽な世界で生きている。

「お前はいいよ。」

ふと、1オクターブ低くなった声。

先のない肩を握りしめ、同じ漆黒の瞳を蓮に向けている。

「10年前、俺も召喚された。お前とおんなじように。でも、一つだけ違うことがあった。」

雄呀は握っていた腕を放し、膝に肘をつけて手に顎を乗せる格好をした。

「俺が来たとき、すでに戦争の中だった。」

他人事のように淡々と話す。

その目はどこか遠くを見ていた。

「お前みたいに言われる前に間者ってやつに襲われてそいつを殺した。」

それが、初めての人殺し。

それからずっと周りに流されるように戦わされた。戦う度に戦う術と力をつけていって、その分たくさん人間を殺した。

「お前、俺が戦争を終わらせたって聞いたか？」

「はい……」

お姉さん……王女や鍛冶屋のおじさんから聞いた。

おじさんは英雄が敵の大將を自分の腕を斬られながらも、殺したことで国に平穩をもたらした、と言っていた。

「その腕は、その時に？」

「いや、そんな美談じゃない。」

「え？」

「俺さ、敵将と知り合いで、俺が戦争を自分から終わらせようと思つたのも、こんな風にしてるのも、そいつのおかげなんだ。それに、俺はそいつに腕を斬られたんじゃない。そいつは自分から降伏するために戦闘中の中をひとり敵陣の中心に来た。」

それが、どれだけ覚悟のいることか。

「降伏宣言をした無抵抗のそいつを陣地内にいた王女が受け入れようとしたが、味方の将軍が許さなかった。そいつの首をとれと、そう言っただ。」

俺もその場にいた。

蓮は静かに聞いていた。

「こいつら、馬鹿じゃねえのって思ったよ。」

もう勝ちが決まったのに、これ以上どうして望むんだ。

その時、どんどん自分の気持ち冷め、次の瞬間徐々にふつつつと沸騰していった。

「そいつの首を取れば、こちらが勝利。すでに敵の6割をやった、この戦争の要であり、国の象徴である救世主の俺を殺せば、向こうの勝ちとなる。どっちもどっちだ。」

今まで戦争が終わらなかつたのはお互いに同等の力だったから。でもそれは次第に崩れていき、シュトレイン国側が劣勢になっていた。

だから俺が呼ばれた。

でも。

「俺はそいつを殺したくなかった。何をしても、そいつは助けたかった。」

死を覚悟した目を見ても、それを否定した。

「俺かそいつ、どちらかが死ねば戦争は終わる。でも、俺は死ぬ気はない……死ねない。」

だから……

「剣士として、右腕を……剣腕を斬ることで剣士である『救世主』を殺した。この世界で剣士が武器を握れなくなることは戦場に立つことができない、死んだも同然の存在となる。魔術師が魔力を失えば、ただの人。」

戦いを生業としてきた人間はなんの価値もない存在となる。

「救世主が死ねばそれは国の敗北ということになり、死んだことがあれば相手の勝利となってしまう。両方死ねば、これから再び戦争は新しい旗を立てて続くことになる。俺はそいつの命をもらう代わりに、腕をやった。『敵将を打ち取った時に刺し違えた救世主の剣腕』にすれば、俺が敵将を打ち取った証明となりうる。強大な魔力が凝縮された腕だ。ただの首より価値と伝説は生まれる。」

一騎当千の英雄の剣腕。

1人のただの弱い人間の首。

どちらを失い、どちらを得るのが国にとって有益となるのか。

救世主が平和をもたらしたという伝説を残せば、イオカリスにも牽制になる。

その存在が強大な国への警告となるのだ。

『これはお前たちを敗北に導いた証だ』

国を救った腕こそ平穩をもたらす象徴だった。

「それだけ俺の腕には価値があった。」

その代り、好きだった剣術を失った。

文字を書く術を失った。

地球に帰る気持ちも失った。

得たのは自由と、カザスだけ。

「結果的に、俺はそいつを殺したくなかったから、自分の都合を通した。そして王都から逃げて、今も戦争になりそうになっているこの世界をどうでもいいと思ってる。」

勝手なやつだよな、と自嘲している。

「救世主としての価値も、剣士としての価値もない、ただの人間になった。」

全部なくなっただけだ。

「お前はさ、まだ大丈夫なんだよ。」

「何が……ですか？」

「お前はちゃんと助けたじゃねえか。人を殺さないで、あの子を。人を殺すことにならない、そんな道を歩いていける場所にいる。それは彼が逃げた時から始まっていた。」

「別に、救世主なんかにならなくてもいいんじゃない？」

お前はまだ自分の道に立っている。

そう言われ、蓮は自分の手を握る。城から逃げ出すことができた自分と、逃げることさえ許されなかった雄呀。

「でも、戦争は起きるんですよ。」

「まだ起きるって決まったわけじゃない。起きたら起きたでお前は関係ないんだから。」

そう、異世界人である蓮には関係のない話だ。しかし、ジエスティアは？

あの子は？

「悩んでるなら、もっと強くなれ。」

頭にポン、と手を置かれた。

いつの間にか雄呀は立ち上がっていた。

「強くなって、騎士の嬢ちゃんやユーナを守れるようになれ。守る為に強くなることは悪くない。それに、お前に与えられた力の使い用はお前が決めることだ。」

僕が、二人を守る……

「できる、かな？」

「まあ、弱腰でチキンなうちはだめだな。」

「はあ……」

はっはっはと笑う彼に頭を軽く叩かれ、なんだか穏やかな気分になった。

「とりあえず、先輩である俺が、ダメダメな後輩のお前に力の使い方を教えてやる！」

「は、はい……」

「あの、敵将って生きてるんですよね？」

「ん？ああ、バリバリ生きてる。」

「どんな人だったんですか？」

「んー、ガキっぽくなかったよなー妙に冷めてて意外に泣き虫だったな。」

「ガキって……」

「だって当時10歳だったから。」

「10歳?!それで戦争の將軍だったんですか？」

「將軍って言うか、祭り上げられてただけだから。あいつの家庭事情ってやつ?」

「はあ……」

「複雑な家庭環境の中で育った故ってやつだなー。」

「でも、ユーガさんには大事な人なんですよね。」

「まあね、家族みたいなもんだし……ってか、万能主夫?」

「主夫?」

「俺、左手めっちゃ不器用でさ、料理とかも全部できないから任せてんの。」

「へえー（その人の所に遊びに行ったりするのかな？）、仲良いんですね。」

「なんとなくか、あいつが俺のこと大好きで。」

「へっ?!（好かれてるんだな）」

「もう、俺がいなくちゃなんも決められないの。（喧嘩していいかーとか）」

「ゆ、優柔不断なんですな。」

「笑っちゃうよな。」

「つくじ。」

「うー」

「君のような無表情でもくしゃみをするときは顔は歪むのだな。」

「……」

第13話『脱出と目的』

「と、言うわけで、『ドキドキ王都脱出向かうはドラゴンの谷!』作戦会議を開始しまーす。」

はい、はくしゅーと若干棒読みで言う。

「ユーガさん、ドラゴンの谷って……」

小さく手をあげて控え目に質問した蓮。

床に座ったカザス、ジェスティア、ユーナ、蓮と目の前のベッドに座っている雄呀。

よくぞ聞いてくれた、と言わんばかりに表情を明るくする。

「異世界って言ったたらドラゴン!俺はこの10年、西に行くことがなかったが、ドラゴンの谷といういかにもドラゴンパライスイスな夢溢れる名前の場所に行かず、どこへ行く!?!」

なあ、カザス!と言うと、「はい」と即答する。

なんとも自分勝手な目的なのだろう……

「私はレンが行くところならば、共に行く覚悟だが……」

「あうあ」

ジエスティアも西の国には行ったことがないのか、興味ありげだ。隣で手をバタバタと床に叩いているユーナも楽しそうにしている。なんだろう、僕は否と答えてはいけないのか?! 僕の道はどこに?!

「お前もみたいだろおー? ドラゴンー。格好いいぞーう。」

「(そ、それはドラゴンには憧れる。本物のドラゴンってどんな感じなのだろう? やっぱり大きくて強くて、火とか吐いたりするのかな?) ……い、行きたい!」

「よっしやー決まり!」

皆行きたそうなのに、僕だけ拒否したら空気読めない子みたいになるじゃないかー!

「そっぴゃ、お前らはもうギルドに登録したのか?」

「あ、はい。教えてもらった日に登録に……」

「その時、王都を出るための依頼を受けた。ココンという森の里だよ。」

ココンは森の民が住むと言われている里で、エルフの里とも呼ばれている。

彼らはシュトレイン国の土地に里を築いているが、他国にも転々と

里は存在している。

彼らはこの大陸ができてから国という概念にはとらわれていない。

依頼書を見た雄呀はほう、と納得した。

「じゃあ後は俺らだな。今日、ギルドに行く予定だ。」

その前に鍛冶屋に寄ることになるが。

そう言って郵便物を取り出した。

「僕たちも一緒に行きます。おじさんにはお世話になったし。」

「私も、騎士として礼儀は大切だ。」

「わかった。」

一緒に行動することになった雄呀たちと蓮たちはユーナを連れ王都を出ることを決めていた。

ユーナは文字が読めるらしく、筆談もどきをして家族がいるという国境の都市リオ・カインに立ち寄り、彼女を送り届けることも目的に入っている。

小さいユーナは12歳で3歳で人攫いに遭い、奴隷として働いているときに彼女の兄が助けに来たが、追り返され、その時に国境に住

んでいることを聞いたらしい。

年齢の割に小さいのは栄養不足のせいで、身なりを整えれば可愛く綺麗な女の子が復活した。

「えーん。」

「ん？」

手を繋いでいるのはここにいるユーナと兄のように彼女の手を引いている蓮だった。

『えん』というのは蓮のことで、まだ口が回らないユーナの精一杯の呼び方だった。

ちなみにジエティは『えてい』、カザスは『あーす』、雄呀は『うー』となっていた。

雄呀は納得いかないような顔をしていたが、しょうがないと諦めていた。

手を引くユーナに呼ばれ、振り向く。

ここにいるだけで何も言わない。

「手を離しちゃだめだよ、迷子になっちゃうからね。」

「この前のお前みたいにな。」

「うっ。」

雄呀に古傷をえぐられました。

鍛冶屋の店主に郵便物を渡し、別れの挨拶と礼をした。
にこやかに送り出してくれた店主は本当にいい人だった。

そしてすぐにギルドに向かった。

ギルドにはまた冒険者が溢れかえっていた。

さすがにユーナを中に連れていくわけにはいかず、蓮とジエステイア、ユーナは外で待つことになった。

来るのが2度目のカザスは構造を理解している為、カウンターにまっすぐに向かう。

雄呀もそれを分かかっていて黙って隣を歩く。

手続きを済ませ、報酬を受け取ると依頼掲示板のある2階へ向かった。

2階もそれなりに混んでいるがカザスの周りにはなぜか空間ができる。

「王都外で、ココンを通る方がいいな。」

「わかりました。」

見渡すと新しい依頼が増えており、カザスが一枚の依頼を手にとった。

「これはどうですか。」

「ん？つて、これココンの依頼じゃねえか。ナイスだカザス。」

『ないす』？と首をかしげるカザスを置いて受領受付へ行く。

受付もスムーズにすみ、外で待たせている蓮たちと合流することに。

「よう。」

「あ、依頼ありましたか？」

「ちょうどココンの依頼があったぜ。」

ココンで二つの依頼を一気に終わらせればココンからはリオ・カインに向かうだけだ。

偶然にもココンの依頼があったことに驚きと喜びがおこった。

旅支度はすでに昨日のうちにすませてあり、あとは王都の検問を突破すればいい。

昨日の騒ぎでも警備が変わることはなく、検問も普段通り魔力の探查魔法使いが1人と一般の兵士が数人いるだけだ。

正門に向かう一行は途中、珍しい物に目が行った蓮や、小さな子犬を見つけたユーナが道を外れたり、トリの実の菓子を見つけた雄呀が力ザスを引っ張って大量に買ったりと寄り道をしてしまった。

「なんか、これから王都から出るのに緊張感がないね。」

「私は緊張するよ。」

お菓子を食べている雄呀を見て言った蓮と近衛騎士として王女に仕

えてから王都を離れなかったジエステリアは久しぶりの外にこわばっていた。

「僕は何でも初めてだから、いろいろ教えてね。」

「任せろ！」

頼られることは騎士にとって励みになる、とジエステリアは喜んで返事をした。

あはは、と仲良く歩いていた蓮は足元を見ていなかった。

どかつ

「うごおっ?!」

「え?あ!すす、すみません!!」

足元に人がしゃがんでいるのに気付かず、その人の腹を蹴り上げてしまった。

大丈夫ですか!?!と蹲っているその人に合わせしゃがみ、謝り倒す。思わぬハプニングに雄呀とカザスも立ち止まっていた。

「おんどれえ、俺に不意打ち喰らわすとは覚悟ができてんだろ……
う………な?」

「本当にすみま……せえええっ?!」

「お?」

顔をあげた人と固まった蓮、その顔に覚えがある雄呀の三者三様に時が止まった。

「おお、あんときのガキンちょ……と、こわいにいさんかあ。」

そこにいたのは昨日、蓮とユーナが遭遇した焦げ茶色の髪の男だった。

「ぎいやあああああつ!?!?!?!」

殺されそうになったことを思い出し、反射的にジエスティアに隠れてしまう。

その後もすみませんすみません!と嘯まずに謝り続ける情けなさ。

互角にやり合ったというのに、やはり怖いものは怖いのだった。

「怖いとはなんだ。ってか通行の邪魔だ。」

痛みはなくなったのか、平然としている様子だが、立たずにしゃがんだままのその姿勢に雄呀は鬱陶しい物を見るような視線を向けた。

った。

「あ、あつたあー！最後の一枚！探したぜえー！」

拾ったものを涙目で見て、喜びの声をあげた。

「へ？」

「いやあー、よかったよかった。」

そして何もなかったかのように剣を回収し、しまった。
彼の拾ったのは一枚の銀貨だった。

「お、お金？」

「おお、あんあともらった報酬。心配しねえでも、もう仕事は終わったんだからよお、」口さねえって。」

ふははははと僕の肩を笑いながらたたき、銀貨をサイフらしき袋にしまった。

「おにいさんら、王都から出るのかい？」

「てめえには関係ねえ。」

なおフレンドリーな男は雄呀と会話を続ける。

それを無表情だが気迫を込めてカザスが警戒している。

「あっそ、俺もどうでもいいけど。いやー、ほんと、偶然だったわ。」

「んじゃねーと、デジャブの光景を作って正門の方角へ向かって行った。」

ふう、と落ち着くとジエスティアが心配そうな顔をしている。

「いや、大丈夫。」

「まさか、あの男が昨日の？」

「うん。」

昨日のように殺気はなく、さっきだけの見ればとてもいい人に見えた。

「いったい何者なんだ、あの人。」

「ほら、さっさと出るぞ。」

気づいたら雄呀たちは蓮たちよりも先の方にいった。
急いで追いかけ、検問を受けるために並ぶ。

検問には雄呀の言ったとおり、魔術師らしき人間がいた。ギルドの依頼書と通行証を見せ、探査魔法をしている魔術師を見ないようにしながら許可を待つ。

「ん？」

魔術師が眉をひそめた。

「（な、なんだ？）」

魔術師がこそそと兵士に何かを言い、待ったをかけた。何か引つかかる様な事があったのか？

「おい、そのの……」

蓮は緊張してこわばる。

「金髪。」

そう呼ばれてカザスが振り向いた。自分のことではなく、安心し、蓮にはジェスティアと同じく通行許可が出た。

呼びとめられたカザスは扉に向き直る。

「その剣はなんだ？」

「ああ、兵士さん。これは魔剣だよ。」

無口なカザスの代わりに答えたのは雄呀だった。

「どこで手に入れた？」

「依頼の途中で手に入れたって言ってたけど……なあ？」

そう言ってアイコンタクトをする雄呀にうなづく。

SSランクのギルドカードを確認した兵士は納得し、いいだろう、と許可を出した。

そうして全員無事通ることができ、王都を出た。

門から離れ、少し歩いた後、立ち止まる。

「もういいぞ。」

「あい。」

雄呀のマントからずっと雄呀にしがみついて隠れていたユーナが出てきた。

通行証を持たない元奴隷のユーナは隠れて通るしかなかったから、右腕がない分マントに余裕がある雄呀が隠していたのだ。

「ご苦労さま、ユーナ。」

「えん。」

「こっからはひたすらココンだな。」

カザスに地図を広げさせ、それを覗き見る。
ココンには通称『エルフの森』と呼ばれている大きな森を通っ
ていく必要がある。

その森は半日歩けばつくだろう。

別段、急ぐ旅でもない為、馬を用意はしなかった。

ユーナには悪いが、蓮の修行も兼ねている、と雄呀は言ったが、馬はもう勘弁だという自分の都合だった。
きっとそのことはカザスしか知らないのだろう。

「緊張するか？」

歩いている途中、雄呀が蓮に話しかける。

初めての世界で、初めての旅をする。

「き、緊張するけど……楽しみです。」

「そうかい。」

それだけの会話をして、雄呀は後ろにいたカザスを隣に呼び、蓮たちの前を歩き始めた。

蓮は王都で見た時よりも広く感じる空を見上げた。

壁に囲まれていない空は広く感じた。

「（空って、どこでも青いんだなあ）」

「レン、足元見ないと危な……」

ガツッ

「「あ
「

ゴンッ

「いったああああああっ!!!!」

さいさき不安な救世主(?)だった。

第13話『脱出と目的』（後書き）

ここまでで1章とします。

題名、各話タイトルも改変予定です。

第1章登場人物紹介

染井 雄呀 (ユーガ・ソメイ) (26)

本作の主人公。

10年前に異世界召喚され、戦争を終結させた救世主されている日本人。

その際、右腕を失い剣を持てなくなった。

それからはカザスと共に漁業自由都市フィニアで隠居生活をしていたが蓮が現れたことで旅に。

魔法に関してはエキスパートであり、無限に近い魔力を持つ。

探知魔法が得意な上に、召喚獣にドラゴン2体、銀狼、海竜と契約中。

趣味は釣りだが、全く釣れない。

魔力が高いせいで身体的に成長が止まり、外見は16歳のまま。

かなりの不器用で面倒くさがり屋。

フィニアでは『ヒモ男』と勘違いされていた。

ギルドランクF。

桐谷 蓮 (レン・キリヤ) (16)

副主人公。

異世界に召喚された救世主候補。

召喚された日に逃亡を図り、隠れる生活を送る。

かなりのチキンで、弱腰な上に、ビビり。

幼稚園の頃ガキ大将に半殺しにされたトラウマを持っている。空手部に所属し、体を鍛えることは好きだったが試合には出なかった。高い魔力を持つが雄呀いわく『魔法には向いていない』らしい。よくたんこぶをつくる（主に事故か雄呀によるもの）。ギルドランクF。

カザス（20）

雄呀の右腕と称している弟子。

金髪碧眼長身の男前で、剣術においては師である雄呀を抜いてマスタ―級。

元イオカリス帝国出身者で、今はフィニアに。

フィニア限定の焼き菓子が好きで、それをよく買ってもらっていた。雄呀に尽くすことと一緒にいることを当然としている。

無口で無表情だが、時折表情をちらつと見せる（らしい）。

フィニアでは『ヒモ男の主夫』と呼ばれていた程家事が上手く、雄呀の財布。

武器は黒い刀身の魔剣シュバルツ。ギルドランクSS。

ジエスティア・ルンブルク（16）

シュトレイン国第1王女付近衛騎士。

真紅の長い髪が特徴で、勇ましい言葉づかいをする。

主君であり、友である王女から蓮の護衛を任され、彼を守ることを誓う。

最近連に母性本能を刺激されているらしい。

武器はレイピア。

ユーナ (12)

奴隷だった女の子。

可愛い顔をしていて、解放されてからはよく笑う。

ほぼ、話せない状態で生活していたため言葉の呂律が回らない。

家族が国境の都市リオ・カインにいるらしい。

助けてくれた蓮が大好き。

アウリア・メリア・シュトレイン (26)

シュトレイン国第1王女。

召喚の儀式に必要とされる巫女の血が流れている。

10年前に雄呀を呼びだした張本人。

丁寧な口調とは裏腹にかなりの行動派で冗談が好き。

逃亡中の蓮を匿い、逃がした。

プラチナブロンドが特徴。

ティエル・ウルド・シュトレイン (18)

シュトレイン国第2王女。

アウリアの妹で蓮を召喚した巫女。

夢見がちで、かなりの世間知らずだが優しい性格。

救世主である蓮を探す。

謎の男

焦げ茶色の髪の剣使い。

ある貴族の依頼でユーナを連れて行こうとしたが、結果失敗。剣術のみならず、魔法、肉弾戦にもたけている。

お金をもらえればどんな仕事でもする。

プライベートはフレンドリーらしい。

槍斧の少女

金髪ツインテールの少女。

身長は蓮の胸より下でかなり小さい。

蓮とぶつかって脅しをかけた程強気な性格。

その身にあわない巨大な槍斧を背負い、引きずっている。

蓮に次は埋めると予告した。

近衛騎士の男

第1王女付の近衛騎士の1人。

穏やかな性格で真面目なため、王女によくからかわれる。

第1章登場人物紹介（後書き）

1章終了で一区切りです。

2章からは時間が空いた時に更新していきますので、ご了承ください。
い。

ここまで読んでくださいます、ありがとうございます。

そして、これからもよろしくお願いします。

第0話 『理由とまどろみ』

『どうして戦わなければいけないのですか。』

ただの偶然だった。

彼と……この人と出会ったのは。

護衛を殺され、狙われたのは自分だと気付くのに時間はかからなかった。

帝位の継承序列が低い自分がそれを得ると噂が立つてからは命を狙われ続けていた。

いつ死んでもおかしくない。

年齢などとは関係ない……実力のある者が立つ。

皇帝から寵愛を受けている自分はそんなに自分が優秀だとも思えない。

剣を握らされるが、本当はなぜ戦わなければならないのかわからなかった。

戦争が続いているこの世界で自分の生きる意味とは何なのか。

「あなたは皇帝になるの。」

母が言う。

「お前はわしのあとを継ぐのだ。その為の役目を与える。」

父が言う。

「どうしておまえなんだ。」

多くの兄弟が言う。

自分の代わりなどいくらでもいるだろう。

もっとその地位にふさわしい人間が……もっと、戦いな好きな人間が。

『そうだな……俺も、それがわかんないんだよな。』

頬杖をついて彼が答えた。

自分を助けた彼は、なぜ自分を助けたのかも理由はわからないと言
う。

大きな戦争が起きている世界で、自分のような子どもが死ぬのは珍しいことじゃない。
通りすぎる人間は知らん顔か逃げるだけで、こんな無駄なことはない。

それに、これから戦場で人を殺すように命令するのはこの命なのだ。
ここで死ねれば人を殺さずに済む。
あんな行き詰まる、籠のような世界から解放される。

そう思っていたのに。

『それがわかるころには、戦争も終わってるだろうよ。』

他人事のように語る彼に心が苦しくなった。

『でも……誰かが終わらせなければならぬんですよね。』

誰か……それは自分か、それとも……

『じゃあね……』

何かを思いついたように彼が言った。

俺が……

……ス

自分を暗い影が覆っている。

うとうととしていたことに気づいて、瞼をゆっくりと上げる。

「カザス、起きたか？」

「……はい。」

木に寄りかかっていたカザスはボーっとした様子で返事をした。
まだ夜が明けたばかりで薄暗い。

そういえば夜明け一番に出発すると言っていたのを思い出す。
火の番を交代してから寝てしまったのだろう。

交代したはずの蓮はジェスティアと火の片づけをしている。

「珍しいな、ぐっすりだったぞ。」

カザスを見下ろしながら雄呀は笑っている。

「すみません。」

「まだ、ユーナが起きてねえから、最後じゃなかったな。」

隣を見るとカザスの外套をかけ、丸まって寝ているユーナがいた。まだ深い眠りについている。

雄呀がずっと笑っているのを見て、シュバルツを背負ったカザスは首をかしげる。

「何か？」

「いんや……お前、寝顔は変わんねえなって思ってた。」

嬉しそうに言う自分を育ててくれた師は、自分が国を捨ててからずっと見守ってきてくれた。

まだ、自分が弱かった頃は強くなって師匠を守る、と意気込んでいた。

師匠の立派な右腕となる。

それが今の自分の生きる目的であり、意味である。

この人にとって自分はいつまでも子供なのだ。

そして今日も彼の隣を歩いて行く。

第1話 『魔物と森』

王都を出発してから一日が経った。

エルフの森と呼ばれる場所に入り、ココンの里まであと半日程度、ゆっくりとしたペースで歩いてても日暮れ前までには着く。

森の奥深くまで来た一行では問題が起きていた。

ガサガサ

豊富に生えている草を踏みしめて道のない場所を進む。

風景は変わらず木、木、木……蓮がジエスティアに借りた剣で邪魔な蔓を斬り、道を作っていく。

当のジエスティアはゆっくりと疲れた様子で後ろの方を歩いている。ユーナは彼女の手を引き、時折心配そうにちらちらと見ている。

しかし、もっと重症な人間がいた。

「うっ……」

「師匠、大丈夫ですか？」

蓮の後ろを歩いているカザスの背にぐったりと背負われているのは雄呀だった。

いつものように元気に歩いている姿はなく、弟子であるカザスの背でだるそうにしている。

「は、話しかけるな……」

「はい。」

だらーっと垂れ下がっていた左腕でカザスの胸を叩いた。

「ジエティも、苦しかったら休むけど？」

「いや、私は大丈夫だ。ユーガのように強い魔力はないからな。」

この森に入って体の異常に最初に気づいたのは雄呀だった。

魔力がぐるぐると不安定になり、『魔力酔い』を起こしているのだ。

魔力のないカザス、ユーナ、制御の腕輪をしている蓮を除いた2人は魔力酔いでふらふらとしていた。

エルフの森は、密度の高い魔力が溢れていることで、魔力に刺激を与えてしまう。

魔力の高い人間はその分魔力が不安定になり、魔力酔いを起してしまうのだ。

ジエスティアは魔力を持つが、一般的な程度で高いわけではなく、

少しふらつくだけにとどまった。

だが、雄呀は違った。

かなりの魔力を保有している雄呀はふらつくどころではなく、魔力が常に雄呀の中で逆回転をしているような感覚で、歩けなくなってしまうていた。

「（こ、これで右腕の分の魔力があつたら、氣い失つてたな。）」

静かに、なるべく揺れないように歩くカザスの肩に頭痛のするそれを預ける。

いつもはこの背にあるはずのシユバルツは指輪の姿になってカザスの指に嵌まっていた。

「（あー、カザスがいてよかった。）」

エルフの森がこんな森だったとは知らなかった。そうすればもつと準備していったのに。

「でも、不思議ですね。僕も魔力あるのに。」

「お前の場合は……腕輪がある、から……」

顔を上げないままだったが、疑問の声をあげた蓮に恨めしそうな視線をやった。

「でも、ユーガさんは制御できるじゃないですか。」

まだ魔力の制御を覚えていない蓮と違って完璧にコントロールして

いる雄呀。

「外部、からの、制御……と、中からの……制御、は、ちげえんだよ。」

話さない方がいいです、とカザスに言われ、ぐう、と黙る。

自分でも腕輪を作ることができたが、その時はすでに魔力酔いを起こし、繊細な魔力制御ができなくなっていた。

「な、なんかすみません。」

「てめえは、黙って、道づくりや、いいんだよ！」

「師匠。」

最後の力を使ったのか、それ以降、雄呀が話すことはなかった。道を作り続けている蓮は疲れることを知らず、ひたすら先頭を歩いた。

「っ……」

すると、突然カザスが立ち止まった。

後ろを歩いていたジェステアとユーナもつられて止まり、先を歩いていた蓮は足音がしないことに気づき、後ろを振り向いた。

「どうしたんだい？」

「……」

「カザスさん？」

何も言わずどこかを見ているカザスから返事はない。
しかし、立ち止まってわかった。

遠くの方からズシンと大きなものが落ちる音が聞こえてくる。

小さく地面がたびたび振動していた。

「これ、地震？」

「いや……何か戦闘している音だ。」

グアアアアアッ

だんだんと音が近くなってくる。

それと同時に振動も大きくなり、魔物の鳴く声が聞こえてきた。

ジエスティアは蓮から剣を奪いとり、構えた。

手を繋いでいたユーナは蓮の元に行き、怯えていた。

雄呀を背負っているカザスはそのままの体勢で様子を見ている。

ズドドドドドドッ

「来るっ！」

そう言つて構えたジェステイアは蓮とユーナを木の陰に避難させた。それと同時に目の前の木がなぎ倒され、巨大な獅子に似た二首の魔物が現れた。

雄叫びを上げながら現れたそいつは所々に擦り傷を作っていた。

S級モンスター、ツインマンティコア。

マンティコアの突然変異で、ランクは同じだが、SSランクに近い凶暴性を持つ。

そいつはジェステイア達が視界に入った瞬間立ち止まり、高い目線から見下ろしてきた。

いきなり現れた凶暴な魔物にジェステイアは目を見開いた。

「（マンティコア……っ?!しかも二首?!）」

予想外の大物に、蓮とユーナを隠しておいたことに安堵した。ちらりと視線をカザスにやるが、マンティコアを見上げるだけで、戦闘態勢はとっていない。

しかも、この森ではうまく魔力が発動できない。

これは分が悪い。

「グルウアアアアアアアアアッ!!」

「ひ、ひいつ?!」

思わず蓮が小さく悲鳴をあげた。

ユーナと抱き合い、木の陰でこちらの様子を窺っている。

ザッ！

吠えたと同時に一番近場にいたカザスに飛びかかった。

魔物は鋭い爪で挟り殺そうとするが、一人を抱えているとは思えない程の身のこなしでよけられ、地面を大きく裂いたただけで終わった。

ゆっくりと地面に着地したカザスと入れ替わりに、低い位置にあった魔物の目にジェスティアが斬りかかった。
しかし、それはかわされ、逆に払いのけられる。

「ぐあっ!？」

蓮たちの隠れている木に叩きつけられたジェスティアは剣を放してしまった。

立っているのはカザスだけ。

しかし、そのカザスも雄呀を背負っていて手は出せない。

魔物が再びカザスめがけて襲ってこようとしたときだった。

なにかが背後からジャンプし、頭上に浮いた。

それは魔物に衝突し、地面に埋める勢いだっただ。

ズガアアアアッン！

土ぼこりが周囲に舞い散った。

「どう………なつて？」

信じられない光景が広がっている。

あの巨大な魔物が地面に叩きつけられたのだ。

砂埃が風で飛び、魔物の姿が見えてきた。

そこには魔物だけではなく、人影があり、それは巨大な武器を魔物から引き抜いている。

魔物の血なのか、武器に着いた液体を払い飛ばし、背にしまった。

「あたしから逃げようなんて、500年早いわよ。」

若い女の子の声だった。

埃が完全に消え、そこにいた人物が姿を現した。

「あれは……」

蓮がそう呟くと、魔物を倒した人間がんと、こちらを向いた。すると、嫌そうな顔をしてちつと舌打ちをしていた。

巨大な槍斧、ハルバートを背負ったその子は、ギルドで蓮が出会った金髪ツインテールの女の子だった。

「なんだ、あんた達だったの？」

「君は……」

「このマンティコアと戦っていたのか君か？」

ジエスティアが尋ねると、女の子はまあね、と答え、魔物の上からどいた。

槍斧を引きずり、ジエスティアの前に来る。

「あれはあたしの獲物だったの。巻き込んだことは謝るけど。」

「（と、いいながらも、悪いと思ってはなさそう……）」

「じゃあ、依頼？」

「そうよ。」

「（な、なんで僕には冷たいんだろう）」

そっけなく答える女の子に苦笑いを浮かべた。

あはは、と魔物に視線をやる。

「後ろ！！」

ズガアアアアアアアン！！

魔物はいつの間にか復活しており、自分を埋めた女の子に向かって巨大な手で振り下ろしていた。ギリギリのところまで避け、再び振り下ろしてきた腕を槍斧で受け止めた。

「ちっ、しとめきれなかったか。」

手を振り払い、後方に飛び退いた。

「完全にキレちゃって……めんどくさ。」

女の子は槍斧を構え、魔物と睨みあう。

が、それはすぐに終わりを告げることになる。

「てめえらぁ……………」

カザスの背後から地を這うような、呪いをかけるような声が、割り込んだ。

「ゆ、ユーガさん！」

「師匠。」

さっきまでダウンしていた雄呀がカザスに身を預けたまま、顔を上げる。

「……ひいつ?!」「……」

雄呀を知らない女の子までその恐ろしいまでの表情に後ずさりをした。

魔物はカザスと雄呀の方を向き、威嚇をしている。

「さっきからあ……」

雄呀が魔物に向かって腕を上げる。

森がざわつき、強力な魔力が集まっていくのを魔力を持つジェステイは感じた。

ゴゴゴゴゴゴッ

魔物もその異常に気付いたのか、や、やばいと言ったような表情を

一瞬にして絶命したそれを見ていたカザス以外の全員が言葉を失い、雄呀の方を見た。

が、すでに怒りをぶつけるついでに魔力酔いが悪化した雄呀は完全に気を失っていた。

カザスはそんな雄呀を背負い直し、垂れ下がっている腕の位置も安定する方に移動させた。

「え、えつと……ユーガさん、大丈夫ですか？」

「これは……悪いことをしてしまったか。」

「うー？」

「なんなのよ……今の魔法。」

「……」

気絶した雄呀は完全に目をまわしていて、カザスは心配そうに眼をやるが、すぐに視線を蓮たちに戻した。

とりあえず、安心したのか蓮とユーナが近付いてくる。

ユーナは心配そうにしているが、蓮が頭をなでてやる。

その風景を見ていた女の子は槍斧を背負い、カザス達の方に歩いてきた。

「こ、こほん！とりあえず、礼を言っわ。まだまだね、あたしも。」

それだけの槍斧を片手で振り回してるだけでもすごいと思うが、と蓮は心の中で思った。

「それにしても、この森であんな強力な魔法を使える人間がいたなんて……」

信じられない。

気絶中の雄呀を見たが、カザスが庇うように動いた。

「で、そんな魔力酔いしてる人間連れて、何してるの？」

「ココンに向かっているところだ。」

ジェスティアが答えると、女の子はふーんと不機嫌な声色で言った。

「そういえば、ギルドにいたわね。そっちも依頼？」

「うん。……あ、僕はレン。」

そういえば自己紹介を忘れていたのを思い出した。

「私はジェスティアだ。ジェティとよんでくれ。この子はユーナだ。」

「この人はカザスさん、と気絶してるのがユーガさん。」

「あたしはリイリイ。ギルドランクはA。」

強いとは思っていたが、Aランクはすごい。と、蓮は思った。

なっただばかりだが、こういう世界ではそういうものだ。

「じゃあ、あたしは行くから。」

用も終わったし。

「あ、そっか。」

依頼が終わったため、狩猟対象から証明する部分をはぎ取り、ギルドに持っていかなければならない。

リイリイは魔物に近づき、収集箇所を探し始めた。

真つ黒焦げになったマンティコアの牙を叩き折り、縄でつないだ。大きすぎるそれを彼女は槍斧と同じく引きずって行くのだろう。

「もう、会うこともないと思うけど。」

長い髪を揺らし、ずずすと牙を引きずる。

小さいけれど、なんとも勇ましい姿だろう。

「はあ……」

彼女が去って、蓮はため息をついた。

「大丈夫かい？」

「なんか、緊張が一気に……あんなのがいるんですね。」

「……」

あんなことがあってもうろたえず、常に無表情だったカザスを見て、再びため息をついた。

ジエスティアも戦うために前に出たのに、自分は何もできなかった。

「さあ、早くココロンへ急ごう。」

「うー。」

「そうだね、雄呀さんがかわいそうだし、ジエティもきついでしょう？」

隠しているつもりだろうが、少し顔色が悪い。

魔物が現れた時は緊張で忘れていたのだろうが、ぶり返したのだ。

「正直、ね。」

「カザスさんも、疲れたら、僕が……」

代わります、と言おうとしたが、ギロつと睨まれた気がして、それ以上は言わなかった。

再びジエスティアに剣を狩り、先頭を歩く。

今度はカザスが一番後ろを歩くことになり、蓮はジエスティアの様子を見ながら道を作っていた。

コロンまで、あと少しだった。

第2話 『ココロの宿』

自分の中の力が溢れ出す。

この世界に来てから身についた、今は自分を守る力。

ぐるぐると自分の意思と関係なく渦巻く。

遊園地のコーヒークップを最高速でまわされて、さらに急に逆回転され、脳が混乱している状態に似ている。

遊園地かあ。

地球だったら、魔法なんてなかったし、釣りなんてじじくさいもんも覚えなかった。

身体は成長していないけれど、もう10年なんだな。

本当なら普通に学校行って、友達たちと遊んで、大学行って……それで……それで？

それで、“本当なら”どうなってたんだろっ？

今の俺は、“本当”の俺なのか？

それとも夢？

長い、長い……夢を見てるのか？

なら、早く目を覚まさなければ……

目を開けると、木の天井が見えた。

柔らかい感覚はベッドだろう。

カザスに背負われていたはず……

部屋は小さく、大きな窓があり、俺以外は誰もいなかった。
窓の外は夜なのか日は落ち、小さく月が浮かんでいた。

「（暗い……）」

まだぼーっとしている脳が思考能力を低下させている。

「（カザス……いないのか。）」

無性に気持ちが悪くなる。

フィニアにいた時は修行と称してクエストをやらせていたから、1人になるのは慣れていた。

釣りをしていれば時間を忘れてたし、漁師のおっちゃん達が茶化しに来たり……

ここには誰もいない。

がちや

小さな音を立てて部屋に入ってきたのは外套を外し、軽装になっているカザスだった。

手にはお盆を持ち、それにはコップが乗っている。

足音を立てずにベッドに歩み寄り、近くに置いてあった机にそれをおいた。

椅子をベッドの近くに置き、俺の顔色を碧い眼がうかがってくる。

コンタクトではない、自然な碧い眼だ。

「夢……じゃない。」

ここは、10年間暮らしてきた世界……俺が生きている世界。

「師匠？」

「うー、ぐるぐるする。」

手を頭に当てながら上半身を起こす。

自然な動作でカザスが手を貸してくれる。

俺が年寄りになっても介助人には困らないな。

つてか、その前に年とるのは精神的にだけ……か。

そうしたら、年とったカザスを俺が介助するのか？

「はは……」

「水、飲めますか？」

ありがと、と水を受け取り、ちびちびと飲む。

まだ、体中がぐらぐらしているが、森よりも幾分かはまりました。

「ココンか？」

「はい。宿です。」

「レン達は？」

「依頼を終わらせて、今下で夕食を摂っています。」

配達依頼だったか……

俺たちの依頼は依頼人に直接依頼を聞くものであって、まだ内容は知らない。

ココンの里は魔力制御の結界がはってあるのだろう。

だんだんと魔力は落ち着いてくる。

しかし、それも完全というわけではなく、多少の効果らしい。

エルフの住む里ってくらいだから、魔法に関しては大げさなと思っただけ。

「（調子がいいうちに作っておくか……）」

動かすのもだるいが、いつ何が起こるかはわからない。

今のうちに魔力制御の魔具を作っておこう。

手を出し、その掌に陣を浮かべる。

俺は詠唱魔法ではなく、陣魔法を使う。

陣の方が無言で魔法を発動でき、いかなる時でも魔力さえあれば発動できるお手ごろ感からそれを選んだ。

そのために古代アトス語を覚え、どんな魔法でも正確に、陣を構成できる知識と、魔力制御・操作の技術を得た。

それに、魔力でだが文字を自分で書けることがうれしかった。

魔法の原理を学んだ時はそんなことは考えていなかったが、今になってよかったと思っっている。

もちろん詠唱魔法もできる。

魔法陣による魔法発動はかなり難しい為、やる人間はあまりいないらしいから、なるべく詠唱魔法を使うようにしていた。

俺が今から使う魔法は、この世界ではないらしい、『創世魔法』というものだ。（なんかかつこいいからそう名付けた！）

自分の魔力を使って魔力という“有”を別の“有”に変え、新しい

物へ創造する魔法だ。
もちろん、食べ物も作ることができるが、味を再現するのがどうも難しい。

自分が考えたものは思い通りに作ることができるから好き勝手できるけど、同じものを作るのはかなりしんどいし、難しいのだ。

実際にカザスの……今は指輪になっているが、魔剣シュバルツは俺の魔力の塊だ。

魔法を無力化する効果と固定化も魔法を加え切れ味も最上級、カザス以外の人間には使えないように作った。

見栄えも大切かな、と思って装飾もちょっぴり付け足してある。魔剣つていえばかつこいいイメージがあるし。

シュバルツを作った時はもっと大きめの魔法陣を使った。

「（あん時は調子に乗って魔力もかなり使ったしな。）」

カザスの剣術が俺を超えた日、お祝に魔剣作るぞーと言って一日中自分の魔力を凝縮しまくってシュバルツを作った。

たぶん、シュバルツが魔力の爆発起こしたら大陸は吹っ飛ばかな。爆発なんてしないけど。

なんて、思いだしながら魔法陣を操作していく。

「とりあえず、魔石生成して……。」

陣の上に魔力が集まり、一つの魔石が生まれる。

再び魔法陣を書き換え、腕輪の形をとらせ、魔石と合成していく。

一般に出回っている制御の腕輪は魔石が腕輪に嵌まっているだけだが、それは魔力封印が主な役割となっていて、蓮がしているのがそれだ。

俺の場合、制御のみをして、魔法は使えるようにするという都合の良いものため、アレンジを加える。

「（こんなもんか）」

傍から見ると魔石もハマっていないただの腕輪に見える。

うん、と出来を確認してからカザスに左腕につけさせてもらい、魔力が正常になっていくのを感じる。

「い、生き返るー。」

「夕食はどうしますか？」

「食べる食べる。」

あっ、と立ち上がろうとするカザスを制して、再び陣を出す。

「そろそろ、レンにも制御を教えなきゃなんねえからな。あの腕輪じゃ役にたたねえ。」

魔力封印の腕輪では魔力を動かすことができない。

エルフの森でへらつとしていたのは魔力自体が封印されていたからであって、実際は魔力制御ではなかった。

「あいつの魔力はちょっと特殊だからな。」

あの腕輪もいつまでもつか……
先ほどよりも複雑な陣を描き、魔力を注ぐ。

出来たのは何の装飾もされていない腕輪だ。
これには制御訓練用のアレンジが加えられている。

それを見ていたカザスはじっと俺を見てくる。

「ん？お前も欲しいか？」

「いえ、俺には……魔力はないので。」

しよぼんと空のコップをお盆に載せ、手に持っている。

複雑そうな表情でいるカザスは、初めてギルドに1人で向かう時の
それに似ていた。

あの時は俺と離れているうちに俺がどこかに行ってしまうのではな
いかと想着、心配だったらしい。

家の外で送り出した後も、ちらちら後数歩歩いては振り返り、また
歩きだしては立ち止まって振り返り、「どこの捨て犬だ」と思うく
らいにしよぼくねながら出発していった。

その後帰ってくるのはかなり早く、手には土産を持ってきて、それ
をもらった俺が馬鹿喜びしたのを見てちよつと笑っていた。

しかし、これは……

「別に、お前以外に弟子をとるわけじゃねえぞ？」

「……………」

「それとも、あいつと一緒に俺が『帰る』と思ってるのか？」

お盆に乗っていたコップがかたつと音を立てた。

はあ、とため息をついて俯いているカザスの頭をガシガシとかきまぜる。

こういうとき、いつも俺はこいつがガキだった頃を思い出し、いまでは高い位置にある頭をかき交せてやる。

ぼっさぼさになった頭のままお盆を持っているカザスは表情を変えずにいた。

「あいつは、師匠と同じ“黒”でした。」

今は魔法で茶色になっているが……まあ、俺と同じであいつも日本人だからな。

「師匠はあいつを異世界へ帰すのでしょうか？」

「帰せる……ならな。あいつが帰りたければ帰す。」

「師匠は……」

「『俺も帰りたいたい』とか思ってるって言わねえよな？」

カザスは顔を上げた。

「俺はもう、ここに骨を埋めらって決めたんだ。」

手の中にある腕輪をポケットにつっこみ、カザスの肩を掴んで立ち上がる。

その後が続くようにあわてて立ち上がるカザス。

「それに、お馬鹿な弟子が師匠は心配で心配でしょうがないんだからな。」

「……………」

軽い足取りで扉を開けようとすると、カザスが先にノブをとった。

「すみませんでした……………」

「…………頭、そのままにしとくなよ。」

俺がやったことだけど。

カザスは扉を閉じ、その手で髪の毛を整え始めた。

それを見て、いつもの弟子に戻ったと感じた。

蓮と会ってからずっと悩んでいたのだろう。

こいつは俺と一緒にいた時間がかなり長いからな。

「明日になったら依頼人に会いに行くぞ。」

「はい。」

「なんか、ずっと寝てたからココンに着いたって実感ねえな。」

窓の外をよく見ると大きな木の上に民家が立っているのに気付いた。点々と灯りが灯っているのを見ると、ココンの里は大樹の集合体ら

しい。

この宿もその中の一つみたいだ。

「でけえー。」

階段を降りながら所々にある小さな窓から外を見る。

1階に降り、料理の匂いがただよう食堂に出た。

そこにはレン達が大量の料理を囲んでいた。

主に食べているのはレンで、他2人はちびちびと食べている。

「ば、おばばうばばびぼう。(おはようございます)」

「飲み込んでから話せ。」

俺が座ると隣にお盆を返してきたカザスが座った。

素早く皿を取り、料理をとりわけると俺の前にそつと置く。

それを俺が食べていると、その光景を見ていた蓮がごくと口の中の物を飲み込んで、話しかけてきた。

「なんか、カザスさんってユーガさんの弟子っていうより執事とか、そういう感じに近いですね。」

「んなわけねえだろ。こいつは俺の右腕なの。俺の優秀な腕なの。そんな所そこの召使と一緒にすんな。たんこぶ小僧。」

「そ、それは言わないでくださいよ。」

パンを食べながら頭をおさえる蓮……今気づいたが、またたんこぶがでてくる。

どっかで転んだのか？

あとから聞いた話だが、この宿を見上げているとき、上を向いて歩いていたら目の前にあった看板にぶつかって仰向けに倒れて転んだらしい。

皿のついていた肉をフォークで刺し、口に含む。

ん、んまい。

こっちの世界の味付けは慣れてきた。

日本みたいに醤油がなかったため、俺が自分で作った醤油はフィニアではおっちゃん達に人気だった。

作ったと言っても、創世魔法で作ったので、うまい醤油ってわけにはいかなかったが。

味噌を作ったこともあるが、あれは失敗した。

かなり味がうすかった。

味噌を作った人は尊敬するぜ……

まあ、この世界の味も嫌いではないな。

俺は味が薄い方が好きだが、この宿の料理は濃すぎず、薄すぎずでうまい方だ。

昼もずっと寝ていた（気絶していた）ため、かなり腹が減っていた。

……にしても。

「レン、お前良く食うなあ……大食いでも目指してんのか？」

「なんか、この世界に来てからお腹が空くんですよ……あれ？ユ
ーガさんはそういうことありませんでした？」

異世界に来たら大食いになるなんて法則はねえ。

「俺は一般的胃袋です。」

「なんででしょうね？」

と、いいつつもバクバクとさらを空にしていく。
こいつは魔力が特殊だから、そのせいもあんのか？

「どっぞ。」

そう言ってカザスが次に皿に乗せたのはトリの実が使われたサラダ
だった。

「お、うまそ。」

「そっだ、ユーガ。」

「んー？」

思い出したようにジエスティアが食べている手を止めた。

「私たちの依頼なのだが、配達先がこの宿でな、報酬も受け取った。」

「カザスに聞いた。あとは俺たちか。」

まだ、依頼内容わかんねえからな！。

明日依頼人に会いに行く旨を伝える。

「わかった。次の町への旅支度は私たちがしておこう。」

「ああ、頼む。そこのたんこぶの面倒もな。」

ちらりと視線をレンにやって、トリの実を齧る。

「え、えつと……ああ！そういうば、ユーガさんの魔法、すごかったですね！」

「魔法？」

あの時はびっくりしたけど、すごかったです！と目を輝かせて話す蓮の言葉を聞いて、首をかしげる。

俺、魔法使ったっけ？

「（んー？）」

カザスに背負われていた間の記憶は曖昧で、全く覚えていない。

ってかあの森で魔法使うとかしたっけな？

「あんな大きな魔法見たの初めてだし、ユーガさんてすごい人だったんですね。」

「おい、今まで俺をなんだと思ってるやがった。」

「ひいっ！す、すみません、ごめんなさい！」

頭をおさえて椅子ごと後ずさった。

隣には拳骨をスタンバイさせていたカザスがこちらを見ている。慣れてきたなこいつ。

「先輩は敬え。後輩。」

消し炭になりそうだったのを助けたのは誰だと思ってる。

「はい！」

「きゃはは。」

ユーナは陽気に笑い、楽しそうにしている。こいつにも話し方を教えないとな。

それはジェスティアに任せてもいいか。

「あ、おねえさん、一番高いお酒！」

「はい。」

「ユーガさん、お酒飲むんですか?!」

「外見はそうだけど、中身は26のおっさんです。」

こっちに召喚された時は16で、今は26。

酒飲み始めたのは16というのは黙っておこう。

「君は実はエルフなんじゃ……」

「んなわけあるか。俺は救世主様だぞ。元。」

「じゃじゃじゃ、じゃあ、なんか変な薬で若返って……」

「どこの探偵だ。」

とりあえず混乱している2人を黙らせ、魔力のせいで成長しないことを教えると、首をかしげながらも納得した。

「じゃあ、僕もそうなりたりするんでしょうか？」

「お前は大丈夫だろ。俺よりも魔力の量は低いし。」

一般よりは遙かに高いけど。

酒を飲みながら答えると、蓮は安心したように胸をなでおろした。

うん、いい酒だ。

「じゃあ、カザスさんはおいくつなんですか？」

「20」

「「えっ?!」」

こそこそと内緒話をし始める2人。
仲がいいなあ………と思いつつも漏れている話し声を聞いていた。

「ちなみに、嘘じゃないぞ。」

「ぼ、僕、ずっとカザスさんの方が年上だとばかり……」

「わ、私もだ。」

い、意外に、若かった………と呟く蓮。

年齢を話題にした話はかなり盛り上がり、始終無言だったカザス以外は結構リラックスできたらしい。

途中で眠ってしまったユーナを部屋まで運んだ蓮とジェスティアと別れ、寝ていた部屋に戻り、カザスはその隣の部屋に入っていた。

腕輪は明日渡すとして………依頼の検討もついちまったなあ。

空を見上げ、魔力の膜………結界を見る。

微量だが、結界が弱まっていて、魔力が中に流れ込んでいる。

いくら魔法が得意なエルフでも、あの森の魔力は脅威らしい。

そんな森の中心に里を作ったのも、何か理由があるのだろう。

ベッドに座り、歪んだ結界と腕輪を見比べる。

「作っておいてよかった。」

明日には結界はもっと弱まっているだろう。
たしか、依頼のランクはA……だったか。

「まあ、なんとかなるか。」

腹がいつぱいになったせいか、昼間はずっと寝てたのに、眠気が襲う。

そういえば……俺、魔法使ったのか？

結局思い出せなかった。

第3話 『紋章と結界』

ココンの里でも最も長寿の大樹に埋め込まれるようにして作られている家。

そこが里長の、今回の依頼主の家だった。

宿の女将に依頼主の名前を言い、この家を教えてもらったのだが、その存在は荘厳なものである。

「はぁー、あれだな、どっかの赤い服着てる黄色い熊の住んでる家のでっかいバージョンだな。」

「黄色い熊とは、魔物の一種ですか？」

「いや、夢の国の住人。」

苦笑を浮かべ、家の扉の横にかけてあるベルの紐を引いた。心地よく、それでいて大きな音が響く。

しばらくして扉が開き、中からユーナと同じくらいに見える女の子

が控え目に現れた。

こちらを探る様な眼で見てくるその子は、眉を八の字にしている。

「ど、どちら…さま、です?」

「ギルドの依頼できたんだけど、長さんいるか?」

長という言葉聞いた瞬間、雄呀とカザスを交互に見て、おずおずとした態度で「お待ちください、です」と言って、中に引っ込んだ。可愛いなあ、と思いつつ再び扉が開くのを待っていると、今度は勢いよく扉が開け放たれた。

どーんっ、という効果音でも似合いそうな大男がにこにことした表情で出迎えてくれたのだ。

男は先ほどの女の子と同じように雄呀とカザスを見て、さらにこっと笑みを浮かべる。

「ようこそいらっしやいました! いやあ、よかったよかった! どうぞ! おはいいりください!」

ははは、と雄呀の両肩をバシバシと叩いてでかい声で言った。

(いだっ、いだっ?!)

男はカザスより大きく、体つきもがっしりしている為、その力も強い。

こ、この野郎……と恨めしそうに男を見上げると、急に叩くのが止んだ。

「おや？」

そう言つて雄呀の先がない右肩を探るように触る。

「こりやまた……」

でかい声がどンドンしぼんでいき、そろそろ雄呀がキレそうになる時だった。

ふと、男の首に黒い刃が添えられた。

雄呀の後ろから出てきたそれは男の首の皮一枚を斬るか斬らないかというくらいで止まっている。

「その手を離せ。」

いつもより1オクターブ低い声でシュバルツを光らせるカザス。一瞬にして背負っていた大剣を目に見えない速さで構えていた。

無遠慮に雄呀に触っている男に憤りを感じたらしく、無表情の上に怒りの表情が加えられている。

男は冷や汗をひとつかき、驚いていた表情を笑顔に変えた。

「おお、すまんよ、がはは！」

「離せ。」

再度通告され、男はゆっくりと後ろに下がった。

そして、中に導くように扉のノブを持ちなおし、どつぞ、と言った。

シュバルツをおさめたカザスを確認して、扉をくぐった。

中は想像していた通り、全体が木造で、広い空間だ。
この大男が何十人いても余裕で暮らせそうなくらいだった。

奥の方の客間らしき部屋に通され、雄呀はソファに座り、その後ろにカザスが立った。

「（やっぱり、ここも魔力が流れてるな。）」

この家の住人のものではなく、エルフの森から流れている魔力。
濃くはないが、魔力の高いエルフにとっては常に軽い船酔いのような感覚になるくらいだ。

わざわざこんな場所に里を作らんでも……

と、足を組んでゆったりモードになり、ソファの背に体重を乗せた。
足音が聞こえ、開いた扉からはさっきの大男と見た目40代くらいのおっさんが現れた。

このおっさんが里長だとわかるのは早かった。
彼から感じる魔力は穏やかでありながら強い。

頭を下げ、向かいのソファに腰をかけたおっさんと、カザスと同じように後ろに立った男。

すっと姿勢良く座ったおっさんと、対峙する雄呀は背に体重を預けたまま見返す。

「よつこそいらっしやった。」

「まあ、仕事だからな。」

「わしはココンの代表でヘイ、後ろにいるのが補佐のウロンでございます。」

「俺はユーガ、後ろのはカザス。」

補佐だったのか、とウロンを見ると、まだにここにこしている。雄呀は後ろでカザスが不機嫌な表情をしているのを感じた。

（まだ怒ってんのか。）

「それで、依頼ですが……」

「この結界、だろ。」

「っ……お分かりでございますか。」

手を組んで苦しそうな顔を浮かべる。

魔力制御の腕輪なしで、ヘイも体調が悪いはずだ。

「かなりガタがきてる。寿命なのか？」

「いえ、この結界は半永久的に持続できる魔具で形成されているのでございます。」

「まだ効果は続いているが、結界自体に綻びができて始めてる。これだと、すぐに魔具自体が壊れるぞ。」

「はい、しかし、あの魔具は本来そのようなことにはならないはず

なのでございます。今回は、その原因を調べていただきたいと思います。まして、ギルドに依頼を申したのでございます。」

しかし、エルフは魔法の専門家のはず。

人間よりもその辺に関しては詳しいはずだ、と聞いたが、ヘイは首を横に振った。

「この里にいるエルフは力を司るエルフと呼ばれるものが集まる里でございます。」

エルフはもとは人間と同じ生き物から始まった種族だと言われている。

彼らは自然と共生するためにその能力、体質を対応させるためにその姿を変えた。

パツと見、人間と同じように見えるが、エルフは耳がとがっていて、寿命は人間よりはるかに長い。

その中でも、知識に長けたエルフを“知のエルフ”、力に長けたエルフを“力のエルフ”と呼んでいる。

彼らは魔力こそ人間よりあるが、それぞれ人間のように得意不得意が存在している。

「ココンは“力”を司るエルフしか、今のところ暮らしてはおりません。“知”のエルフは皆、大陸の中心部に暮らしているのでございます。」

そして、結界を形成している魔具を作ったのはその“知”のエルフの先祖が作ったものらしい。

つまり、勉強が得意なエルフと体育系のエルフは分かれて住んでいて、ココンの里は体育会系エルフの里ってことだ。

「恥ずかしながら、我等“力”のエルフは武を生業としておるのでございます。」

やっぱね。

「一人くらいいいねえのか？」

「“知”のエルフは知識を求める性を持つのでございます。ゆえに、この大陸中心に眠る“知識”を彼らは何よりも大切にしております。しかし我等、“力”のエルフは土地を守ることを常としておりますれば、生まれ出たこの地を去ることはできぬのでございます。」

“力”のエルフから“知”のエルフが生まれることはない。だからなのか、この里には力のエルフが集まり、“知”のエルフの血は入ってこないらしい。

「調査ぐらいならやってやるよ。報酬もらえりゃそれでいい。」

「どうか、おねがい申しあげます。」

そうして案内されたのは里長であるヘイの家から数分歩いた場所にある、小さな遺跡後だった。

崩れた石には何か文字が刻まれているが、結界の魔具自体には関係はない。

魔具はその崩れた石に囲まれるように置いてある台座に嵌められていた。

それは真つ赤な魔石が埋められ、外にはそれを覆う細工がされている。

転がっている石に気をつけながらそれに近づき、膝をついてしゃがむ。

そつと魔具の魔石に指を当て、ゆっくりと撫でる。

「（これは……っ）」

外の装飾にも指を当て、すつと沿うように撫でていく。

「小さいけど、不純な魔力が混じってんな……」

無駄な魔力がないはずの魔石に、あるはずのない異質な魔力が混合されている。

「（間違いない、人為的なものだ。）」

探査魔法ができる魔術師でなければ気付かない、小さくわかりにくい仕掛け。

「誰だ、こんなことしやがったのは……」

雄呀も、魔石で魔具を作り始めてからはそれに愛着のよつなものを

持つようになった。
簡単に壊れるような作りにはしていないが、もし壊されたら怒るだろう。

他の魔具も同じだ。

同じ魔具を作る者として、作品を汚されることは自分を汚されるのと同じこと……

「許すまじ……犯人めえ。」

「師匠？」

「カザス、とりあえず浄化と修復するから周り見といて。」

「はい。」

よっこらせ、と胡坐をかいて台座の前に座る。

嵌められている魔具に陣をかざし、混ぜっていた魔力を取り除くように陣を構築していく。

「（半永久的、ね……かなりの魔力がつまってるな。さすが里ひとつ覆う結界魔具。）」

不純物を取り除くと同時に結界の再構築を進める魔法陣も同時進行で作っていく。

小さな綻びでもそこから入ってくる魔力は脅威にすぎない。

「（にしても、この強力な魔具に細工するなんて……しかもエルフに喧嘩を売るような真似、どこの物好きだ。）」

だんだんと結界の修復が進んでいく。
魔具の方は前のよりももっと強固な固定魔法をかけ、浄化は完了した。

普通の魔術師なら一日はかかるが、雄呀にかかればものの数分で終わる。

結界再構築もあと少しで完了……だった。

雄呀に周囲の見張りを頼まれたカザスは遺跡後を歩きまわりながら警戒をしていた。

修復に専念している雄呀をちらりと見て、再び周囲に視線を戻す。

あの魔具を見た時、雄呀が顔を顰めた。

その後、怒りを表した表情で拳を握りしめていたのを思い出す。

きっとあれは誰かが手を加えたのだろう。

足もとの瓦礫を安全なように退かしていたが、積みまれた石の隙間から光る物を見つけた。

雄呀を一度振り返り、変化がないのを見て、石をどける。

「っ……!?!」

そこにあっただのは小さなバッジのような、見たことのある装飾品だった。

神々しい鳥を象ったエンブレムが刻まれているそれは、カザスの知っているもので……

「(どじこて……)」

これは、この国にあってはならないものだ。

「ふう……」

雄呀が魔法陣をおさめ、ひと息つく。

確かめるようにどこかすつきりとした赤に染まっている魔石をコンコンと指で叩く。

「これでオツケーかなー。」

満足げに言って後ろを振り返ると、そこにカザスの姿はなかった。

「あら?」

さっきはここでうろうろしていたはずなのに、いつのまにか姿がなかった。

いつもなら八チ公のようにずっと待っているというのに。

立ちあがって周囲を見渡し、瓦礫の山から抜け出す。

カザスがどかしたと思われる石の山とわずかに残る足跡をたどっていくと、見なれた金髪がいた。

「カザス?」

後ろから話しかけるとゆっくりとこちらを振り向いた。
その顔はいつもと違って緊張しているのか強張っている。

「どっした？」

「あの、いえ……」

珍しく目を逸らし、言葉を濁す。

いつもなら生真面目な性格で、嘘はつかず、正直に質問に答えるのに、今日は違う。
拳を白くなるまで握りしめている。

「なにか、あつたんだな。」

雄呀の視線に耐えきれなくなったのか、握りしめていた手を緩めた。
ゆっくりと体を振り向かせ、握りしめていた手を差し出し、開いた。

「これ、イオカリスの……」

台座の近くに落ちていた、と聞き、さらに混乱してきた。

「シュトレインの王都近く、しかもエルフの森にどうして帝国の紋章が……」
エン
プレム

南のイオカリス帝国の象徴は神の鳥と呼ばれるフェニックス。

それをイオカリスは軍人の証として身につけるように義務付けられている。

東のシュトレイン国はドラゴンを象徴としている。

北のノーウェルディ国は守護神として海竜、西のウエスカルは白き

虎。

それぞれがかつて大陸を治めていたとされる生き物をその国の象徴としていたのだ。

カザスが持っているそれはイオカリスの物であり、つまりは、このシュトレインにイオカリスの人間、しかも軍人が入り込んでいるということになる。

周囲に探査魔法をかけるが、何も引つかからない。

もうここにはいないのか……ってか、あの魔具の様子からして数日前に仕掛けられたものだし、もういるはずないわな。

「魔具に仕掛けをしたのも、これの持ち主だな。」

「仕掛け、ですか。」

やはり、と言った表情を見せるカザスに頷く。

「何考えてるんかわかんねえけど、そうそうヤバいことになってきてんな。」

「はい……」

この様子からすると、シュトレインにはまだイオカリスの人間が入り込んできている可能性が高い。

ただでさえ、内乱がおきかけている……いや、もう起きているのか。

最悪。

シュトレインがイオカリスに占領されるなら、それはそれでかまわない。
俺にはもう関係のないことだが、フィニアに何かあったら俺たちの帰る場所がなくなる。

もし、戦争がはじまって徴兵令が出てしまったら、いくら独立していても、フィニアはシュトレインの国内にあるのだ。強制のある徴兵令が公布されれば、おっちゃん達は従わなくてはいけない。

10年前もそうだった。

戦場に集められたのは軍人だけじゃない、武器を持ち慣れていない一般市民も含まれていた。

雄呀が戦場で助けていたのは一般市民が多かった。

しかし、助けた命もその後、地面に転がっていた。

それが漁師のおっちゃん達だったら……

「師匠。」

「ん？」

「魔力が。」

そう言われて、カザスの背負っているシュバルツが雄呀の魔力に反応して黒い刃を煌かせている。

雄呀の魔力で構築されたシュバルツは彼から溢れた異様な魔力に呼応していた。

魔力制御の腕輪をしていても、心が動揺して魔力が溢れてしまった。

「わり。」

魔力を持たないカザスでも魔剣使いとして感覚で分かったのだろう。

「もう、ここらにはいないだろうし、結界も戻った。報告して宿に戻るぞ。」

「はい。」

「それ、貸せ。」

紋章を受け取り、宙に投げた。

バキンッ

指に炎属性の魔力を凝縮し、それに向かって撃つ。
弾丸のように撃たれた魔力は紋章を粉々にし、破片も風に飛ばされていった。

「あれはもう、お前の国じゃない。」

「……」

「奴等がきても、お前は俺のもんだ。」

「はい。」

「よし、いい返事だ。さすが俺の弟子！」

「はい。」

ずる……ずる……

「俺ーさっいきょーう、ドドーン、のどーん。」

エルフの森出口付近を妙な歌を歌いながら大きな袋を引き摺り歩いている影。

きっちりとした服をわざと着崩し、時々口笛を混ぜている。

引きずっている袋は所々汚れ、“黒い染み”ができている部分もあ

った。

袋は頑丈なのか、破れている部分はない。

「ほのおーで、どごーん、だーん……あ、忘れてた。」

ふと立ち止まり、ポケットを漁り始める。

胸ポケット、尻、脇、打ちポケット……至るところを探っていた。しかし、目当ての物が見つからない様子。

「あつりー？おつかしいべ……念話用魔石どこだったかいな？」

上着を脱いで逆さに振るが、ポケットから出てきたのは一枚の銅貨のみ。

彼の全財産だった。

「やっべ、隊長に報告しないと、殺されんじゃね？」

つてく、てめーのせいだぞ、と袋を蹴飛ばす。

バサッ……

紐が解け、中から出てきたのは人間の手らしきものだった。

それは真っ黒に焼け焦げ、かろうじて原形をとどめているといった感じだ。

ぴくりとも動かないそれは、もう生きてはいないだろう。

はあ、とため息をついてその袋に腰を下ろす。

「こづいうの、パシリの仕事だろ、つつーか、ラッセルの役目だったの。」

多くのポケットの中から一つを自然と選び、煙草のケースを取り出した。

その箱を開けると、眼を丸くした。

箱を逆さにして掌に落ちてきたのは赤子の手サイズの石だった。

「あつた。」

念話用の魔石を手に持ち、自分の魔力を込める。

話したい人物を思い浮かべ、魔力を発動する。

「へいへーい、こちらウォールス……」

『お前、死刑決定。』

陽気な声に答えたのは彼よりも少し高めめのテノールだった。

それは「お前、今日給食当番。」と軽く言われたようなそんな口調である。

魔石から聞こえてきた声にあぐりと口を開けるが、すぐに復活し切羽詰まった勢いで魔石に顔を近づけた。

「ちよつと、隊長！？なんで?!なんで?!おいら、仕事終わらせただんだべ?!そりゃ、ちよおーつと報告遅れたけんどお。」

『人一人持つてくんのに何日かかってやがる、屑、単細胞。』

「酷いですぜー、たあーいちよー。つてかさ、もう人つてーよりも、炭?みたいな?」

『炭でもタコでも、早く帰って報告しろ、役立たず。』

「はいさー。」

バキツと音がしたかと思うと、魔石が二つに割れ、地面に落ちたと同時に粉々になった。

「お仕置き決てーい。」

よいこらしよ、と立ち上がったウォールズと名乗った男は袋に無理やり死体を入れ直し、抱えた。
再び歩くとすぐに森を抜け、青空が見えた。

「良い天気だあー。」

空を仰いだ男の胸元がきらりと光る。
着崩された服に似合わず、それは己を強調しているようにあった。

「さて、「我が国」に帰んべ。」

にやりと笑った男に反応するようにキラリとその“フェニックス”の紋章が揺らめいた。

第4話 『いつかと茶髪』

宿に戻った雄呀たちを待っていたのは、旅の荷支度を済ませていた蓮とジエステイア、ユーナだった。

里長のヘイに結界の修復をしたこと、それが人為的に起こされたが、犯人はもうこの近くにはいないことを伝え、報酬を受け取った。人為的行為によるものと知ったヘイはただ、頷いただけで何も言わなかった。

ただ、その犯人がイオカリスの人間の行為だと言う事だけは口を閉じておいた。

それを言ったところでどうにもならないからだ。

それは雄呀の独断だが、エルフも雄呀に近い思想を持っていることを知っている。

エルフは人間の戦いに交わることはない。

10年前の戦争もエルフが参加することはなかった。

森に被害はなかった。

大陸全てのエルフの里に被害はなかった。

彼らは自らの土地だけを守り、そこで生きる。

俺たちと同じ、無関心論を持つ。

無関心は無知よりも罪だ。

俺も、彼らも、それを理解している。

ただ自分の守りたいものを守る。
それだけが生きる上でのルールなのだ。

里の民が平和に暮らせるのなら、犯人は関係ないのだろうが、ヘイは決してそれを知ろうとはしなかった。

話が終わり長の家を出るとき、ヘイと言葉を交わした。

「ありがとうございます。」

「いや……礼はいらねえ。」

銀貨が入った袋を手渡され、おまけとして果物をカザスに渡す。
色とりどりのそれは籠に入れられていた。

ヘイは籠を持つカザスを見たあと、雄呀に視線を移し、小さな声でつぶやいた。

「あなたは、この里をどう思う。」

唐突にそう聞かれ、眼を丸くしたあと、里を囲む木々とその中で生活している人々を思い出した。

警備は数人、誰でも自由に入れる……まるでフィンニアのようだ。

平和で、自由……でも、ここは閉じた世界だった。

戦争が起きれば戦わざるを得ないフィンニアと違い、外界との関係を一切断っている。

「つまらないくらい、平和な場所だよ。」

それ以上に、何も感じないと思う自分がいた。

その答えにヘイは苦笑し、

「私もそう思うのでございませう。」

と、言った。

エルフは昔から生きるべき土地を見つけた時、その土地を守るべく離れることはない。

「ですがね、この森は“檻”なのでございますよ。そうございませうね……あなたにとってのこの世界と同じでございます。」

「……知ってたのか。」

へいはクスクスと笑い、空を指さした。

「私もエルフの長のはしくれ……その腕のことも存じておるのでございませぬ。」

それに、あの魔法……と、言われ、蓮が言っていたことを思い出した。

『ユーガさんの魔法、すごかったですね!』

「(ま、マジで覚えてねえ。)」

「長い間生きていれば、何が起きてもおかしくはございませぬが、あなた“達”……あなたは特別でございませぬ。」

役目を終えた雄呀、新たに召喚された蓮。

「特別、ね……俺はそんな風に思っちゃいないぜ。」

今じゃもう死んだ人間といった方が答えに近いしな。

「いずれ、あなたにもわかる時が来るのでございませぬ。そして、選ばなければならぬ。」

「選ぶ……?」

まるで占い……いや、未来を見ているような言い方で語る。

へいは俺の左手をそっと握った。

「“彼”か……“自分”か。」

意味深な言葉を残し、ヘイは別れを告げた。

「“彼”か“自分”ね。」

自分、それは雄呀のこと。
では、彼とは誰だ？

カザス？それとも蓮？

「師匠、宿に依頼書を預ければ回収人が来るそうです。」

「ん？あ、ああ。」

「何か話したのですか？」

ヘイと話していた時、カザスはウロンと共に少し離れていたため、

会話は聞こえていなかったらしい。

「いやあ、結界直ったから具合よさそうで良かったって話。」

納得はいかないと言った顔をしたが雄呀がそれ以上何も言わないと聞かない方がいいと感じたようで、それからは宿に戻るまで他愛のない話をした。

「（気になることが増えるばっかだな……）」

カザスと話しながら、彼の顔を見上げる。

横を歩いている無表情な顔はずっと前を見ている。

雄呀の右側をいつも歩くカザス。

「（壊してよかった。）」

カザスが拾った紋章は良くない。

彼にとって絶対的な存在だったものは、今となってはただの凶器だ。

俺の右腕、俺の弟子、俺の家族……

へイの守るべき土地がこの森、この里ならば、俺が守らなければいけないのはカザスが生きる場所。

カザスはきつと俺を守ると言う。
ならば俺はカザスを守る為に俺自身を守らなければならない。

俺が死んだら、今のカザスはきつとあとを追うだろう。

イオカリスのカザスは死んだ。

でも、この世界に生きるカザスは、俺の弟子のカザスは生きている。

そして俺は、この世界の俺という救世主は死んだ。

地球の俺も死んだ。

俺の存在している理由は、カザスを生かすためだけ。

いつか、カザスに大切なものができたら、他に生きる目的ができたなら……俺は、解放しなければならない。

それまでは……こいつをこき使って、こいつで遊んで、こいつに尽くさせてやる。
だから、

「（イオカリスなんかに関われさせない。）」

「そついやさ、お前って女の好みなのか？」

今までカザスと色恋話をしたことがないことを思い出し、話を振った。

ありません、と即答され、話がいのないやつだとため息をついた。

「お前もさ、いつかは所帯持ちになるんだからよ。」

「なりません。」

「はあ？」

イケメンが独身宣言だと？！

思わず大声で驚愕し立ち止まってしまったが、カザスは気にせず歩いていったが数歩で足を止めた。

早足で追いつき、再び歩き始める。

「俺は、師匠の右腕ですから。」

本当に、もう……

「恥ずかしいやつ。」

「？」

なんでもない、と言って大股で宿の扉を開け入った。

「あ、おかえりなさい。」

「依頼は済んだか？」

「おう。」

「おかあり。」

……ん？

下の方から聞こえた言葉に雄呀は首をかしげた。見ると、ユーナが笑顔でそこにいた。

「い、いま、お帰りって……」

「ユーナさんたちの依頼が済むまで言葉を教えてたんです。」

結構覚えが良くて……と言い、ユーナに何かを合図する。

「ユーガ！」

「おお！ユーナがレベルアップした！」

「まだちょっと舌つたらずになつたりするけど、だいたいは覚えただんで。」

頭を撫でると嬉しそうに手に頭を押し付けてきた。

ユーナは最初こそ警戒心があったが、本来は人懐っこい性格だったらしい。

一番は蓮だが、雄呀にも満面の笑みを見せるようになっていた。

「あ、そうだ。」

教えるで思い出した。

「レン、手え出せ。」

「？はい。」

手を出した蓮の腕輪をつけている手首に懐から出した雄呀特製腕輪をはめ、つけていた腕輪を取り外した。

取り外した腕輪は道具袋につっこみ、新しい腕輪のサイズを確かめた。

「きつくないか？」

「あ、はい……これって？」

「言つたる？俺がふがない後輩を鍛えてやるって。これは修行用の特製魔力制御腕輪。」

前にしていたのより、高機能で壊れにくい、というところ、「おお！」と目を光らせていた。

「エルフの森じゃ魔力制御の訓練できねえし、森を抜けた後に始める。今渡すのは、お前の腕輪がお前の魔力に耐えきれなくなってきたから。」

「これ、ユーガさんが作つたんですか？」

「俺特性。ちなみに、俺がしてるこの腕輪とは機能が違う。つつーか、俺が作るモノに同じものはない。」

コピーならいくらでもできるが、それは雄呀の制作魂に傷をつける行為だ。

何事もオリジナルが一番だと自負しているため、形は同じでも機能が違ったり、機能が同じでも形が違ったりしていなければという自分ルールを設けている。

「へえー、すごいなあ……」

ついでに暇つぶしで作っておいた小さな片ピアスをジエスティアに渡す。

「これも魔具か？」

「それはお前用。またエルフの森は歩くし、魔力酔い防止魔具。」

「それはありがたい。」

そう言っただけの方耳のピアスを耳につけた。

「うわぁ、ジエスティ似合ってる！」

「そ、そうだろうか……」

焦りつつ顔を真っ赤にしているジエスティをべた褒めする蓮。

ユーナも羨ましそうに見ている。

まあ、ユーナは魔力が感じられないから縁遠い物だな。

「出発は明日の明け方でいいか？」

「ああ、今日は休もうか。」

ココンを出た後はユーナを送る為、国境の都市リオ・カインに向かうことになる。

ここからだとかかなり遠いが、急ぐ旅でもない。

通り道には多くの町がある為、旅荷の補充もできる。

なにより、蓮の修行に多く時間が取れることは大きい。

せめて、リオ・カインに着くまでに魔法は使えるようにしてやりたい。

雄呀は仲良く話している蓮たちを見て、笑った。

彼らと旅をし始めて、カザスといった時よりも賑やかなことに温かさを感じていた。

今は染めているが、同じ黒髪の蓮は同じ地球人だから、そっちの話も通じる。

彼の持っていた携帯電話を見て懐かしさとその見たことのない機能が付いているものを見て、時間の進み感じた。

俺が召喚された時に持っていた荷物は全て魔法で燃やされてしまったから何も残っていない。

思わず携帯電話を見た時興奮してしまったことは最近のことだった。

この世界では何の役にも立たないが、雷属性の魔力で充電ができるということを実験して分かったのは大きかった。

携帯電話に入っていたいまどきの曲を聴いて、妙な感動を覚えた。

いろいろと思い出を思い出させてくれた蓮に雄呀は感謝をしていた。

この旅は、それを返すためのものでもある。

今、ジエステイアとユーナと笑いあっている蓮を見て、弟がいたらこんな感じかな、と思った。

「お前ら、仲良いよな。」

「「え?!」「」

「ぶはっ、息ぴったり。」

そのまま食事を取りながら話をしていると、宿の入口があいた。

からんからん、と音を鳴らして入ってきたのは呆れるほど見たことのある顔だった。

こちらに気づき、手を振って近づいてくる。

蓮が逃げ腰になっているのを尻目に、そいつは相席した。

「こりやまた偶然！いやあ、こりやもう、あれだな、運命？」

「てめえはストーカーか。」

無断で席に座り陽気に話しかけてきたのは、王都で出会った茶髪の男だった。

コーナはもうどうでもいいのか、肝っ玉が座っているらしく食事を続けている。

「違う違う、知ってる匂いがしたからこっちの方に歩いてきたら、おにいさん方が見えてさあ。」

匂いは途中で消えちゃった。

そう言いながら、テーブルに並んでいる食事に手をつけ始める。

「何ナチュラルに食ってやがる。割り勘だぞ。」

「いいじゃん、いいじゃん、俺今金ないんですよ。もぐもぐ。」

ファーストコンタクトがあんなのじゃなければこいつはいい奴に見えたのだろうが、最初が最悪だっただけに、そうは問屋がおろさなかつた。

一度敵として出会ってしまったら、それからは警戒という疑心が解けにくくなる。

「君も、ギルドに？」

そこで、ジエスティアが恐る恐る話しかけた。

警戒もむなしく、口をもごもごと動かしながらにつこりと笑っている男が返事をする。

「んにゃ、俺は何でも屋。金さえもらえりゃなんでもやるぜー。」

「だ、だからユーナを？」

「ユーナってえとこの子？あの時厳しくてさあ、あの貴族が大金目の前にちらつかせるからつい……ああ、でももうその子は死んだことになってるから、安心せーよ。」

「え？」

奴隷が逃げたことを伝えずに、死んだと伝えたらしい男はユーナを見て言った。

「金さえもらえりゃどうでもいいからよお……っつーか、俺怖いにいさんたち気に入ったからさ、もったいないなーと。」

「変なやつだな。」

「そついやおにいさん達の名前知らなかったぜ。俺はトライナー。」

男、トライナーはよろしく、と気さくにあいさつした。

雄呀たちも渋々紹介をし、終始無言だったカザスの分は雄呀が受け持った。

トライナーは蓮とユーナを襲った過去などなかったかのように仲良く話していた。

いつの間にかユーナも笑っていて、子供の扱いがうまいという話になると、彼には弟がいるという話になったり、今までどんな仕事をしてきたのかなど、かなりの会話量だった。

それでいて食事も同時進行で消えていった。

主に食べていたのはトライナーと蓮だったということとは二人以外全員が知っていた。

裏第4話 『敵の中の敵』

イオカリス帝国には特務部隊という戦闘専門部隊が存在する。

5部隊に編成されている部隊のトップは軍でもその実力は計り知れないとされている。

その部隊の中で唯一、“はぐれ者”が集まるとされる部隊……特務部隊第3部隊。

特務部隊のなかでも最少人数で構成され、全員が問題児だが、戦闘能力は一人が軍の一般部隊を軽く伸せるものをもつ……らしい。

某帝国のとある一室

そこは部隊長に与えられる広めの部屋、執務室。

「いっそ、俺が国を滅ぼしてしまおうか。」

夜になり、ぼつぼつと明かりのつき始めた町を窓から見下ろして呟いた。

「いやいや、たいちょ！隊長がそれ言うとは洒落にならんですから！」

それを聞いた部下、ギリオン・ウエリー・ウォールスはぼこぼこの痣だらけの顔面で正座をし、膝に大量の書類を抱えたまま恐ろしいことを言った上司に言った。

その手は膝に乗っている書類、始末書兼報告書を書いたまま、止まらずに動き続けている。

彼が書いた書類を横で束ねていた新人隊員ラッセル・オルセウンも
思わず書類を落としそうになり、焦った。

「そそそ、そうですよ！いきなり怖いことおっしやらないでくださいよー！」

彼らは常に正座させられ、目の前にはソファに座って窓の外を眺めている彼らより若い、少年といった方が近い位の年の人間がいた。彼はだるそうにソファの肘掛に肘をつき、頬杖をかいている。

「黙れ、屑共。」

ギヤーギヤーと言ってくる2人に睨みを利かせ、彼等の方に身体を向けるようにして座りなおした。

彼の胸元にはフェニックスの紋章と“？”と刻まれたバッジが付けられている。

正座している2人、特にギリオンへ苛立った視線を送る。

「俺に隠れてこそこそしてる野郎どもが気に入らねえ。シュトレインも気に入らねえ。皇帝も、王族も貴族も気に入らねえ。そして何より……」

そう言いながらゆっくりと右足を上げる。

ドゴンシ

「ぶへっ!?!」

次の瞬間、ばらばらと書類が散りばめられ、ギリオンの茶色の頭が木造の床にめり込んだ。

「馬鹿は一番気に入らねえ。」

彼の後頭部にはブーツ底が当てられ、ぐりぐりと押しつけられている。

隣でそれを見ていたラッセルは涙目になりながら書類を持つ手をふるぶると震えさせていた。

「おい、ウォールス、俺あ『捕縛』つつたはずだぞ?」

「ば、ばい。」

「じゃあ、ありやなんだ?あ?」

そう言っ指差した方向にはギリオンが引きずっていた袋の中身…
…黒こげの人間の死体が横たえてあった。

すでにぼろぼろと腕がとれ、足の部分も崩れかけている。

もう識別もできないくらいに修復も不可能なものとなっていた。

「命令一つきけねえのか、屑!ボケ!カス!」

「ぶばっ!ぶごっ!」

遠慮なく足蹴を繰り返す、数発喰らわせた後足をどける。

ぴくぴくと痙攣し、ゆっくりと頭をあげたギリオンは頭に巨大なタ
ンコブを作り、悲惨な状態になっていた。

散らばった書類を拾っておいたラッセルは彼の膝にそれをそっと置き直す。

「あだだ……でも、捕まえようとしたら攻撃してきたんですぜー？
そしたらついでー。」

「ああ?!」

「……す、すみませんでしたあ!!（炭でもタコでもいいっていったの隊長なのに……）」

穴のあいた床に向かって全力で頭を下げる。

「しかたねえ……証拠隠滅はしとけよ。」

「全力でやらせていただきます!」

「あの、隊長。」

土下座している先輩の横で恐る恐る手を挙げるラッセル。
何だ、という視線を送り、質問を許可する。

「どうして上層部はシュトレインに潜入者なんか……本当に戦争を
するのでしょうか?」

「だろうな。」

投げやりな答えは彼の正直な気持ちだろう。

「でも、隊長はこうして潜入者を始末して……」

「黙れ。」

シュトレインに負けたイオカリスが再び戦を起こそうとしている。そんな噂は大陸中に広がっていることだ。

先の大戦で次期皇帝候補が死んだことで一時期沈んだ国は、新たな皇帝候補を生み出し、再びあの時を再現しようとしている。目的はただ一つ、ある土地の権利を取り戻すことでなんらかの利が国に与えられること。

その何かは上層部にしか伝えられてはいないらしい。帝国にとってそれは重要なものであり、シュトレインに奪われたことが屈辱的だと上層部の貴族が口にしたことがあった。

「隊長はご存知なのですか？」

「あ？」

「“例の地”に何があるのか。」

彼が隊長と呼び慕う上司は“戦争”を嫌っていた。

どこから知ったのか、シュトレインに潜入者が潜伏していると情報を掴み、それらを秘密裏に消しているのも彼の命令だ。

少人数のこの部隊にとって彼の意向は絶対。

だからこそ他に秘密にできている。

沈黙が包み、ギリオンが書類に書き込む音が部屋に響いた。

「さあな。それは爺どもしか知らねえことだろ。」

それが気にいらねえ。

そう言つて立ち上がり、机の上にあつた書類を手にとつた。すでにサインが刻まれ、一枚一枚に判が押されている。

「それに、どうせくだらねえことだろ。国つてのはよ。」

枚数を見ながら不機嫌そうに言うと、ふと扉の方から足音が聞こえてきた。

コンコン、とノックの後「入れ」と言われ、1人の女性が入つてきた。

知的な雰囲気を持つ彼女は部屋を見渡し、正座をしている2人と書類を持っている部屋の主を見てかけている眼鏡を指で上げた。

「レイス隊長、例の件の報告書をお持ちしました。」

「(な、何もつつこまないんだ)」

「(い、いつもこんなかんじなんですか?)」

「(ルチアって、基本たいちよ以外どうでもいいから)」

ガスガスッ

「ぶんぎゃっ」

「うぎゃー！」

ここそと話していたラッセルとギリオンを踏みつけ、そのままスルし、レイス隊長と呼んだ部屋の主であり、彼らの所属する帝国の特務部隊第3部隊隊長である、フォン・レイスに近づいた。持っていた書類を差し出し、代わりに彼の持っていた書類をすべて受け取ると、視界に入った黒こげのそれを凝視した。

「あれは何でしょうか。」

「シュトレインにいたネズミ。」

「私が始末を？」

「いや、その屑にやらせる。お前はエルハードを連れて魔物の殲滅任務に行け。」

屑という代名詞にツッコミもせずにはい、と返事をしたフォンの補佐ルチア・ミゼルは書類を確認した。

「彼女はどこに？」

エルハードというのは同じ隊員であり、名をエリヤーナ・ジェン・エルハードという、貴族のお嬢様だった人間だ。

次女に生まれた彼女は家を継ぐこともできず、政略結婚に反旗を翻し軍人となった。

俗にいう、“戦闘好き（バトルマニア）”と呼ばれる種に属する人間である。

「あいつなら修練場で暴れてんだろ。さっさと連れてけ。」

「承知しました。」

ガスガスッ

「むぎゃ」

「あうっ」

踵を返した彼女は再び2人を踏みつけて部屋から出ていった。

「てめえらもいつまで寝転がってんだ。」

うつ伏せに悶えている2人の腹を蹴り、立たせる。

背中と頭をさすりながら立ち上がると、ギリオンは死体のほうに歩き、袋に詰め直した。

「あ」

とれた腕をもって何かを思い出したギリオンが声をあげた。

「あー、あー、と繰り返して、フォンのほうに顔を向ける。」

「そついや、エルフの森ですんげえことあったべよ！」

「すんげえこと？」

袋に詰めるのを手伝おうとしていたラッセルが聞き返す。

「すんげえの！誰かは知らねえけど、雷の巨大魔法使ったんだ！」
こう、どごーんと！とジェスチャー付きで説明するギリオンに、驚きの声を上げる。

「ええ？！え、エルフの森で？！」

「ありゃ、俺もびっくりびっくり……」

「……」

その言葉にフォンは眉をひそめ、ソファに座った。

エルフの森。

純度の高い魔力が満ち、魔術師にとっては毒のような場所で巨大な魔法。

しかも、森にはいない、希少な雷の精霊の加護なしに雷魔法をあの森で……？

「馬鹿言つてねえで、さっさと始末して来い。てめえは後で隊の馬小屋掃除だ。」

「ええええ？！」

「なんだ？死刑の方がいいか？」

「よ、喜んでさせていただきます！」

「パシリもつれてけ。」

「えええ？俺もですか?!」

「武器整備追加。」

パシリというのはラッセルのあだ名……というより既に名前と化していた。

う、馬小屋……と沈んでいるラッセルの肩をポンポンとたたき、笑っているギリオン。

彼の持つ黒こげの腕とルチアから受け取った書類を見て、これからこのことを考えたフォンはため息をついた。

「（めんどくせえ。）」

本当に……滅ぼしてしまおうか。

同日。

「では、魔物討伐の際、その死体を見つけた……と？」

「ああ。」

円卓の周囲に5人の人間が座り、フォンもそこに座っていた。集まっている5人は帝国の特務部隊を背負うトップ5だった。

フォンの報告書は先ほどの死体の件が書かれている。シュトレインではなくイオカリス国内で見つかったと偽造したものだ。

「それで、その死体は？」

「部下に火葬させた。魔物にやられたんだろうが、毒素が紛れてたから処理してやったよ。」

「真か？」

この中で一番の年長らしき男が腕を組んでにやりと笑っているフォンを睨んだ。

「おい、いくら死んだのがてめえの隊の人間だからって、疑うのかよ、じじい。」

「小僧がなめた口をきくでない。」

「そのガキに負けたのはどこの耄碌爺だよ。」

挑発し、悪態をつく2人の会話にしびれを切らしたのが、フォンの隣に座っていた1人が口を開いた。

「死んだとしても遺体を持ち帰り、正確な処理を行ったレイスは正しいと思うが？」

「その死体を作ったのがレイスだと思わんのか。」

「証拠でもあんのか、爺。」

「ぐ……」

死体はすでに処理済み。

死んだ隊員は魔物の討伐という名目で国を出ていたと書類に明記されている。

つじつまは合っているのだ。

しかし、実際に彼がいたのはシュトレイン国内のエルフの森。イオカリス国内で死ぬことなどありえないのだ。それを知り得るのは彼に指示した人間と、彼を殺した人間。

「それとも、俺がそいつを殺す理由でもあるつてのか？」

下っぱ隊員を殺す暇があるなら自分の隊員虐めてた方が楽しい、と大笑いする。

「わしを侮辱しているのか？」

「そりやてめえだろ。俺を疑う前に、自分の犬は自分で躡とけ。脳味噌つるつる爺。」

ガンッ！

フォンの座っていた場所に巨大な剣が叩きつけられる。その場は粉々になり、勢いで小さなクレーターができた。

「ドバール隊長！」

年長の男、ドバール・ブオンコスは斧のように叩きつけた大剣で手ごたえを確認する。しかし、そこにつぶれた死体はなかった。

「イオカリス帝国所属特務部隊第5部隊隊長、ドバール・ブオンコス。」

その声はドバールの背後から聞こえてきた。

振り向けば、元々彼が座っていた、今は潰された席の反対、ドバールの席にフォンは何事もなかったかのように座っている。

「あんたは楽しい楽しい戦争がしてえらしいが、俺は平和主義だ。」

塵一つ、埃一つついていない彼は先ほどと変わらずに腕を組んだ姿勢のままだった。

大剣をおさめたドバールは睨みを利かせたまま拳を握りしめている。

「そんなに戦争してえなら、俺が相手になってやんよ。」

不敵な笑みを浮かべた自分より若い男に挑発される。

ドバールはもとより気に入らなかった。

この男の存在が。

「特務部隊第3部隊隊長、フォン・レイス……貴様……死ぬぞ。」

睨みあう2人と、呆れてため息をついている同席していた3人は先ほどの破壊音で扉の前に人が集まってくるのを感じていた。しかし、開けることはない。

ドバールの言葉にフォンは嘔き出す。

「何馬鹿言っただ？人間はいずれ死ぬ。当たり前のこと言っただじゃねえよ、じ・じ・い。」

それと、とドバールを指さす。

「てめえの“ご主人様”に伝えとけ。『無駄なことはするな』ってな。」

部屋の扉が開くと同時に警備をしていた隊員が入ってきて、部屋の惨状にあんぐりと口を開けた。

修理しとけ、と命令すると怯えながら返事をしてくる。

他の隊長が出ていき、軽快な足取りでフォンも立ち上がった。

ドバールは部屋の中から、出ていくフォンの背中を見て、鼻で笑った。

「いずね、消してくねるわ。」

第5話 『狼と男』

薄明るくなってきた森は、少し冷たい空気を纏っていた。静かなそこで鳥たちがピピピと鳴き始めている。

里の小さな道具屋で入手した服を着て肌寒さをどうにか防ぐ。さらに外套を着こみ、宿屋の各部屋に設置されているベランダに出て木製の手摺から身を乗り出すように腕を乗せた。ふと空を見上げると、完全に修復された結界が魔力を反射して輝いてみえた。

出立の時間までまだ時間があるが、早めに目が覚めた雄呀は静けさの中にあるココンを見渡していた。ふだんはぎりぎりまで寝ている性だが、今日は早くに目が覚めてしまった。カザスもすでに起きているだろうが、雄呀が部屋を出るまで自分にあてがわれた部屋でじっとしているだろう。

地球で言うと4時くらいだろうか。

「早起きだねえ、おにーさん。」

すつと隣に気配が現れ、手摺に座った。
寒い中、薄着のそいつをちらりと見た後、ため息をつく。

「なんか用か？」

「用なんてねえよ？朝のご挨拶。」

おはようございます、と笑いながら頭を下げる。

この男、トライナーは昨夜一銭も払うことなくテーブルに居座っていた。

「しかし、驚いたねえ。」

「なにがだ。」

「いろいろと。」

そう言っ指を雄呀の方に向けた。

「おにいさんもそうだけど、特にあの仏頂面の美形さん。」

笑っていた表情に浮かぶ眼は逆に笑っておらず、雄呀は鋭い視線をやる。

この男とは一度は敵として接した時から信頼という可能性は皆無だ。

そして、今この男は探っている……いや、確認をしている。

「俺、結構いろーんなとこ転々としてるからわかっけどさあ、あれは魔剣だけど……おにいさんが作ったんだろ？」

「魔法使えないのによくわかるな。」

「っていうか、匂い？俺、“鼻”がいいんだ。」

時にお金の匂いはビンビン来る！と笑った。

それに、と腰に下げていた細身の剣を鞘ごととり、雄呀に差し出す。鞘で封じられているのか、仄かに温かく強い魔力が感じられる。

「炎の魔剣か。」

「へえ、わかんんだ？」

「あらかた、前の魔法はそれが素だったんだろ。」

目の前に差し出された剣を受け取ることなく、見ただけでそう言った。

トライナーが蓮たちを襲った時使っていた火属性の魔法は、この剣の魔力を使った魔法だった。

「そ。こいつは炎の魔剣、シュトツフエン。知り合いの遠い先祖が作ったらしい。おにいさんが作った剣は？」

「シュバルツ。」

「かあっこいー。」

ヒュー、と口笛を吹いて魔剣シュトツフェンを腰に戻す。

「っとこれはただのおまけ話……ほんとに言いたいのはさあ」

ザッザッザ。

「すみません、カザスさん。」

「……」

無言でシュバルツをふるい、草木を切り開いていくカザスを先頭に後ろに雄呀、蓮、ユーナ、ジエスティアが続いていた。魔力が安定している雄呀とジエスティアは顔色がよく、しっかりと足取りで歩いている。

「森を出たら嫌というほど疲れさせてやるから、体力温存しておけ。」

「えっ。」

逃げ腰になった蓮の肩を叩き、さっさと歩けと促した。

「とりあえず森を出たら近くの町に向かいつつ、野宿しながら修行するぞ。」

「は、はい。」

「地図によると、小さな村があるらしい。2日くらいでつくだろう。」

「ジエスティアがユーナと一緒に地図を広げそう言った。」

「ココンを出てから数時間がたっていた。」

この世界のことや、蓮たちがいた地球のことを放しながら歩いていると、森が開けてきた。

だんだんと道のようなものが見え、木の海が途中で消え、広い街道に出た。

「抜けたー！」

「あー、しんど。」

嬉しそうな表情をした蓮の隣でコキコキと首を鳴らした雄呀。シユバルツをしまい、カザスは陽のまぶしさに目を細める。

「この道沿いに行こう。」

方角を確かめ、そう提案する。

それに賛同し、再び道を見渡す蓮はあれ、と首をかしげた。

「あんまり人が通ってないけど……」

「こんな田舎に好き好んでいく人間は少ねえってことだ。すれ違ってても行商かギルドの人間とか、あの守銭奴みてえな自由人だけだろ。」

守銭奴……トライナーのことだろうか。

蓮が朝起きた時、トライナーが雄呀と一緒に一階に下りてきた。不機嫌そうな雄呀と別ににこにこ……いや、にやにやという表現が正しい笑いを浮かべたトライナー！

彼はまだこの里に居座るらしく、「またな」と言った。

それに対してカザスは睨みを利かせ、雄呀は舌打ちをしていた。

「ユーガさん、トライナーさんのこと嫌いなんですか？」

「お前は平気そうだな。」

「なんか、話してたらあんまり怖くなくなってきたっていうか……」

「俺は嫌いだ！」

一気に不機嫌パラメータが上昇していった。

これ以上この話題が続いて行くとひどいことになりそうだと察し、口を閉じる。

「にしても、こっからずっと歩きはきついな。」

面倒臭そうに言うと、蓮たちから離れた。

そして足もとに大きな魔法陣が描かれる。広がった陣の上に物体が構築されていく。

出来たのは町でよく見かけた馬車だった。

全員が乗っても余裕がある広々としている。それを見て蓮たちは感動した。

「こ、これはなんと魔法なのだい?!」

「秘密ー。」

「ユーガさん、すごいです!」

「すごい!」

ジエスティアはかなり感動しているらしく、馬車をあちらこちら見まわし、蓮は絶賛した。
ユーナも目をキラキラさせている。

「まあな……だが、一つ問題が……」

『え?』

「これを引く馬がない。」

『……………』

「おおー。」

「ふわふわー。」

馬は結局諦めたが、雄呀は再び陣を描いた。

そこから現れたのは大きな白い毛並みの狼だった。

？お久しゅうございます、主殿。？

「ああ。」

白い狼は雄呀に向かって頭を下げ、その場に伏せをして目線を合わせた。

鋭い牙を見て蓮は顔を引きつらせたが、雄呀が親しく話している様子を見て隠れはしなかった。

「あああああの、ユーガさん？こ、この犬って……」

？グルルル？

「ひいつ?!」

隠れていた牙をむき出しにし、蓮に向って睨みを利かせる。

「こいつは俺が契約してる召喚獣で、白狼のシグニス。犬っていうと怒る。」

「すみませんでしたあああ！」

超高速で土下座をした蓮を見てシグニスは鼻を鳴らした。

？次にその言葉を申してみよ、頭から食い殺してやろう。？

「んなことより、シグニス、ちょっと頼みがあんだけどよ。」

？はい。？

「馬車を引つ張る馬がいなくてさ、引つ張ってくんねえか？」

そう言われたシグニスは自分の背後にある馬車を見た。
確かにそこには馬がない。

？我が、ですか？？

「そうそう。お前しか頼めるやついないんだ。」

？我しか……（主殿は我を頼ってくださいている！なんでも壊す馬鹿竜ではなく、性悪な狐でもなく、腹黒いデカブツ竜でもない……この我を！！）？

ジーンと感動して黙り込んでしまったシグニスに首をかしげ、雄呀はおーい、と目の前で手を振った。
それにはっとした巨体は尻尾をぶんぶんと振り、お任せください！と言った。

「（犬だな。）」

「（犬にしか見えない。）」

そう思われているとも知らず、シグニスは馬車の近くに行くが、馬車の方が小さいためか、バランスが良くない。

ふとシグニスは息を吸い、魔力を纏うとだんだん身体が小さくなっ

ていった。

丁度いい大きさになったのを確かめてから、これでよろしいですか、と聞いてきた。

「いいんじゃないの？じゃ、カザス。」

「はい。」

馬車をひくために道具を取り付け始めるカザス。

残った雄呀たちは荷物を積み込む作業に入った。

ココンで食料を買い込んだため、結構多荷物になっていたのだ。

雄呀がそばからいなくなり、シグニスはジロリと自分の目の前にいるカザスを見る。

白い毛並みに埋まっている金色の眼がカザスを映していた。

数分静まっていたが、シグニスが口を開いた。

？貴様はまだ主殿のそばに居るのか、小僧？

黙ったままのカザスは馬車とシグニスを繋げていた。

「……………」

？我“等”は貴様を良く思ってはおらぬぞ、わかっておろう？

グルル、と唸り声を聞いてカザスは手を止めた。

そして初めてシグニスと目を合わせた。

金と青が交差する。

？貴様はいつか主殿を“殺す”？

「俺は師匠を守る。」

？守る？ククク……笑わせる。？

歯を出し嘲う。

？イオカリスは……いや、この世界は主殿に救われ、そして、主殿を殺す。いくら名を捨てても、血は消えはせぬぞ。？

「……それは、予言か。」

？予言ではない、運命さだめだ。？

カザスがつけた道具の心地を確かめ、立ちあがる。いくら小さくなったサイズは馬三頭分はあった。

ぶるぶると首を振り、その場に座る。

？しかし……主殿を生かしているのも、貴様だ。認めたくはないがな。？

久しぶりに見た自分の主は魔力が大幅に削られていた。もとから無限に近い魔力を持っていたためか、あまり変わらないように見えるが、魔力で生きている召喚獣にはわかる。

そして、雄呀には右腕がなかった。

召喚されずとも、魔力で繋がっている召喚獣は主のことはわかる。
何が起き、何を感じるかも。

？主殿が貴様を殺すことはないが、我等は違う。主殿を傷つければ、
たとえ契約を切られようとも、貴様を食い殺す。？

「……………ああ。」

ギョツと最後の固定をすると、馬車の後ろから声がかかった。

「できたかー？」

「はい。」

手綱の具合を見て言うと、雄呀はふむふむと返事をした。

「じゃあ御者はカザスが……………」

>我はこの者は嫌でございます。 <

「え」

「俺も嫌です。」

「は？」

間に立つ雄呀をはさんでシグニスとカザスが火花を散らすと、ふん
つとそっぽを向いた。

わけもわからず2人を見比べる。

「お前ら、何かあった？」

『いえ、なにもありません（ございません）！』

息びつたりで答えた彼らに首を傾げるが、とりあえずジエスティアに頼んでみると、シグニスも了承した。

馬車の箱に乗った雄呀はすぐに寝転がり、その横にカザスが腰をおろした。

朝早かったためか、ユーナはうとうとし、外套を丸めた枕を下にして寝ていた。

蓮はジエスティアの横に座って手綱を扱う彼女を見ていた。

手綱を引かなくとも、シグニスならきちんと歩いてくれるが、魔物が馬車を曳いているのは珍しくないが手綱がないのはいけない為、必ずつけなければいけない。

ゆったりと歩くシグニスの背を見ながら綺麗に光る毛並みに見惚れていた。

「シグニスの毛は綺麗だなあ。」

>そうか<

「私もこのような美しい生き物を見たのは初めてだ。」

>そうか<

「えっと……良い天気ですね。」

>そつかく

『……………』

「（か、会話が成立しない。）」

「シグニスってユーガさんにしか話さないのかな？」

こそこそ

「そつかもしれないな。」

こそこそ

「なんか……………」

こそこそ

「ああ、カザスに似ているな。」

ギロツ

> なにか？<

『い、いえ……』

気まずい雰囲気にならず、助けを求めようと雄雅の方を振り向く。

「くかー……」

「（ユーガさあああん！！）」

この後、雄呀が起きるまで馬車には沈黙が流れているのだった。

某刻……

「ここかな？」

崩れた瓦礫を踏みつぶし、漂う空気に目を閉じる。
大きく息を吸いこむと、眉をひそめ、眼を開けた。

「臭い。」

あたりを見渡し、何かを辿るようにして草の間を歩く。
匂いを嗅ぐと、ふとそれが途切れた。

「こん匂いはあいつの匂いだ……まったく。まーた殺したのか。」

魔力の臭いと焦げた肉と血の匂い……懐かしい匂いが台無しだ。

「あのお馬鹿は何をしてるんやら。」

大きな岩に腰掛け、空を見上げる。
雲ひとつない快晴の青空。

「はああ……またすれ違いだとき、シュトツフェン。」

腰にさした剣を取り、鞘を撫でる。

装飾の小さな赤い魔石が返事をするようにきらりと光った。

いつものふざけた表情はない。

今朝、話した男のことを思い出す。

『イオカリスの皇子様って生きてたんだ？』

『あいつはもうイオカリスの人間じゃない。』

『そう言っていていられるのも今のうちなんじゃない？』

『こっちはわかって今ここにいた。』

『きついねえ。』

『……………』

『もしバレれば戦争かもよ……しかも、10年前よりずっと酷い、ね。』

『その時は……』

「ありや、本物だったなあ。」

甘っちょろい眼じゃない。

全部を知っていて、それでいて決断した眼。

「今度はどっちが勝つんかねえ。」

「な、シュトゥツフェン。」

人間っていうのは、ほんと……

おもしろい。

第6話 『力の始まり』

「むむむうー……」

「へたくそ。」

「ぜえーはあーぜえーはあー、こ、これ、難しく、ない、っすか？」

「へたくそ。」

走る馬車の中、手綱を持つジェステアと話し相手になっているユーナ以外の3人が箱の中に入っていた。

カザスはじつと眠るように眼を閉じて座り、その横にダルそうに寝転がり、右手で肘をつき頭を乗せている雄呀がいた。

時々欠伸をしながら目の前で四苦八苦している蓮の相手をしていた。

シグニスが馬車を引いてすぐ、雄呀は蓮の魔力制御の訓練を始めた。

最初に教えたのは魔力についての基本的なことだった。

魔法陣を使用した魔法、詠唱を使用した魔法。

魔力の属性は火、風、水、地、光、闇とその属性を融合させた派生

魔法があることなど、簡単なものを教えた。

「ちなみに俺は全属性。」

そう言つて雄呀は掌を出し、六つの光の球を浮かべた。

赤が火、風が緑、水が青、地が茶、光が白、闇が黒、といったように色がある。

「あれ？でも、前にユーガさんが使つてたのつて黄色い陣が出てたよな……」

「黄色は光と風を融合した雷の属性……つてかマジで覚えてねえし。」

「あはは、あの時は目が据わつてたから。」

蓮は雄呀の雷の魔法を思い出すと、背筋がぞくつとした。

あんなものを自分が喰らつてしまったとしたら、死んでもおかしくない。

「まずは魔力を制御できるようにならねえとな。」

……と、魔力を実体化させることから始めたものの、なかなかうまくいかないのが現状だった。

「ただ力めばいいつてもんじゃねえ。感じる。」

「感じる？」

起き上がった雄呀はどこから取り出したのか、トリの実を齧り言った。

「お前、あの守銭奴と殺り合っただろ？」

「はあ。」

蓮とユーナを襲ったトライナー。

勝敗は決しなかったが、あのまま続けていればきつと自分は負けていた、と蓮は自覚している。

「その時、自分から力が湧きでる感覚がしなかったか？」

「あ……たしかに。いつもより身体が軽かったような。」

自分の体ではないような軽さで、翼が生えたようだった。

それと同時にその力が自分を侵していく感覚を覚えた。

死ぬ。

そう思った瞬間、何かが自分を包んでいくような……

「それはお前の感情に反応した魔力だ。」

「あれが？」

自分の掌を見つめて握り、息を飲む。

「どう感じた？」

「すごく、強くて……なんか、自分が消えるような。」

自分の世界に入りつつある蓮を見て、雄呀は頭をガシガシとかいた。何度か感じた蓮の魔力はどれも不安定だが、どれもが雄呀の感覚を刺激するものだった。

攻撃的で、反発的な普段の蓮からは考えられないようなもの。

それを自覚しているのかいないのか……

「（あぶねえな。）」

ただでさえこんな世界にきて身体が慣れていない状態なのに、これで魔力に“取り込まれ”でもしたら、最悪だ。

早く制御だけでも教えないと、こいつの存在が危ない。

「“死”を感じた瞬間に意識で来たんだな？」

「はい……なんか、こう……中の方から。」

手っ取り早いのは魔物の巣窟に放り出して強制的に魔力の制御を身につけさせることだが、これは紙一重の賭けになってしまう。このヘタレのことだ。

逃げて帰ってくるだろう。

「しょうがねえ。」

そう言って雄呀は左手で蓮の左手を握った。

突然の行動に慌てる蓮をスルーし、黙ってる、と一喝した。

「俺が手伝って、お前に自分の魔力を“感じ”させてやる。」

「そんなことできるんですか？」

「本来なら、魔力の循環のこともあって両手が好ましいが、生憎ねえんでな。」

我慢しろよ、と言われ頷く。

手を握られ、かなり心臓がときどきしているが、急に強い力で握られ思わず痛いと言ってしまった。

「手汗が気持ち悪いんだよ！」

「自然と出ちゃうんですよ！」

「てめえは初めて女子の手握る中学生か！俺だって好きで男の手握ってんじゃないんだ！握るなら、可愛い女の子がいいんだよ、このタンコブ！」

「今日はタンコブ作ってませんよ！」

手を握りながらああだこうだと言いいいになりつつあったが、それは雄呀がカザスに命令した後に終わった。

蓮の頭には巨大なタンコブがぼつんとあり、黙りこくった彼を尻目に目を閉じる。

「お前も目え閉じる。その方が感覚が広がる。」

落ち着いた声で言われ、蓮はそっと目を閉じる。

握られている手は少し冷たく、自分の手が熱すぎるのではないかと

思うほどだった。

しばらくして、体温が雄呀にうつっていくのを感じた。

自分の中の何か……きっとそれは魔力と呼ばれるものだが、動いた。

「（これが、僕の魔力。）」

だんだん左手に集中していくそれはどんどん中から溢れていく。

それを感じていると、握っていた手が小さく震えているのが伝わってきた。

眼を開けてもいいのかわからず、開けようか開けまいか迷っている

と、前から「そのままだ」と言われた。

じつとそれを感じ、流れていくのを感じる。

心臓、足、脳、眼……あらゆるところに魔力を感じる。

「これが……」
蓮が自分の魔力を自覚している前で、雄呀は今までにない感覚に耐えていた。

握った手から自分の魔力を流し、蓮の中の魔力を刺激する。

そうすることによって、“攻撃されている”と錯覚させ、防衛反応としての魔力を発動させていた。

そのため、蓮の魔力は雄呀を攻撃する。

今、雄呀の手には蓮の魔力がじりじりと痛みを与えている状態だった。

「（やっぱっ、こいつの魔力はやばい）」

魔力の総量、制御は雄呀程ではない。
しかし、魔力の質は別だった。

「（こんな攻撃性の魔力……っ）」

触れている蓮の手から自分を襲う魔力を押さえつけるが、痛みはおさまらない。

「（魔力の属性なんて関係ない……蓮は例外もんだぜっ）はあ」
思わずため息をついてしまったが、蓮には聞こえなかったらしい。
しかし、隣にいたカザスには聞こえていたらしく、次の瞬間蓮の手を払い、雄呀と引き離れた。
急なことに蓮は目を開いた。

「あれ？」

目の前には雄呀の手に布を巻いているカザスと、天井を見てなすがままになっている雄呀がいた。

「手、どうしたんですか？」

そう聞くと、カザスがちらりと見てきたが、何も言わなかった。

「気にすんな。それより、魔力……感じただろ？」

「はい！凄くわかりました。」

嬉しそうに手をグーパーグーパーと確かめるように見る。

その様子を少し表情を崩した雄呀が見ていた。

「師匠。」

「大丈夫だよ、こんなもんはすぐ治る。」

「……あとで消毒を。」

「はいはい。」

雄呀は治癒魔法が使える……しかし、使わない。

カザスは雄呀が自分で治癒魔法を使わないことを知っている。

自分の傷を自分で治すことをなぜか禁じているのだ。

カザスが怪我をすれば迷わず治すくせに、自分には絶対に使わない。大きい傷も、小さな傷も関係なく、自分の自己治癒能力に任せている。

そうならば自然と、怪我をすればカザスが手当てをすることになっている。

布の巻かれた手を見れば、僅かだが痙攣を起こしていた。

それをぎゅっと握れば、痛みはあるが、痙攣を無理やりおさめることはできた。

「じゃあ、もう一回やってみる。」

雄呀がそう言えば、蓮はすぐに目を閉じて集中し始めた。

馬車の中はことごとくという音だけになり、しばらくして蓮の手を覆うように光が灯った。

それは黄色く、時折バチバチと音を立てる。

「はぁ……っ、これ！」

バツと雄呀の方を向くと呆れたような表情をしていた。

「なんでいきなり雷属性なんだよ。」

「なんか、ユーガさんの魔法しか思いつかなくて。」

「まあどうでもいいけどよ。」

手を覆っている魔力を指す。

「それを指先に集中させてみる。」

「はい！」

蓮は再び集中し始めるが、魔力はゆらゆらとコントロールが悪い。

「うーん。」

「さつき集中する感じを覚えてだろ。それを思い出せ。」

「ぐぬーー。」

力む度に魔力が蒸発していくように消えてしまう。

雄呀は再び寝転がり、その様子をしばらく傍観することにした。

蓮を見ながらうつらうつらと船をこき始めてくると、カザスが横か

ら外套を丸め、頭の下に敷いた。

力の抜けた頭は重い、そんなことも気にしていないカザスは軽々と持ち上げていた。

枕となったそれに頭が乗ると、本格的に目が閉じる。

そう言えば、俺が魔法を使えるようになったのはいつからだっただっけか……

何度も死にそうになって、気づかないうちにいつの間にか使えるようになっていた。

魔力が何なのかさえもわからずに、ただ、必死になっていた。

そうか……

もう、そんな気持ちになることもないのか。

眼を薄らと開け、布の巻かれた手を見る。

久しぶりに“痛い”と心から感じた。

さっきの痛みは、蓮の魔力……あいつが抱える問題の大きさに比例している。

「（いつか、レンも……）」

目の前で力を得ようとしている自分と同じ境遇の地球人。救世主なんてもの選ばれてしまった犠牲者。

それでも、こいつはまだ“大丈夫”なんだ。

「師匠。」

ぼーっとしていた雄呀にカザスが声をかけると、寝がえりを打って丸くなる。

「寝る。しばらくお前が見てる。」

「はい。」

おやすみなさい、と小さくカザスが囁くのが聞こえた。

ガキンッ

『はあ、はあ………』

地面に刺した剣は血を吸い、ナマクラ同然となっている。
足もとに落ちていた抜き身の剣を拾い、引き摺るようにして歩く。
額から血が流れ、頬を伝う。
歩くたびに踏みつける死体が、敵か味方かわからない。

これは、誰だ？

襲ってきたやつを殺して、剣を向けてくる奴を殺して、周りにいた
人間を殺して……
全部を殺して……

全部？

俺は何と戦ってるんだ………？

なんで、敵がいるんだ？

そうだ……

『俺は、生きる。』

自分で意識を向ければ血は止まり、痛みはなくなる。

『俺は……生きる。』

足もとで何かが動いている。

たしか、一番最初に切りかかってきた人間と同じ服を着ている。

剣を握りしめ、足元に突き刺せば、痙攣を起こした後に動かなくなつた。

握っていた手を放す。

遠くで叫び声が聞こえる。

雄叫び、と言った方が正しいのだろうか。

『どうでもいい。』

背後で剣の抜かれる音が聞こえる。

何十人も人の気配に振り向いた。

奴等は武器を持たない自分に剣を向け、「殺せ」と叫んでいる。

血に濡れた手で宙に手を掲げる。

魔法陣は一瞬で現れ、中心から剣の柄が生まれる。

それを握り、陣から引き抜けば、鋭く長い剣が光った。

そうか、こんな魔法もあつたのか。

これでまだ、戦える。

『まだ、俺は生きてる。』

まだ……………殺せる。

バツ！！

眼を覚ませば、そこにはカザスがいた。
丸まって寝ていたはずが、急に起き上がったことで右側にバランスを崩しそうになる。
それをカザスが支えてきた。

「どうかしましたか？」

雄呀から手を放し水筒を手渡してくるのに、自分らしからず動揺しながら応じる。

「あ、いや……なんでもない。」

そう言って受け取るうと手を出すと、そこには赤黒い液体がついていた。

ぼたぼたと馬車の床に落ち、服を濡らす。

『殺せる』

思わずカザスの手を弾いて水筒を落としてしまった。

目を丸くしたカザスは雄呀の焦った様子を見て水筒をすぐに拾い上げて再び差し出してきた。

「大丈夫です。」

カザスが優しく言う。

その言葉に再び手を見ると、そこには白い布が巻かれていた。それ以外はなにもついていない。

赤黒いものはいつの間にか消えていた。

「そう、か……そうだよな。」

夢だ。

ずっと前に見なくなった夢……いや、現実だった夢。

“俺”が“俺”じゃなくなった時の。

「師匠、水を。」

「わりい。」

水を一口飲み、周りを見ると蓮やユーナ、ジエスティアが眠っている。
気がつけば周りは暗くなり、シグニスがこちらをちらちら見ながら番をしている。

「夜明けに出発します。」

「結構寝ちまつたか。」

「何か食べますか？」

荷物を漁るカザスに頷くと、保存用の食料を差し出された。
それを受け取り馬車から下りてシグニスが伏せている場所に寄りかかる。

シグニスが耳をぴくりと動かし、頭を上げる。

座り込んだ雄呀の脇に鼻を押し付け、鳴らした。

空には星が瞬いている。

包みを開けていると声が掛けられる。

> 魔力が揺れておられます。 <

「なんか、夢見悪くてよ。」

決して美味しいとは言えない食料を食べながら、シグニスの鼻頭をなでる。

喉をならして頭も押し付けてくるシグニスは本当に犬のようだ。

「らしくねえよな。」

>人間とはそのような生き物であります。 <

「そっか……俺はまだ、人間だったか。」

こんな俺でも……まだ。

>主殿 <

「本当、面倒くさい奴だよな俺。」

自嘲し、包みをくしゃくしゃにして掌に乗せて燃やした。
炭も残らぬほどになくなったそれを握り締める。

>貴方をそうさせたのは、この世界でございましょう <

シグニスが鼻をスンとならした。

狂ったこの世界で、誰もが狂わずにはいられない。
いつか……

「（お前は、間違えるなよ）」

心地よい毛並みと規則正しい呼吸の動きにそっと目を閉じた。

第2章登場人物紹介

トライナー

守銭奴の何でも屋。

炎の魔剣、シュトツフェンの使い手。

雄呀のことを“怖い兄さん”と呼びタダ飯を喰らう怖いもの知らず。雄呀とカザスの事情を知っているような口ぶりする。

鼻がよくきくらしく、魔力の臭いを嗅ぎ分けられる。

リイリイ

エルフの森で出会った金髪少女。

大きな槍斧を振り回し、Sランクの魔物を弱らせる程の戦闘能力を持つ。

蓮のことは好きではないらしい。

ギルドランクA。

へい

ココンの里の長でエルフ。

先見の目を持つと言われる。

いつも語尾に“しづめいます”とつく。

ウロン

里長の補佐をしている大男のエルフ。
気さくで賑やかな性格だが、過ぎると鬱陶しがられる。

イオカリス帝国所属特務部隊第3部隊

フォン・レイス (17)

第3部隊史上最年少の隊長。
銀髪に緋色の目を持つ。

傲慢不遜、唯我独尊、自己中心で俺様気質、暴力は日常茶飯事で奴隷願望を持つ人間は数多い。

帝国で最強の魔術師と呼ばれる使い手だが、主に獲物は刀。
某部下いわく、かなりの下戸。

帝国が嫌いだと公言しており、多くの人間から敵視されている。

ルチア・ミゼル (24)

フォンの部下で秘書的役割を担っている眼鏡美人。
フォンを崇拜しており、彼の毒舌暴言暴力は愛情の裏返しと思っている。

補助魔法が得意で、優秀だが仕事には厳しい。

エリヤーナ・ジェン・エルハード (21)

貴族の娘だが、政略結婚に反対し家出。

戦いに快感を覚えるバトルマニアで、少しずれた知識を持っている。魔力操作に欠陥があり、広範囲魔法しかできない。

ラッセル・オルセウン (18)

第3部隊に配属された新人。

通称“パシリ”と呼ばれ、一番かわいそうな位置にいる子。

よく先輩のギリオンに巻き込まれてフォンに正座をさせられている。

ギリオン・ウエリー・ウオールス

炎属性魔法を得意としている第3部隊の馬鹿。

エリヤーナに負けず劣らずのバトルマニアで、問題児だった。

主にフォンに足蹴にされ、最近慣れてきてしまっている危ない傾向がある。

裏第6話 『新入隊員の考察』

フォン・レイスという男は凶暴である。

イオカリス帝国所属特務部隊第3部隊に配属になった新入隊員のラッセル・オルセウンが受けた第一印象がそれだった。元々が通常の軍部隊への所属になるはずだったが、いつの間にか第3部隊隊長の目に止まり、強制的に配属されることになってしまった。

それからの彼の生活は一変したのは言うまでもない。

配属1日目、元気にあいさつしようとしたら「うるせえ！」とストリートパンチをもらった。

配属2日目、隊長に紅茶を淹れたら、「薄い！」と見事なアップパーカットを喰らった。

配属1週間目、いきなりB級の魔物退治を命じられ、命からがら帰還したが機嫌が悪かったらしく何も言わず首を掴まれ投げられた。

配属3週間目、現在先輩のギリオンと馬小屋掃除中。

糞を新しいものと取り換え、餌をやる。

ふう、と息をつき後ろを向くとギリオンが座り込んで何かを眺めていた。

「ギリオンさん、ちゃんとやらないと隊長に殴られますよ。」

「俺、殴られるより蹴られる回数の方が多から平気ー。」

「いや、そう言う問題じゃ……」

時々この人はマゾなんじゃないかと思う時がある。

ラッセルは呆れながらも忠実に隊長の言いつけを守る為、馬の糞を片づけ始める。

先日、ギリオンが同じイオカリスの軍人を殺して帰ってきた。

その人は同じ特務部隊の第5部隊、ブオンコス隊長の部下だったらしい。

レイス隊長はそのことでブオンコス隊長と言い合いになり、会議室を半壊させたとか。

会議から帰ってきたときのレイス隊長はそれはもう怖いくらいに笑顔でギリオンさんを蹴り倒していた。

「いつものことだから」と笑顔で蹴られている彼を見てさらに怖くなったのは言わないでおこう。

レイス隊長はいろんな人によく思われていないらしい。

彼がイオカリスで“最強”といわれている魔術師であることは配属される前から知っていた。

剣術も“抜刀剣術”という珍しいもので、一瞬で敵を切り殺す恐ろしい技らしい。

ラッセルは見たことがないが、ギリオンが言うに「特別な技」だと。さらにあの性格だ。

誰にも敬語は使わない。

媚びない。

従わない。

皇帝の前でもその態度を崩すことはなかったが、そんな彼を見て皇帝は何の反応も示さなかった。

いや、それが当然だと言うように普通だったのだ。

レイス隊長は何者なんだろう？

ぼーっとしながら糞の処理を済ますラッセルは馬小屋の入口に気配を感じた。

白い馬を引いて入ってくるその人物に声を掛けられる。

「あら、ご苦労様。」

ゆったりとした足取りと綺麗な姿勢で馬を引き連れている彼女、エリヤーナは笑みを浮かべながら労わりの言葉を贈った。

さすがは貴族のお嬢様、といった優雅さで近づいてくる。

「エリヤーナさんも、魔物の殲滅ですよ。」

「ええ、でも弱すぎて退屈しちゃったわ。」

自分の得物である長槍の刃を指でなぞりながら艶のあるため息をつく。

よからぬ妄想を抱きそうになるその様子に、ラッセルは「そうですか」と返した。

「なかなか興奮できなくて……冷めてしまったわ。」

そう言っつて馬の鬣を撫で、小屋に戻す。

「そう言えばルチアさんも一緒だったんですね。」

「ルチアは隊長さんに報告よ。」

「今たいちよー、機嫌悪いからやめといた方がいいと思うけどな。」

「いつの間にか2人の間に座るようにして移動していたギリオンが言う。」

「あら、また？今度は何が原因なのかしら？」

「第5の爺だとさー。」

仮にも部隊長を爺と呼ぶギリオンは馬鹿に違いない。

こんなところを他の隊の誰かに聞かれたら一発で処分対象になって

しまつ。

しかし、兵は彼そのだけではなかつたらしく。

「隊長さんを怒らせるなんて、余程のことをなさったのね。あのおじさま。」

お、おじさまって……

「ルチアさん、大丈夫でしょうか。」

「大丈夫（でしょ／よ）」

2人の台詞がかぶる。

それほどの確信があるのか、と思っているとエリヤーナが笑いだす。

「ルチアは隊長の拳に愛を感じているのよね。」

「あれ？殴られると興奮するんじゃないかな？ たっつけか？」

「同じことだわ。愛だからこそ、燃え上がるのではなくって？」

「暴力に愛もなにもないっしょー。」

「あら、わからないものよ。魔物も自らの子を強くするために谷から落とす、とよくいわれているし。」

「いや、死ぬでしょ。俺だったらそのまま逃亡するね。」

「私はロマンティックだと思うのだけれど？ ルチアの気持ち、わかるわ。血というものは人を興奮させる魅惑の存在だもの。」

「それ、ただ出血してるのが原因だと思っけんど。」

「ルチアさん大丈夫なんですか?!」

急激に彼女が心配になったラッセルだったが、その後顔を合わせた時、ルチアは頬を赤く染め、嬉しそうにしていた。

頭に痛々しい包帯を巻きながら。

フォン・レイスという男は謎に包まれている。

入隊したての頃はその日その日が大変で、そんなことを考える余裕がなかったからか、最近になって気になり始めた。

隊長室に居ることの多い彼はいつも窓際に椅子を置き、外を眺めている。

まるで、何かを待っているかのように遠くの方を。

その時間は話しかけてはいけないと暗黙の了解になっていた。

もし、話しかけてしまったら拳が蹴り、もしくは彼の魔法でとんでもないことになってしまう。

理由は誰も知らないらしい。

第3部隊の隊長になってからは全ての隊員を配置換えし、今の編成を1からし直したときいた。

そのためか、誰も隊長の詳しい事情を知っていないのだ。

隊長は謎に包まれている。

一度だけ彼のデスクに倒された写真立てを、彼が遠征に行っている際見てしまったことがある。

そこには魔具で記録した映像を紙に写し、その魔力が薄れ色褪せた写真が挟まれていた。

銀髪の隊長らしき少年と、見たことのない金髪の少年が並んで写っていた。

隊長は楽しそうに笑っているが、金髪の少年は隊長の手を握っているだけで無表情だった。

友達だろうか。

あんな人でも友達はいたのか、と思ってしまうたのは嘘ではない。下僕なら何人かいそうだが。

自分は隊長のこんな自然な笑顔を見たことがなかった。

「（この少年はだれだろう）」

写真立てに入れられているが、見せないように倒しているのを見て、見てはいけないものだったと改めて感じてしまった。

子供の頃の写真で、今の写真ではないということは、この人とは会えてないのだろう。

そっと元の位置に戻し、部屋を出る。

隊長はいつも一人になろうとしていた。

与えられた任務も隊員には複数行動を命じ、自分は単独行動をする。部下が犯した失態も、怒るが、結局はきちんと尻拭いをしてくれる。不機嫌だと周りに悟らせ、部屋に籠る。

彼は何を待っているのだろうか。

「何してる。」

声を掛けられて初めて気がついた。
背後には隊長が扉に寄りかかって立っている。
手には彼の得物と血に濡れた軍服の上着が抱えられていた。

「掃除をしよう。」

「そうか。」

いつものように理不尽な暴力は飛んでこなかった。
どこか疲労した声で上着を壁にかけ、武器をソファに放り投げた後、
どかりとソファに深く座った。
そして、一言「茶」と告げた彼に急いで飲み物を淹れる。

首元のボタンを外し、血のついた手袋を脱ぎ捨てるが、舌打ちをしてそれをごみ箱に投げ入れた。

「どうぞ。」

湯気のたつ紅茶を一口飲み、何も言わずにテーブルに置く。
いつもより覇気がない。

「あの、何かありましたか？」

そう聞いた自分を隊長が睨んでくるが、何も言わず、何も動かず、
眼をそらした。

少し経ってから「何でもねえ」と返事が返る。

今日の隊長は変だ。
いつものように窓の外を見ない。
代わりに死んだようにソファに座り込み、寝てしまった。

「隊長が変なんです。」

先輩の部隊員に言えば、特別な反応は返ってこなかった。

「毎年この日はそうじゃねえんかな？」

「今日は何かあるんですか？」

そう聞けば、ギリオンは言い辛そうに答える。

「10年前のアルカトス東南大戦の終戦日だぜー。」

シユトレインでは祝日になってるらしいけど、イオカリスは敗戦国だからな。

隣にいたエリヤーナも肩をすくめ、頷いた。

「隊長は敗戦した日に変になるんですか？」

「敗戦したことが原因じゃないと思うべ？あの人、帝国嫌いだもんですよ。」

そう言えばそうだ。

この前なんか、自分がこの国を滅ぼしてしまおうかとか言っていた人だから。

「もっと、違うことではないかしら。」

「例えば？」

「恋人が死んだとか。」

「隊長、10年前はガキだから。恋人なんていないっしょ。」

「じゃあ家族かしらね？」

隊長の家族……そういえば何も知らない。

先輩たちもそこまで個人的なことはわからないと言う。

「あ」

「どうしたんですか？」

「たしか、隊長、友達がいたって言ってたよーな……」

ギリオンが言うには、隊長に黙って飲み物を酒にすり替えたところ、かなり弱くすぐに酔ってしまっただらしい。

その時、ここぞとばかりに質問をしたら、素直に話をしたらしい。

軍に入ったのは友達のため、だとか。

その友達とは自分が隊長室で見たあの少年のことだろうか。

「すつげえ楽しそうに話してたから、気持ち悪くって覚えてたんだな　これが。」

「あら、楽しそう。今度隊長さん誘ってお酒飲みましょう。」

「お、いいね！マジで酔ったたいちよーは見ものだかんよ。」

などと、酒盛談義に走り始めた2人の横で考えた。

今日はきつとその友達の命日なのだろう。

戦争が終わっても隊長は忘れられずにいるのだ、と勝手に決め付けてしまおう。

これ以上気にしてしまつたら止まらなくなつてしまつ。

でも、少しだけ隊長のことを知ることができた。

フォン・レイスという男は友達を失ったらしい。

彼は、ずっとその友達を待っているのだ。

帰ってくるはずのない、その友達を。

余談だが、その次の日紅茶をいれたらいつもの隊長に戻り、殴られた。

痛かったけれど、安心した自分に少し危険を感じたのはいくらでもない。

第0話 『馬鹿だったのは』

『昔、この世界は魔王がいたのよ』

珍しく静かな夜に、二人きりで星を眺めながらその放しに耳を傾けていた。

プラチナブロンドが月明かりに照らされて、白く光っていたのが印象的だった。

砕けた会話をするようになってから、心が少し穏やかになっているのを感じていた。

『へえー、んじゃあ勇者とかもいたの？』

ふざけて聞いた質問に、クスクスと笑いながら頷く。

『今はいないんだ？』

『魔王を封印した後、勇者も消えてしまったらしいの』

『RPGだったら勇者は英雄になってお姫様と幸せになるのが多いんだけどな』

『あーるぴーじい？』

『そつ。俺の世界の……御伽話みたいなものだな』

『あなたの世界は不思議ね……皆が平和で、平等な世界』

夢を見る乙女のような顔に見惚れた。

寝転がる自分の隣で座っている彼女の横顔を見ると、ぽつりとつぶやく。

『本当は、魔王は悪い人ではなかったの』

『は？』

『昔は、あなたの世界みたいに、平和で平等だった……でも、小さなことで世界が割れてしまった』

『……』

『魔族と人間の世界はぶつかりあって……それを止めていたのは魔王だった』

『結局、魔王は悪者にされたんだろ？』

『そつ……勇者が魔王を封印した。そのせいで、世界は平和になっ

たと思われていたけれど、戦争が起こるようになった』

『へえ』

『魔族と魔族、魔族と人、人と人……戦争がどんどん起こって、よくにまみれた世界になっていった……それが今の世界だといわれているの』

『今の戦争はその延長か……』

1つの秩序が崩れば、全てが崩れていく。
誰かを悪としなければ正義は生まれない。

『魔王は今の世界を見てどう思うんだろうな……』

『きっと、悲しむでしょうね……魔王はただ世界を守りたかっただけでしょうから』

『哀れだな』

『魔王が？』

『勇者と魔王……2人とも』

『なぜ？』

『勇者もわかってたんじゃねえの？魔王がいなくなれば全部壊れるって……だから殺さずに封印したんだろ？それで逃げ出した。魔王も、自分が助けようとしていた世界に裏切られて……馬鹿みたいだ』

『ユーガ……』

『ほんと……馬鹿だよな』

そんな馬鹿に自分が成り下がると感じていた。

あの頃から、決意は固まっていた。

俺は本当に……馬鹿だ。

第1話 『守られた町』

「これのどこが『村』だよ。」

馬車から下りた雄呀は思わず呟いた。

一行が馬車を使うことで予定より早く到着したそこは、話に聞いた“小さな村”とはかけ離れた場所だった。

なぜか木造の小さいがきちんとした門が建てられ、見張り台には番がいる。

村……というよりはすでに“町”と言った方が外見的な意味で正解だろう。

馬車をひくシグニスを見て門番らしき人物が驚いていたが、騎士の格好をしたジエステイアが手綱を握っていることに気づき、ほっと息をついた。

馬車を預かり所に置き、シグニスを帰せばひと段落と言ったところだ。

荷物は全て魔法の掛けられた収納袋にしまわれているため手ぶらに近い。

町は小さいが、行商も入っており“平和”という言葉が似合いそうなほどで……人口も結構な数がいそうだ。

「（地図には名前も載っていないような場所だったはず……）」

「ユーガさん、どうしたんですか？」

なにか引っかけかりを覚えながらもそれがわからない雄呀はうーんと唸っていた。

「何でもない。とりあえず宿を探るか。」

「宿なら突き当りにあるそうですよ。」

着いたばかりなのによく知ってるな、と蓮が何かを口に含んでいるのに気付く。
もぐもぐと動いているその口をじっと見る。

「何食ってんだよ。」

「先程、あそこの店主にいただいたんだ。宿の場所も教えてもらったよ。」

なかなか飲み込めないでいる蓮に代わってジェスティアが答えた。
かくいう彼女も、その手には美味しそうなものを持っている。

ジェスティアが視線でさしたのは小さな屋台が連なっている一部にある店だった。

よく見るとそういった店が目立つようだ。

「2日後に祭りがあるらしい。」

その準備でにぎわっているのだ、と言われ納得した。

隣にずっといたカザスも何かを差し出されていたが受け取るそぶりは見せなかった。

町の人間は外から来た人間を歓迎しているらしく、「旅人さん、旅人さん」といつて寄ってくる。

さすがに雄呀は遠慮願いたいため、カザスに隠れるようにして立った。

「お祭りかあ、この世界のお祭りってどんなのだろう。」

「町の風習によって異なるが……私もよく知らないんだ。」

困ったようにすまないと言う。

その様子を見ていた雄呀はため息をつき町を見回した。

「2日後か……」

蓮はこの世界に来てからたくさんを経験しなければならぬ。ジエスティアも王都では見えなかったものを見るいい機会だ。祭りに想像を膨らませる2人に向き直る。

「祭り見てくか？」

『いいのゝかく?!』

「嫌なのか？」

そう尋ねると嬉しそうに笑う2人。

「（なんか、保護者になつた気分だ）」

なんて考えていることも知らずに、ユーナをまじえて屋台を見はじめる。

しよугがない、とジェステアの肩を叩き、宿のことは任せると伝えた。

彼らはまだ未成年……ハメを外しても罰は当たらないだろう。

一番しつかりしていそうな彼女に小さな袋を渡す。

中からはチャリチャリと音がしている。

「日没までには宿に来いよ。俺たちも出かけてたら先に飯食っててもいいし。」

中身は夕飯代と小遣いだ。

ギルドの賞金では満足に遊ぶはしないだろうから、ほんの少しの心遣いとして渡す。

俺の財布は渡さないけどな！と心の中で思う雄呀はにっこりと笑った。

蓮達と別れてから宿をとるまでそう時間はかからなかった。

祭りだからといって旅人がこんな小さな町に集まるはずもなく、本

当に偶然立ち寄る人間しかいないらしい。
まだ日が高いため、店の人間に伝言を頼み出掛けることにした。

やはり、ここでもカザスは目立つらしく、女性の目が集まるのを感じた。

その隣を歩く雄呀は対照的に、魔法でしかたなく染めた茶髪の頭にフードを被ったままだった。

フードを被るのは顔を広めない為でもあった。

救世主なんてのをやっていた時には多くの人間に顔がバレれるようなことをしていた。

いつこの誰が自分を知っているかわからない。

用心に越したことはない……が、

「理不尽だ。」

やはりイケメンと並んでいると自分が掠れるのを感じる。

そんなことを言ってしまうえば、カザスは隣を歩かなくなるだろう。

「何か？」

「なーんでもない。」

そう言っつてフードの下ではなマークを飛ばしているカザスににやける。

それ以上何も聞いてこないカザスに話しかけようとする、横から何か飛んできた。

右側にいたカザスはすぐにその身を挺して俺に飛んできた“それ”を受け止めた。

カザスが抱えていたのは“人間”で、所々汚れ傷ができているまだユーナくらいの子供だった。

脇の下を抱えるようにして持たれていた子供は閉じていた目をあけると、自分の状況に気が付き「はなせ！」と叫んだ。すると、カザスは一度雄呀を見てからすぐにその手を放した。

「いつ!？」

優しくもないその放し方に子供は落下して尻もちをついた。

子供でも女性でも容赦はしないカザス。

腰辺りをおさえて痛みに耐えている様子を見てみると、飛んできた方向から1人の男性が出てきた。

白い服を着ている、それはこの世界での医者が着る白衣的は服だ。

彼はまるで汚い物を見るかのように子供を見た。

「いいか、金がなければ薬は売れないんだよ！わかったか?!」

それだけ言って医者らしき男性はボタンと扉を閉めて消えた。

その様子に子供は拳を握りしめ、「インチキ医者！」と大声で怒鳴った。

子供は興奮していた気持が沈んでいったのか、肩から力が抜けへたり込む。

しかし、雄呀たちの視線に気づき、ハツとした様子で目つきを鋭くした。

「なんだよ、何見てんだよ!」

「ぶっ飛んできたのはお前だろ。」

呆れた表情で、こちらを睨む子供に言うがそっぽを向かれる。

「うるさい!」

そう言うと、子供は雄呀に近づく。

何をするのかと見ていると、急に足を振りかざした。

ガスッ

「う痛あつ!?!?!?」

雄呀の泣き所を予想以上に強い力で蹴りあげた。
かなりの激痛にしゃがみ込み、蹴られた部分を抑える。

「こ、この餓鬼……」

「ばーか!」

あっかんべー、と舌を出した子供は背を向けその場から逃げようとする。

が、それを右腕が許すはずもなく……

子供の首をガシツと掴み、持ちあげるカザス。

その表情には僅かに怒りが含まれていた。
足の浮いた子供は苦しそうに自分を掴む手をたたくが、びくともしない。

「師匠、殺しますか？」

無表情に近い、それでいて威圧感のある力ザスがさも普通の会話のようにそう言った。

それを痛みが引いてきて、立ちあがりながらも手で制す。

「やめとけ、ただの餓鬼だよ。」

納得した感じではなかったが、すぐに手を放した。

再び地面に尻もちをつくことになったのは言うまでもない。

力ザスの迫力に負け、大人しくなった子供の前に雄呀はしゃがみこむ。

「お前、名前は？」

「……………」

無視か？そうか、無視かしかたない……

「なんて許すと思ってるのか？ああ？この糞餓鬼がー！」

「いてえいてえー！」

子供の鼻をつまみ、ギュツとつねる。

これは地味に痛いのだ。

「どつだ？言うか？言わねえのかあ？」

「言う言う言う言う！」

涙目になりながらも訴える子供に満足し、放してやる。
子供は素直じゃないとな。

「で、名前は？」

にっこりと今度は指をちらつかせながらきいた。

「あ、アトル……」

この少年はアトルというらしい。

投げ飛ばされたのは薬を譲ってほしいと頼んだら、金を出せと言われ、それがなかったから放り出されたらしい。

もともと金がなかったアトルは医者なら助けてくれると思ったのだ、と。

「誰か病気なのか？」

近くに会った噴水の縁に座り、カザスが買ってきた飲み物を飲みながらアトルに訊ねた。

カザスはこの子供が（俺を蹴った行為で）気に入らないらしく、俺の右隣に陣取りながらも警戒している。

そのことを幸せにも気づかないアトルは顔を俯かせながら答えた。

「父ちゃん……前は元気だったんだ。」

「どんな病気なんだ？」

「病気じゃないんだよ！」

顔をあげたアトルは悔しそうに表情をゆがめた後、ゆっくりと正面に向き直った。

その視線は町の奥に立つ、一際大きな屋敷に向けられていた。

「あいつらのせいなんだ。」

「あいつら？」

「3年前に来たあの屋敷を建てた奴等。妹も……カトラもあいつらに連れて行かれたんだ。」

「でね、その方が来てから魔物に襲われることもなくなっ
たし、いいことだらけよ。」

「へえー。」

屋台の気前のいいおばさんの作ったパイもどきを食べながら、町についての話を聞いていた蓮たち。

町の奥に建っているかなり目立った大きな屋敷について聞いたなら、なぜか村が発展していった経過から始まったのだ。

「もともと小さな村で、魔物に襲われても抵抗する術はなかったもんだから。」

「結界か何かを張っているのかと思ったのだが。」

大きな町には魔物が襲ってこないように結界がはってある場所が多い。

しかし、探査魔法が使える雄呀は結界がはってあるなどとは一言も言っではいなかった。

「それは、オルニス様が魔除けの儀式をしてくださっているからなんだよ。」

「魔除けの儀式？」

「そうよ、そのおかげで安心して生活できるのよ。」

おばさんは「これ、おまけ」と言って、美味しい焼き菓子を手渡した。

「その儀式というのは何をしているのだろうか？」

「さあ？でも、助かってることには変わらないんだから、どうでも

いいわよ、そんなの。」

そう言い、他の客が来たことで話が終わった。

雄呀たちと別れてから屋台めぐりをしながら町についての情報収集をしていたが、誰もが皆オルニスという屋敷の主を崇拝していることがわかった。

彼が来てから魔物が襲ってこなくなり、村が大きく発展していったという。

「変だ。」

「え？何が？」

整った顔をしかめっ面にし、ジェスティアが顎に手を当てる。

「魔除けなどというのはただの気休めにしかない。実際にきくのはやはり物理的な結界のようなものだけなんだ。」

「でも、結界はないんだよね？ユーガさんも何も言っていなかったし。」

「そうなんだ。」

雄呀の探査魔法は優れている。

しかし、それにも引っかかることはなかったということとは本当に結界は張られていないのだろうか。

「そのオルニスという人間が何かをしているのだろうか。」

「魔除けの儀式は名前だけってこと？」

「だろうけど……害が出ているというわけでもないらしいし、気にする必要はないみたいだ。」

安心させるように柔らかい笑みを浮かべる。

そんなジェスティアに笑い返し、よし次に行こうとユーナの手を握ろうと振り返る。

が、

「あれ？」

つかもつとした手は空気しかつかめず、そこにユーナの姿はなかった。

「あれ？さっきまでいたのに?!」

「わ、私もさっきまでいたと思ったんだが!」

慌てて姿を探すが、どこにもおらず、二人は顔を合わせた。

『ビュ、ビュ、ビュ』

そこはけっしてきれいとは言えない場所だった。

比較的きれいに整備された町と違い、裏通りに位置している小さな家に雄呀とカザスは案内された。

といっても、カザスは雄呀についてきただけで、終始仏頂面だ。

そんなカザスに怯えながらも、少年アトルは椅子を引っ張り出してすすめた。

足の高さがちぐはぐだったそれにアトルに気づかれないよう創世魔法で修復をして座る。

カザスは当たり前のように立ったままだ。

「親父さんは？」

「隣の部屋……寝てる。」

何も無いから、と言って隣の部屋のドアを開ける。

声をかけているようだが、返事はなくすぐに扉を閉めて戻ってきた。

「で、そのオルニスってやつが原因なのか？」

「……町の奴等には秘密にしてくれよ、じゃないと、追い出されるんだ。」

まあ、こんな場所に隠れるようにして住んでいるのにも何かしら理由はあるのだろう。

「あいつらは時々、魔除けの儀式っていうのをやってる。それが魔物を追い払ってくれるんだって。」

でも、その儀式の日になると屋敷から使いの人間がきて、屋敷に奉仕するために人が連れていかれる。

皆は感謝して喜んで自分の子供でも誰でも差し出している。なにも疑問に思わずに、恩返しができる、と言って。

「でも、妹のカトラはまだ小さかった。奉仕に出すなんてとんでもない、って父ちゃんが抗議したんだ。」

屋敷に抗議しに行った日、妹は屋敷に連れて行かれ、父親はだんだんとやつれていった。

何があつたかも言えないようなくらい衰弱していくけれど、町の間はオルニス様に逆らつたって言って誰も助けはくれない。

妹もどうしているかわからない、母親も他界し、父親しか頼れる人間がない。

「だから薬でどうにかしようとしたのか？」

「だって！俺にはそれしかできないから！」

ぼろぼろのスポンを握りしめる。

「カトラがいなくなつて、父ちゃんまでいなくなつたら、俺……おれっ。」

「男が泣くんじゃねえ。」

ギョツと目を瞑り、こぼれそうになる滴をその言葉で拭きとる。

「泣いてない」と強がり、ズズツと鼻を鳴らす。

「最初はその医者に、見せたんだ。あつたお金全部払つて……でもそいつからもらつた薬は全然効かなかつた。」

あいつはヤブ医者だ。

どういふ診察をしたのかはわからないが、金を払つてしまつてはもう何もできない。

有り金全部を使つてしまつたと言つたのだから、生活も苦しいのだから。

1人でどうにかしようとしているアトルを見て、雄呀はため息を吐いた。

面倒だけれど、こつこつやつを見ると放つておけなくなるんだよな……

今度は何をやらかすかわからないアトル。

次は投げ飛ばされるだけではすまないかもしれない。

ユーナもそうだが、この世界はいつでも子供が辛いことをさせられる。

雄呀だって元々はこういう人間を助けたくて救世主なんてものをやっていた。

しかし、助けられるのなんて極僅かだ。

その現実を知っているからこそ、アトルのような子どもを見つけてしまつと逃げられなくなる。

それは後悔から来ているのかもしれない。

気づけば立ち上がって、隣の部屋のドアを開けていた。

そこには床に敷かれた布団に眠っているやせ気味のアトルの父親がいた。

「お、おい！」

止めようとするアトルをカザスが肩を掴んで止める。

雄呀はしゃがみ込み、彼の額に手をそつと添えた。

「（この人に魔力は感じないのに……これは呪いか）」

「何、やってんの？」

しゃがんだまま動かない雄呀に、アトルは話しかけるが反応はない。額から心臓の上に手を移動すると、指がびくつと動く。

「（強制的に魔力を吸い取る呪いだけど、“ただの”人間には大きすぎる……代わりに生命力そのものをとられてるな）」

魔力と生命力は別物だ。
生きているものには必ずある生命力とは違い、魔力は全員にあるわけではない。

アトルの父親にかけられているのは対象者の魔力を吸収し、術者に取り込まれるというものだ。

でも、彼には魔力はなく代わりに生命力を吸い取ってしまっている。

「術式は……」

呪術をかけられた対象者には何かしら印がつけられているはずだ。そこを中心に呪いは発動している。

雄呀は布団をめくり、服越しに手を移動させながら印を探していく。

「ちよつ、あんもがつ!？」

「黙れ。」

騒ごうとしたアトルの口を力ザスがふさぐ。

探査魔法を使用している雄呀の邪魔をしないように拘束し、その目は雄呀をじつと見ている。

ふと、雄呀の手が腹の中心部分で止まると、横たわっている身体をうつぶせにし、服をめくった。

「あつた。」

背には黒いミミズのような紋様が浮いている。

それは生きているかのようにときおり動いていた。

「こいつが喰ってたのか。」

このミミズのような印が魔力を喰い、吸収しているのだろう。
雄呀はその印に手を当て、陣を発動させた。

解呪の魔法は光属性の魔法。

白い魔法陣を小さく描き、呪いを解除していく。

後ろで見ているアトルには何をしているのか見えないが、カザスは目を細めていた。

黒い印が動きを止め、魔法陣に吸収されていくようにうっすらと消えていく。

印が完全に消え、青ざめていた顔色に血色が戻っていく。
生命力を回復させるために治癒術をくわえていたのだ。

「（これはサービスっ）」

陣を書き換え、術が終わると立ち上がる。

それを見てカザスはアトルを放すと、彼は父親に駆け寄った。

「何したんだよ！」

「お前、恩人に向かってだなあ……っ」

ゾクッ

ふと視線を感じ、雄呀は窓の外を見る。

カザスもそちらを見ていたが、そこには何もいない。

たしかに何かが見ていた気が……

「う……」

「父ちゃん！」

アトルの呼び声に振り返ると、父親が目覚ましていた。まだぼーっとしているが、アトルの姿をとらえると眼を見開く。

「あ、アト、ル？」

「父ちゃん！父ちゃん、大丈夫か？！」

自分の名を呼ぶ父親に抱きつき、必死にその身体を心配する。父親はゆっくりと上半身を起き上がらせた。

「わ、私は……」

「あんだ、呪いをかけられてたんだ。」

知らない声に上を向き、初めて雄呀を認識した。

カザスはその後ろに立っており、どちらも存在感のある2人だ。

雄呀はフードを被ったままだったが、アトルが警戒していないのを見て、緊張をといた。

「あなたたちは？」

「俺はユーガ、こいつはカザス。まあ、ただの旅人だよ。」

未だに窓の外に目をやるカザスに代わり、雄呀が名乗る。

「魔術師に呪術をかけられたんだろ。」

「そつだ……私は、カトラをつ」

「父ちゃん！駄目だつてば！」

ハツとした彼は立ち上がるうとするが、すぐに倒れそうになる。

アトルが支えるが、子供では支えきれずにすぐに布団に逆戻りした。

「生命力なんてすぐ戻るわけじゃねえからな、しばらくは満足に動けねえよ。」

「しかし、娘が！」

それでも立ち上がるうとする彼をアトルが抑えようとする。

元気になったとはいえない身体で無理をしようしているの止めるのにアトルは必死だった。

「父ちゃん、お願いだからっ」

「黙れよ。」

マントの下から雄呀の瞳が光る。

その視線に睨まれ、立ちあがろうとしていたのを中断せざるをえなくなつた。

「あんた、こいつがどんだけ心配したか分かつてんのか？」

父親の肩を支えているアトルはびくつと肩を震わせる。

雄呀の声は低い。

「こいつに、『悪かった』とか、『ありがとう』とか言えねえのか
つて言つてんだ。」

「な、」

「餓鬼一人安心させられねえ奴が、誰かを助けられると思つてんのか？」

「父ちゃん……」

横で心配そうに瞳を揺らす息子に、彼は悲しそうな表情を浮かべる。

自分が倒れてからアトルはどうやって生きてきた？

妻が死んでから自分が娘と息子を育て、カトラがいなくなり、アトルだけになった。

「アトル……」

眼がさめてからちゃんと見なかった。

ぼろぼろになつた服に、痩せてしまった身体。

歯をくいしばって涙をこらえている小さな、まだ小さな息子。

「アトル……アトル……」

小さな頭を抱き込み、名前を呼び続ける。

「ごめんなあ……お前がいるのになあ。」

「父ちゃんっ」

泣くのを我慢し、アトルは父親に抱きついた。

泣かないのは、雄呀に言われたからだ。

「あんたが言いたいこともわかるが、少しは落ち着いて物事を考えるよ。」

「はい……すみません。」

頭を下げる父親と、アトルを見てカザスに振り向き眼で合図する。カザスが扉をあけ、雄呀とともに出た。

親子二人にした部屋を後にし、雄呀はフードをとる。

「カザス。」

「はい、間違いありません。」

小さく頷いたカザスに眉を顰める。

「探査魔法にかかったが、すぐ消えた。」

「魔術師でしょうか。」

「それも、結構できるやつだ。」

そう言って先ほどの椅子に座り、足を組んだ。

さっきの窓から感じた視線……それは勘違いではない。

視線を感じた瞬間に発動した探査魔法に引つかかったのだ。
一瞬の発動のため、相手も気づかれているとはわかるまい。

「監視、でしょうか。」

「ああ……アトルの父親をな。」

何のために、なんてことはわからないが、あの呪術が関わっているのは間違いないだろう。

屋敷に行った彼が呪術を施されたのなら、オルニスという人間が魔術師なのか、それとも雇っているのか。

「魔除けの儀式っていうのも怪しくなってきたもんだ。」

町に入った時から嫌な臭いがぶんぶんしてたが……

「なんて面倒なことに……」

「俺が片づけてきましょうか。」

物騒なことを言いながらシュバルツを抜こうとしているカザスを止める。

「それも良いけど、根本的な解決にはならねえだろ。」

カザスだったらすぐに屋敷ごと殲滅できるだろうが、屋敷が潰れることで町の秩序が崩れることになれば、魔物が襲ってくるかもしれない。

そうしたら俺たちが悪者だ。

「そんなに俺はボランティア精神に富んでるわけじゃねえ。父親が元気になれば普通の生活は送れるだろ。」

アトルには父親必要だ。

しかし、妹まで助ける義理はどこにもない。

「冷たいと思うか？」

静かに手を下ろしたカザスは小さく首を横に振った。

「師匠がそう決めたのなら、俺はそれが正しいと思います。」

「そうか。」

その後、宿に戻った俺たちを待っていたのはユーナがいなくなっ

と泣きついてきた蓮たちだった。

第2話 『襲撃者』

エルフの森を抜け街道を道なりに進んだ村、いや町。

町の名前は誰も知らない。

あえて名付けるのだとしたら「オルニス町」と命名するだろう、と町の人間は言う。

オルニスというのは町に住む人間の名前らしく、魔物に荒らされ放題だった村をここまで発展させた人物。

誰もがその人間を語る時、まるで神のように崇拜の念をあらわす。

そしてオルニスが住み始めた3年前から行われるようになった儀式。誰の目にも触れることなく行われるそれは、町に魔物が近寄らないようにするもので、町の人間はそれを祝い事として町をあげての祭を開催する。

屋敷内で行われる儀式に参加できるのは屋敷で従事する人間と特別に招待された人間だけだと聞く。

2日後に儀式を控えた町は賑わい、多くの住人が行きかっている中を運はフードを深くかぶって歩いていった。

横にはカザス、反対には中型犬サイズに縮んだシグニスが並んでいる。

元々口数の少ないカザスと異様な険悪感を醸し出しているシグニスの中に挟まれ、居心地の悪さを感じつつもいなくなったユーナを目で探していた。

こんなことになったのも自分の監督不行き届けというか、自業自得

というか……

この場にジェスティアがないのは雄呀の命令であり、現在宿に待機中だ。

「責任を持ってお前が探して来い。」

ユーナがいなくなり、雄呀たちに泣きついた後2人で正座をさせられ頭上から言われた言葉だ。
呆れた表情でため息をつく姿に面目ない、と頭げる蓮とジェスティア。

「もうすぐ陽が落ちる。夜はどこであるつと危険だ。」

「探してきます……」

「あてはあるのか？」

「あ……」

ありません。

「わ、私の責任だ！騎士たるもの、責任は自らとる！」

「ジエ、ジエティ！」

剣を掴んで立ち上がったジエスティアは素早い動きで部屋の扉をあけ、出ていこうとした…が。

「ふにゅっ！」

見えない壁に激突したかのような音とともに仰向けに倒れた。

「（な、なんかすごく可愛い声がしたけどっ）だ、大丈夫?!」

「ら、らいほうふら（大丈夫だ）。」

赤くなった鼻をおさえて差し出された手を握って立ち上がる。よく見るとうつすらと魔法陣が浮かび上がっているそこには雄呀がつくったであろう魔力の壁ができていた。

ジエスティアが落ち着いたのを見てそれを解除すると固いベッドにどっしりと腰をおろした。

「まだ話は終わってないぞ。」

「へ?」

ユーナを探しに行けと言われるだけかと思っていた蓮は間抜けな声を出してしまった。

「だから、あてがねえのに探し回るのは効率が悪いって言ってんだよ!お前の頭の栄養は全部タンコブに行ってるのか?!」

「1!、ごめんなさい!」

「とりあえず……」

そう呟いた雄呀の足元、ベッドの下からもそもそと何かが出てきた。白いそれはぶるぶると身体をふるわせた後、雄呀とその隣に立つカザスの隣に割り込むようにして座った。

「えーっと……その生き物は？」

見たことのある様な毛並みに禁句を言わないようにして尋ねる。

「シグニスだ。匂いを追っていけば確実だろ？」

まるで忠犬を手懐けるように喉を撫でる雄呀に気持ちよさそうに目を細めている白い犬……もとい狼のシグニス。僅かに尻尾を振っている。

「（い、犬扱い）」

> 今、何か言ったか小僧<

「めっそもございせんん！！」

「これは心強いな？」

再び立ち上がり外に出ようとするが、雄呀が再び止める。

「なんだ？」

「お前は留守番だ？」

「な、なぜだ?!」

意外な言葉にジエスティアも目を丸くし、蓮も驚いた。もともとジエスティアは蓮の護衛という役目がある。そのため、離れることは好ましくはないのだ。それを知っていた雄呀はすぐに説明を始めた。

「この宿の湯浴み時間は日暮れまでらしくてな。男の俺たちはともかく、一応女のお前は入っておいた方がいいだろ。」

騎士っていつでももとは貴族の出身だろうから。男女差別ということになる言動だが、雄呀なりにジエスティアのことを考慮していた。

自分だって地球にいた頃は毎日風呂に入っていた。こちらにきてからは何日も入らなかつたりするが、最初はその気持ち悪さにストレスがたまっていた。まあ、しかし女ほど気を使うこともない、が、女は女でいろいろ大変なのだということも知っていた。

「しかし……」

「国を守護する代表の騎士が変に薄汚れてちゃ逆に怪しまれる。それに大勢で探すのも無駄だからな。」

雄呀はカザスに目配せする。

目を細めたカザスは少し考えた後一步前に出た。

「超特別にカザスを貸してやる。何かあってもとりあえずは大丈夫だろ。」

> 我がおれば心配ご無用です<

「保険だよ保険。」

動物一匹＋チキン1人ではあまりに頼りなさすぎる、なんて言ってしまったら両者とも拗ねるか落ち込むに違いない。

「全員がそろったら夕食にするから、早く見つけて戻って来い。」

「わかりました。」

着替えを持たせたジエステイアとそれに続いて蓮たちが部屋を出る。カザスが出るとき、こちらをちらりと見たのを確認して、無音で「た・の・む・ぞ」と口ぱくして伝えた。

小さくうなずいたカザスは静かに扉を閉め、一気に静寂に包まれた。

誰もいなくなつた室内でベッドに腰をおろしたまま外套を外し、横に放る。

腰につけていた道具袋を外し、サイドテーブルに置いてブーツを脱いだ。

膝下まである長めのブーツは力なく床に倒れ、来ていた上着も外套の上に脱いだ。

解放感に小さく息をついて仰向けに倒れた。

ギシツという音が立ち、比較的新しい木の天井を眺める。

「釣りしてえなあ。」

突然思いついたのはそんなことだった。

そういえば、漁師のおっちゃん達には結局別れも言わないまま出てきてしまったことを思い出した。

フィニアでの生活は楽しかった。

蓮を地球に戻す方法が見つかったらフィニアに帰るか？

ドラゴン観光してからぐるっと回って旅をするのも面白そうだ。

ユーナは家族の所に送って、ジエスティアは蓮が帰れば王都へ帰るだろう。

そうしたらまたカザスと2人か。

このまま戦争がはじまらずにいればまた静かに2人で生活できるのだろうか。

コンコン

「ん？」

ジエスティア……にしては早すぎるから、宿の人間だろうか。

ブーツを脱いだままだがいいか、とそのままの恰好で「はい？」と返事をする。

しかし、返事は返ってこない。

その代わりに再びノックがされる。

ドアの向こうにいる人物から殺気は感じないが、不気味な気配が感じられる。

気配は一つ。

用心のために扉の横の壁に小さく結界魔法の陣を描き、取っ手に手を掛ける。

そっと開けたそこには見知らぬメイド姿の少女が立っていた。

「どちらさん？」

カザスと並ぶくらいの無表情でその場にいる少女は雄呀の顔をじっと見て口を開いた。

「ここは、だめ」

「?!……お前っ」

ガシャーン!

その音は浴場がある方向からだった。

小さくだがジエスティアの声がし、少女を避けて音のした方へ走る。複数の足音と共にいくつかの衝撃音がしていることから争っていると想定すると、角から黒ずくめのいかにも怪しい格好をした人間たちが飛び出してきた。

分かっていたかのように避けた雄呀はそのまま左で相手の1人の顎に掌底を当て、回し蹴りをくらわせる。

しかし、重心にのっていなかったせいか、バランスが崩れる。気を失い落ちる相手の後ろから鋭い剣をつきだしてきた2人目が現れた。

後ろに傾きつつある体重を利用し、その剣を持つ手を蹴りあげ、バク転の要領で手をつき回転し着地する。

落ちた剣を横目にブーツを履いていなかったことを後悔する。素足は少しきつい。

「ちっ！」

その間に仲間を回収したらしい黒ずくめは気絶した仲間を抱えた。そしてこちらを振り向くこともせず窓に駆け寄る。

「逃がすか！」

建物に結界魔法をかけ、逃亡を阻止しようとした。

パリン！

しかし、結界が存在しないかのようにそいつらは窓を破って出ていった。

「な?!」

今まで自分の結界を抜けだした者はいなかった。どんなに強い魔術師でも解けなかった。

「す、すまない。」

「ひや、ほえもはいよがはりなはった（いや、俺も配慮が足りなかった）。」

雄呀とカザスの部屋に結界魔法を張り、服を着たジエスティアと雄呀。

濡れた布を頬に当てている雄呀の横で申し訳なさそうにしよぼくれているジエスティアがいた。

ぬるくなつた布をとり、水差しから移し氷を入れた冷水に浸す。

頬には真っ赤な紅葉模様が浮かび上がり、僅かに腫れ始めていた。

「治癒魔法を使えばよかつたのだが……」

「こんなもん、自己治癒能力で十分だろ。あー、お前意外と馬鹿力だな。」

「騎士として、鍛錬は怠っていないからな！」

「褒めてはないけどな。」

「がつ……す、すまない。」

落ち込むジエスティアを放置し、溶けてしまった氷を創世魔法で補充する。

宙に描かれた小さな水色の魔法陣から生まれるようにポチャンポチャンと水に落ちていく。

再び温くなってしまった布をつつこんだ。

「あいつらに何かされたか？」

「いや、何も。」

風呂に入った際、剣だけは持っていたらしく応戦できたらしいが、ジエスティアを見てすぐに浴場から出て行ったらしい。

「ユーガは？」

「俺は出会い頭でぶつ飛ばしちまったからな。」

「さすがだ。」

片手で絞っているせいか、残った水分がぼたぼたと床に落ちる。

ジエスティアがそれをみて絞ろうとしたが断り、握力のみで握り絞る。

いつもならカザスが懇切丁寧に過保護すぎるくらいに手当てしていることだろう。

だが今は不在。

ジエスティアは布を当てている様子を見て、まだ乾いていない自分

の長い髪を拭く。

「そういや」

布を水に浸す雄呀がふと呟いた。

「お前と二人きりって初めてだよな？」

「そうだな、いつもなら私はレンと。君はカザスといえるからな。」

「べつたりと、な。」

改めて思い返してみると二人して笑い合ってしまった。

こうして二人きりになってしまうと、話題はなかなか出てこないものだ。

ただでさえ、頬の腫れで気まずい雰囲気の流れていたのに……しかし、そんなことも忘れてしまうほどにおかしかった。

「結構一緒にいたつもりだけど、こうやって話すのは初めてだったか」

「ああ……おかしなものだ。」

「レンがいなけりゃ出会ってなかったかもしれないな。」

「レンに感謝しなければ。」

嬉しそうにタオルで拭うジェスティアに対し、雄呀は道具袋から自作のシップもどきを取り出し、頬に貼り付けた。

地球のシップと違い、独特の匂いを抑えたものだ。

そして、笑うジェスティアに背を向ける。

（本当は、出会わなければ良かった）

そう言ってしまうえば傷つけてしまうことは間違いないだろう。

蓮がこの世界に来たことで再び世界は動きだしてしまったのだ。

雄呀が一度動かし、そして止めた世界を。

召喚された蓮がこれからどうするかは彼自身の問題だ。

それに巻き込まれたのがジェスティアで……

蓮の護衛として付いてきた彼女は本来なら彼が雄呀と出会った時点で役目は終わっているのだ。

救世主を安全な場所まで連れていく。

それがジェスティアの役目であり、どこよりも何よりも安全なのは雄呀とカザスの傍と云っていい。

元救世主の雄呀は片腕を失いながらもその力は決して弱くはない。むしろ魔法に関してはエキスパートだ。

そしてカザス……雄呀が手塩にかけて育てた愛弟子。魔剣使いでもあるその実力は計り知れない。

それでも何も言わずに蓮と共にいさせるのは、蓮のためだった。

独りでこの世界に放り出された蓮にとってジェスティアは心のよりどころとなっている。

「（俺には……あのお姫様だけだったっけ。）」

頭に思い浮かぶのは銀色の髪が綺麗だったじゃじゃ馬姫。

最後に見た顔は泣いていた顔だった。

「お前も、泣くのかねえ……」

「ん？何か言ったか？」

「いんや。」

泣かせるのは……嫌、かも……

「あいつらが帰ってくる前に調べとくか。」

よっこらせ、とおっさんのような口調で立ち上がった雄呀をジエスティアは見上げた。

脱いでいたブーツを履き直し、外套を羽織る。

「え？ど、どこへ行くのだ？」

「お前はここで留守番な。」

部屋の壁に刻んだ魔法陣を強力なものに直し、扉を開ける。

「カザスが戻ったら、シグニスと来いって伝えといてくれ。」

「ちよつ、ユーガ！」

扉が閉まると同時に結界が広がるのがわかった。
ぽつんとひとり残されたジエスティアは日が沈みかけている窓の外を見た。

「勝手なやつだ。」

一方、ユーナ捜索隊……

> よもや、我が犬の真似ごとをすることになるとはく

地面に鼻を近づけ、クンクンと臭いをかいでいるシグニスが独り言を言った。

蓮とカザスはその後ろに付き、見守っている。

> 小娘も小娘だ。魔力がないものは面倒極まりない

「（か、カザスさんを挑発してるんだな……）」

たしか、カザスも魔力は少しもないと言っていた。
あはは、と引きつりながらも笑う。
隣からもものすごい殺気を感じるのは気のせいだと思いたい。

ユーナとはぐれてしまった場所から臭いを辿って探すこと数十分、
なかなか見つからないものだ。

途中で匂いが途切れることはなく、どこかへ向かうように匂いが漂
っているらしいのだが、一度も途切れないのだ。

「あれ？ここさっきも通りませんでした？」

見たことのある家の前にきて、蓮が首を傾げる。

カザスもそう思っているのだろう、壁に手をあて本物が調べている。

>ふむ、同じ場所を繰り返して歩きどこかで臭いを消したのだろうか<

鼻を鳴らし、座りこむシゲニス。

後ろ足で耳の後ろを掻き、ぶるぶると身体を震わせた。

最初に会った時よりも口が達者なのは、雄呀に蓮を託されたからだ
だろう。

カザスについてはいつも通りだが。

「本当に、どこ行ったんだろう……誘拐とかだったらどうしよう。」

一度奴隷になったユーナだ。

もうあんな苦しい思いはさせたくはない、と蓮は拳を握る。

>少し気になる匂いがある……<

そう言つてシグニス先ほどから歩いてきた道から外れ、裏道に入つて行つた。

はぐれないようについて行くが、いかんせん道が狭い。

「あの、シグニス、さんっ！せまつ、狭いんですけど！」

> 我の知るところではないわく

そつけない答えに蓮はうわーんと半泣きで横歩きをすることになつた。

さすがにカザスはシュバルツを背負つたままでは通れず、指輪に戻して蓮と同じ体勢でついてくる。

人間2人の苦勞も知らずにずんずんと先へ行くワンコ、もといシグニス。

> やはりなく

「なにか、見つけ、たんですか？」

> 小娘の匂いが出たく

こつちだ、と裏路地を出て早足になる狼を見失わないように急いで追いかける。

複雑に作られた道を縫うように進んでいくシグニスは、すでに居場所が分かっているかのように迷うこともないようだ。

「あれ？ちよ、シグニスさん……こつちの道つてっ。」

前方に見えるのはこの町で一番大きな屋敷……オルニスの屋敷と呼

ばれている建物だった。
まるで町を見下ろす……監視するかのように佇んでいるその屋敷に、
蓮は息をのんだ。

ユーナが目を開けるとそこは暗い石造りの部屋だった。
周りには誰もおらず、うつ伏せになっていた体を起こそうとすると
手首に冷たい重さを感じ、自由にならないことに気がついた。

「レン……？ど」……？」

片足に繋がれた鎖は壁に繋がり、部屋にはドアがなく、小さな窓が
一つあるだけだ。

自分は蓮とジエスティアと一緒にいたはずだった。
食べたことのないお菓子を食べて、歩いていた。

でも、急に目の前が真っ暗になって……

「ジエテイ？」

状況を把握し始めると、急に恐怖が心を支配していき、部屋の隅に這いずって丸くなった。

また、一人ぼっちになってしまった。

どこだかわからない場所で自分はまた奴隷として扱われるのだろうか？

目元が熱くなり、膝に顔を埋める。

「あ　　ろ」

「　　！」

はっとして遠くから聞こえた声に耳を澄ませる。
蓮やジエスティア達かもしれない、と期待をしたのだ。

「あの小娘は役に立たん！なぜ連れて来た！」

「だあってえ、人間ってどれも同じに見えるんだものお。」

「魔力は感じるんだろう？！だつたら……」

「ぶぶー！この町、なあんか臭いんだものお。私の繊細なお鼻もひ

ん曲がっちゃっわ。』

男性と女性の声。

ユーナの知らない声だ。

『今度こそきちんと贄^{にえ}をつれてこい！何のために貴様と契約したと思っっている?!』

『うっさいわねえ、あんたこそ忘れてないでしょうね……』

『その件については報告待ちだ。』

『あっそーじゃあ、ちょおーっとでかけてくるわねえん。』

その声と同時に扉が開く音がした。
誰もいなくなっただかと息をつく。

『悪魔め……』

第3話 『犬猿の仲』

「はあっ、はあっ！ここで、いいだろうっ。」

陽が沈もうとしている、橙の光から逃れるように建物の陰に身を寄せ、黒い影。

顔を覆っていた布をはぎ、肩に担いでいた仲間を地面に下ろす。完全に気絶している仲間の頬を軽く叩いた。

「おい、起きろ。」

「う……く。」

「よし、動けるな？」

ゆっくりと起き上がりながら頷いて意識がはっきりしていることを確認すると、再び顔を隠した。

「すまない……」

「かまわん、確認は取れた。さっさと王都に帰るぞ。」

懐から丁寧に折られた紙を取り出し、開く。

そこにはインクで描かれた人相書きが書かれていた。

1人はジェスティア、もう1人は蓮のものだ。

「しかし、救世主殿はいなかったではないか。あの男は一体……」

「いずれにせよアウリア殿下の近衛騎士であるルンブルクが殿下より離れ、このような地にいることは何かしら関係があるとは……
いだろう。」

「殿下が救世主殿の逃亡の手引を、という報告は真であったか。」

「へへえ、面白そうなお話ね。その”救世主”について……もっと聞きたいわあ。」

彼らの頭上から降りてきた声に2人はハッと顔を上げる。

夕日に照らされ、その姿ははっきりと現われていた。

「誰だ?!」

「誰? そうね、しいて言うのなら愛する者を追う愛の狩人かしら。」

露出度の高い黒い服を着て、見降ろしている女は悩ましげな表情を

した。

「ふざけるな！」

「よせ！今は時間が惜しい。」

遊ばれていると思われた男を宥め、女から逃げよつとするとその場から女はいなくなっていた。仲間の手を引いてまわれ右をするとそこに女の顔面がアップで現れた。

「なっ?!」

「ねーえ？」救世主”つてなあに？偉い人間？」

「ちいつ！」

懐から小太刀を抜き、女に向って突き出すがいとも簡単に避けられてしまう。

「なあにい？ちよつと聞いているだけじゃなあーい。」

「何者だ……貴様。」

「さつきも言ったじゃないのお……狩人だつて。」

男たちが最期に見たのは妖しく笑った女だった。

メイド服を着た少女は見ていた。

笑い合う家族の表情。

自分のいない空間がとても恨めしく、悲しく、憎らしい。

あそこに帰れないと自覚している。

それでも泣けない自分がいる。

なぜこんなことになったのか、誰を責めればいいのか。

あの人ならこんな自分を助けてくれると思った。

「会いにいかないのか？」

横からかけられた声に少女は驚くこともなく頷く。外套をかぶった姿でも近くから見れば顔はわかった。建物の屋上から下の様子を見ていた少女の横に立つ。

「俺はユーガ。」

「私……私は？私は……わからない。」

少女の眼は虚ろなままだ一点を見つめていた。

「名前が捕らわれているんだな。」

「名前？名前……私は……知ってる。」

でも、わからない……と呟いた。

「彼らはお前の家族だ。それは知ってるんだろ？」

「うん。でも……会えない。」

カザスのような無表情だが、どこか違う。少女の感情はどこか苦しげだった。

「名前を奪ったのはあの屋敷の人間か？」

「屋敷……違う。”あれ”はもっと怖い。」

「……」

「あ……」

屋敷の方角を見上げ、雄呀に背を向ける。

「行くのか？」

その言葉に少女は振り向き、小さくお辞儀をした。

「一つだけ忠告しとく。」

「？」

「名前を奪われても、心だけは持ち続ける……いいな？」

表情を変えない少女に雄呀は強い口調で伝える。
返事も何もせず、少女はその場から姿を消した。

「まったく……なんでこう、次から次へと。」

その場に座り込み、ため息をつく。

もう姿を隠そうとしている太陽を見て、そろそろ宿に戻る時間にな
っていることを確かめる。

シグニスの魔力を探查魔法で探ると、まだ宿に戻ってはいないよう
で、オルニスの屋敷前にいることがわかった。

「嫌な予感の中か。」

小さく眩き、魔法陣を描く。
最後に少女が眺めていたものを一瞥し、眼を細めた。

「どうします？なんか、こつこつシチュエーションで忍び込むと、
たいていは何かしらの事件に巻き込まれると思うんですけど……」

> 『しちゅえーしょん』という言葉はよくわからぬが、この中に小
娘はおるだろうなく

「なんか結界？みたいなものを感じるんですけど……」

> なんだ小僧、ようやく魔力に慣れてきたのか？<

「はぁ……ユーガさんに教えてもらったからでしょうか。」

>ふむ、さすが我が主<

「……………」

先ほどからコソコソと屋敷の塀の陰に隠れて話しているのはシグニスとしゃがみ込んでいる蓮だった。

ユーナの匂いを追ってきたのはいいのだが、オルニスの屋敷の中へと続いていたため、どうやって入るかを相談していたのだ。

住人の話では祭りが近くなると誰も中に入ることはできないらしい。

「陽も落ちちゃったし、ユーナ大丈夫かな……………」

>主殿がおられれば、かのような結界破っていただけなのだがなく

シグニスは蓮と我関せずのカザスをそれぞれ見て鼻を鳴らす。

>たいして役に立たん魔力だけは立派な小童と、魔力のひとかけらもない木偶の坊だけとは…………<

「貴様が師匠の召喚獣でなければ切り刻んでやったものを…………命拾いしたな、馬鹿犬。」

……………

か、カザスさんが二言以上しゃべったあああああ！

などと心の中で絶叫している蓮など知らず、シグニスは何もせず、シグニスは耳をぴくつと動かした。

>なんだと？主殿の金魚のフンの分際で！<

「申し訳ない、訂正しよう糞犬。」

>き、貴様……いい度胸だ、その腐った息の根止めてくれようぞ<

まるでハブとマンガースのような……いや、犬猿の仲と言った方がいいか。

今にも戦争でも起こしそうな険悪なムードを漂わせ睨みあっている2人の間に挟まれる蓮。

>というか貴様！主殿の前では猫をかぶっておったな？！<

「俺は師匠の右腕だ。話す必要などない。だが、犬のくせに師匠に褒められている貴様は気に食わない。」

>何度言えばわかる？我は狼……気高き白狼であるぞ！<

「調子に乗るなよ犬。」

>それは「こちらの台詞ぞ、糞餓鬼<

「（どつちもどつちだ）」

ああいえばこういう……カザスとシグニスは睨みあいをやめること

はない。

無表情でどこか怒気が漂っているカザスと、牙をむき出しにして今にも噛みつきそうなシグニス。

せめてもの救いはシグニスがユーガの魔法によって小さくなっていることだ。

シグニスは自分で大きくなれるかどうかはわからないが、これだけ怒っていても元の大きさに戻らないということはユーガによって戻してもらわなければいけないのだろう。

「か、カザスさん、シグニスさん、落ち付いて……とにかく、ユーナを早く見つけないと……」

> 貴様など主殿のただの財布であろう！<

「ペットよりマシだ。」

「2人ともおー！」

まるで子供の喧嘩のようになってきたそれに、半泣き状態になってきた蓮は間に割り込む勇気もなくしゃがみ込む。

「（暗くなつてユーガさんとジエティも宿で待ってるだろうな……ユーナももしかしたら酷い目にあってるかもしれない）」

しかし、まだ自分の魔力を完全に制御できているわけでもない蓮には、結界魔法を解くことなんて絶対に無理だ。

「こんなとき、ユーガさんがいればなあ。」

「呼んだか？」

「はい……………つぎやああああ！」

ぼつりとつぶやいた言葉に思わぬ返事が返ってきて目の前に現れた雄呀の顔に驚き尻もちをついた。

雄呀が現れたことでシグニスとカザスは言い合いを中断しており、にやにやと蓮を見下ろしている彼を見ている。

「ほんと、お前ビビりだな。」

「ゆ、ゆゆゆユーガさん！？なんでここに?!」

「ちよっと用事があってな…………その帰りだ。」

外套は被ったままで蓮に手を差し出す。

その手をとり、立ちあがるとスボンに着いた土を叩きとる。

「師匠。」

>主殿<

「お前ら、喧嘩はしてねえよな?」

にっこりとそう尋ねた雄呀にカザスとシグニスは一度目を合わせ、頷く。

う、

「（嘘だあああああ!）」

「本当かあ？」

心の中で絶叫している蓮に視線を向け、怪しむように訊いてくる雄呀に視線をさまよわせる。

ふと目が合ったシグニスとカザスはギロリと無言の圧力をかけてきた。

こ、ここで吐いたら……殺られる!!!

美形のカザスに無表情、無言で凄まじいほどの眼力を加えられて見られている上、シグニスのちらつく牙と据わった眼が追い詰める。

「は、はい。もう、怖いくらい大人しかったです。」

「そうか、ならいいんだ。」

ああ、神様、圧力という言葉に弱い僕をお許してください！

「で？ユーナはこの中か？」

>はい、結界が張られており、入ることはできないかとく

「シユバルツでもいけそうだけど、それだと中の術者にバレる可能性があるか。」

「シユバルツ……って、カザスさんの剣ですよね？どんな力があるんですか？」

カザスの背負っている大剣のシユバルツは雄呀が作った魔剣だ。

蓮はそのことは知っていたが、魔剣というものが実際にどういうも

のかはあまり詳しくは知らなかった。

「ゲームとかだと火が出たり、雷纏ってたりとか……」

「んー、説明してやりたいけど、とりあえず宿に戻るぞ。」

「え？でもユーナは?!」

この屋敷にいることは分かっているのだ。

あとは侵入して助け出すだけだと言うのに……

「シグニス、ユーナの血の匂いはしてないだろ？」

> はい……それに、この屋敷から血の匂いはしません。それ以外の
禍々しい気は感じますが<

「オルニスってやつがユーナを攫ったなら何かしら理由があるはず
だ。それに祭の日が近いなら、それに便乗して忍び込んだ方がいい。
」

「でも……」

「それだけじゃない。もし、屋敷に侵入して襲われたりしたら、お
前……またジェステシアに守ってもらっただけか？魔力制御も完璧に
できてない上に、暴走なんてされたらたまらない。」

雄呀の強い口調に蓮は反論できなかった。

格闘には少し自信があった……けれど、王都でのトライナーとの戦
闘で感じたあの感覚、あれは絶対いけないものだ。

雄呀に感じさせてもらった自分の魔力。

それを制御できなければまた……いや、今度は誰かを巻き込んでしまいかもしれない。

「……わかってます。」

俯きそうになつた蓮に向けて雄呀が指を二本立てて告げる。

「2日後の祭までにお前に戦い方を教えてやる。」

「はい！」

「ユーナなら大丈夫だ。」

宥めるように頭をポンポンと叩き、シグニスの前にしゃがむ。

「ありがとう、シグニス。」

>いえ、お役に立てたのであれば<

一例をして姿を消したシグニスを苦笑いを浮かべて見送る。

「師匠、何かありましたか？」

外套を外さないままの雄呀の顔を見ていたカザスがそつと頬に手をやる。

赤くなっているそれを見てカザスは眉を顰めた。

「ああ、これ？ちよつとした事故だな。」

「……」

「んじゃ、宿戻るぞ。腹減ったー！」

「そう言えばジエティは？」

「お留守ばーん。」

「って……ジエティ？なんか、怒ってる？」

「怒ってなどいない！」

宿に戻ると、部屋で1人ぽつんとベッドに座って難しい顔をしていたジエスティアが出迎えた。

「私は、決して！決して！1人で残されたことなど怒ってはいない！騎士は心を広く持つものだからな！」

「だ、だよね？」

ユーナのことについて説明した後もジエスティアはしかめっ面で、食事をするときも無言だった。

ただでさえ食事中に口を開くのは蓮と雄呀、そしてジエスティアだけだというのに。

しかし、蓮は他のことを考えていた。

「（ユーナはちゃんとご飯を食べているのだろうか）」

「……もぐもぐ、おねえさん！一番いい酒持ってきてー。」

いつものように食を進めている雄呀をちらりとみると、眼が合った。蓮の不安そうな顔に、仕方がないといった表情を浮かべる。

雄呀がふと思い出すのはメイド服の少女だった。

あれはきつと敵側の人間だ。

でも、完全にそつだとは言いきれないのが彼女である。

「ユーナは強い子だよ。それにご飯もちゃんともらってるだろうよ。」

「ユーガさん……」

「俺を信じろ。」

「……はい。」

料理の乗った皿を蓮に差し出し、それを受け取る。雄呀の分はカザスが取り分けていた。

「そついや、魔剣がどうのつて言ってたな。」

「あ、はい。」

話題を変えようと雄呀が思い出したかのように話します。食事中は横に立てかけてあるシュバルツに目を向ける。

「魔剣っていうのは一種の魔法みたいなもんだな。」

「でも、カザスさんは……その、魔力が。」

「そう。カザスは笑えるくらい魔力がスツカラカンだ。でも、そうじゃなくちゃ魔剣は使えないんだ。」

そう言っただけで雄呀は宙に魔法陣を描いた。

それは小さく光りを放っていて、攻撃的な空気はない。

「カザス。」

「はい。」

シュバルツを持ちあげたカザスがそつとその魔法陣に刃をつきたてる。

剣先が触れたと思った瞬間、その部分が砕け散るように消えた。

「これって……」

「魔法の無効化か？」

黙っていたジエステティアもいつの間にかそれに釘付けだった。

珍しいことに目がないのか、怒っていたのも忘れていたようだ。

「正解。シュバルツは魔法を打ち消す能力を持つ魔剣だ。」

カザスに目配せをし、された当人は少し悩んだ後蓮にシュバルツの柄を向けた。

やってみろ、ということだろうか、と雄呀を見ると目の前に小さな

魔法陣が現れた。

戸惑いながらシュバルツを受け取り、思ったよりも軽いそれを両手で持ち、つきたてる。

しかし、魔法陣が消えることはなかった。

「え？」

消える、と念じても消えることはない。

「魔剣は魔力を持たない人間にしか操れない。魔剣っていうほどだから、魔術師が使うと思われがちだけど、それは違くてな。もともと、魔力を持たない人間の為にあるんだ。」

「でも、どうして……」

「魔剣の魔力はかなり純粋で……たとえばそうだな。エルフの森、覚えてるか？」

「あ、はい。」

ココンの里があるあの、雄呀にとっては鬼門の場所のことだ。

魔力が少しでもあると魔力酔いを起こしてしまう程の純粋な魔力が漂う森。

「あそこ並の魔力が一本の魔剣に凝縮されてるみたいなものだ。魔力がある人間がそれを使おうとすれば、自分の魔力と魔剣の魔力が反発しあって、力が正常に発動することはない。」

それほど魔剣の魔力が強力なのだ。

「そうだったのか。」

「ジエテイも知らなかったの？」

「あ、ああ。」

騎士であり、剣に詳しくそうなジエステティアでも知らないことは多い。

「魔剣は一般の市には出回らないかなり希少価値の高いものだからね。」

「俺はこの世界に来たすぐ後に一回魔剣を見たことがあって、それを参考にシュバルツを作った。普通の人間が作るうとしても、魔力が足りなさすぎて、魔力注入だけでも100年はかかりそうだな。」

それでも最弱の魔剣になるだろうけれど。

そう言つて酒の入ったグラスを傾ける。

「それを作ってしまったユーガは……どれだけ魔力があるというんだ？」

「はははー！今頃俺の凄さを思い知ったか！でも、これでも前よりは少なくなつたんだぞ。……お、これうまいな……おねえさーん！おっかわりー！」

まだ飲むのか、と呆れつつ蓮が視線をずらすと、グラスを振り回して催促する雄呀に視線をやる力ザスがいた。

その目はいつも以上に空っぽで、持っていたフォークを思わず落としてしまった。

皿の上に落としたためセーフだったことに安堵し、サラダを口に含む。

その時、カザスの視線に気づいた雄呀は苦笑いを浮かべ、運ばれてきたグラスを差し出していた。

「ん？カザスも飲むか？お前ももう20なんだから……っつても、この世界じゃ16で成人だったっけ？んん？じゃあレン！お前も酒飲めんじゃねえか！」

「え?! いませんよ!」

「ああん？俺の酒が飲めねえのか？」

「酔ってないのだからまないでくださいよ!」

どんなに飲んでも酔うことはないと聞いたことがある蓮は雄呀に肩を組まれ、押し付けられるグラスを押し返す。

横からジエステアが助けしてくれるのを期待して視線をやったが、すでに姿がなかった。

「ジエステアなら部屋に戻ったぞー？ありやまだ拗ねてるな」

酒に口をつけながらそう耳元で言われ、固まる蓮。

肩に組まれている手でグラスを持っている為、雄呀が酒を飲む動作をするたびに締め付けられる苦しさ、アルコールの匂いが襲った。これ、度数幾つだろう……と思いつつも手で口元を覆う。

「なんか、匂いだけでも酔いそう……」

「そうかあ？お前も大人になればわかるさ……っつてことでえ、飲め

！そして大人の階段を上れ！」

「ぎゃー！無理ですって！ってかユーガさん、オヤジっばいですよ！」

「んだとお！？俺はまだ26だ！」

頭突きをするようにぐりぐりと額を蓮の頭に擦りつける。
地味に痛い攻撃に蓮は泣きそうになった。

「師匠。」

すつと横から手が入り、雄呀の持っているグラスを掠め取る。

「俺が飲みます。」

「え、えつと、カザスさん……」

ジロリと視線で「行け」と言われているように思えた蓮は、いつの間にか外れていた雄呀の腕を見て立ち上がる。

「じゃ、じゃあ、僕はジエティの様子見てきますね！」

「おー、謝って来ーい。日本人らしく土下座でも何でもして許してもらえー。女は怒ると怖いからなー。」

逃げるように立ち去る蓮に面白おかしく投げかける言葉はかなりジヨークとは言えないものだった。

笑いながら降っていた手を下し、フォークで肉を突き刺す。

「あいつ、将来尻に敷かれるな、絶対。」

カタン、と隣で音がして見るとカザスが空のグラスをテーブルに置いていた。

「の、飲んだのか？」

「……はい。」

「じよ、冗談だったんだけど。」

顔色一つ変えないカザスを見て雄呀は刺していた肉をぼとりと皿に落とした。

16歳で成人といつても、カザスは20歳になった今でも酒に一口も口をつけたことがない。

雄呀が酒をすすめてもやんわりと断り、水だけをちびちびと飲む。

決して口にする事のなかった酒をカザスが飲んだ……

「美味しいか？」

「いいえ……俺の味覚には合わないようです。」

「そ……そうか。……ん？」

無表情のカザスに苦笑いを浮かべ、頼んでおいたおかわりの酒を飲もうとすると、そこにグラスはなかった。

テーブルの上を見渡し、お姉さんに頼もうとするとカザスの方からガタン、と音がした。

どうしたのかと見てみると、テーブルに顔を沈めている弟子がいた。その手には雄呀が頼んだ筈の酒のグラスが空となって握られていた。

「カザスくん？」

「……」

返事はない。

「あらら、お前下戸だったのね。」

小さく呼吸が聞こえ、寝ているのだと気づく。

テーブルに突っ伏したまま動かないカザスを見ておかしくなって笑いながら残った料理を処理していく。

ほとんどは蓮が食べていたため、残飯処理みたいなものになっている。

子供の食べ残しを食べている気分だった。

「あ、お姉さん。お酒、おかわりね。」

丁度後ろを通った宿の店員にそう言って、肉を頬張る。

カザスの方を心配そうに見ていたが、大丈夫大丈夫、と言うと笑顔でお待ちくださいと返事が来た。

「無理して飲むからだっつもの。」

綺麗に整っているはずの金髪が突っ伏しているせいでぼさぼさになっている。

右側に座っているカザスに手を伸ばし、頭に手を置く。

意外とふわふわしていて手触りのよい髪に地球にいたころの近所の大型犬を思い出す。

無意識に顔がに焼けるのを感じ、ガシガシと乱暴にかき混ぜた。

「ガキだなあ……………」

「……………」

「？」

「せんせーが……………あいつにはかり構う。」

「はあ？」

舌足らずで突っ伏したままそう呟くカザス。

手をどけて頬杖をついて黙り込む雄呀に、言葉を連ねる。

「せんせーは僕のせんせーなのに……………」

「僕……………」

小さい頃のこいつの一人称だった。

いつの間にか雄呀の真似をして『俺』を使うようになったのだが。

蓮に構っていたのが不満だったらしい。

「（完全に酔ってるな……………」おい、水飲め水。」

放置状態だった水の入ったコップをカザスの前に置き、肩を叩く。

「せんせーの隣にとりにいていいのは、僕なのに……」

「ほら、起きろって。」

「なのに……」

席から立ち上がってカザスの右側につき、体を起こさせる。
虚ろな目のカザスは目の前に置かれた水を持ち、一気に飲み干す。

「そろそろ部屋戻るか？ん？」

「あの犬……あの犬……あの犬……犬……」

ぶつぶつと何かを呟くがかなり小さい為雄呀には聞こえない。
とりあえず立ち上がりせようとカザスの腕をつかもうとしたときだ
った。

「おい、カザ

ゴツン！！

スーーーー！???」

いきなりテーブルに勢いよく頭突きをかましたカザスに目を丸くし
た。

だ、大丈夫か？と若干引き気味に声をかけると、ゆらりと上半身を起す。

「……師匠。」

雄呀の方を向いたカザスの額は赤くなり、眼はいつもの鋭い瞳に戻っていた。

ゆっくりと周りを見渡し、自分の持っている空のコップを見て、再び雄呀を見た。

「何か、ありましたか？」

「い、いや……なにも。」

何事もなかったかのように聞いてくるのに、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「……」

無言で額をさする姿に笑いつつ、元の席に座ってグラスを傾ける。

カザスには酒はすすめないようにしよう、と心に決めた雄呀だった。

第3話 『風呂にて』

閉じ込められてからどれくらいの間が経ったのか、唯一外が見える小窓を見続けてもわからなかった。

冷たい床と手枷に心身ともに凍えていく。

蓮達と会うまでは当たり前のようにだったことが、数日の温かい日々につき消されていたことがわかる。

会いたい。

部屋の隅に丸くなったまま顔を埋めていると、外からガチャガチャという音がして扉が開いた。

びくつと身体を震わせたユーナは入ってきた人物に警戒をした。

ここに入れられてから食事を運んでくる少女。

入ってきた使用人服の彼女はユーナの目の前にしゃがみ込み、手に持っていたトレーを置いた。

一言も話さず、ただユーナが食べ終わるまでじっと見つめ続け、食べ終わるとトレーを持って部屋を出る。

しかし、今回はそれだけではなかった。

「はい、お嬢ちゃん。」

少女の後ろから出てきたのは聞いたことのある声の女性だった。露出の高い服を着ている綺麗なその女性は静かな空気を壊し、「何この部屋、臭いわね」と言いながらどこからともなく現れた椅子に座った。

まるで雄呀の魔法みたいだとユーナはどこかで思った。

「ねえ、お嬢ちゃん……ここから出たくない？」

「?!」

俯きかけていた顔をバツと上げ、その綺麗な顔を見つめる。

「お姉さん、あの馬鹿男にあなたを殺せって言われてるのよお。」

腰まである長い髪を指に巻きつけ、弄りながら困ったといった表情を浮かべる。

「殺せ」という単語に怯えの表情を浮かべるユーナを見てクスリと笑い、足を組む。

「でもね、お姉さんは人間を殺すことに興味はないの。確かに、人間は嫌いだけど……」

椅子から立ち上がった彼女に少女は進路を開けるように壁に避ける。スリットから見える長い脚が目の前に来たと思ったとたん、手枷を掴んでユーナを軽々と持ち上げた。

地面から離れたユーナは恐怖で目元に涙が溜まりそうになったが、女性の顔が正面に来ると息が止まるように緊張が走り、涙も引っ込んでしまった。

女性はユーナの首筋に鼻を近づけ、匂いをスツと吸った。

「あなたは良い匂いがする。」

「ヒツ……」

首筋、目元、髪、腕……そして手首へと伝うように眼を閉じながら匂いを嗅ぐと「邪魔ね」と手枷を鍵も使わずに取り外した。床に落とされた手枷の金属音を聞きながらもユーナは身動き一つ取ることができない。

捕まれたままの傷ついた手首に鼻を寄せた彼女は恍惚と息をついた。

「優しい匂い……私の好きな匂い。」

その声は先ほどのふざけた空気はなく、ただ嬉しそうに、恐怖の対象なのにどこか安心したように、ユーナの耳に入った。

気づけばユーナは床に下ろされ、女性はその手首をそっとつかんだまま、匂いを吸っていた。

支配していた恐怖は薄れ、ユーナはその手が放されるまでじっと動かず、その綺麗な顔を眺めていた。

「では、オルニス様。」

深々と頭を下げ、門を出ていく町の住人を見送り、大きな扉をバタ

ンと閉める。

誰もいなくなつた広いエントランスホールでオルニスと呼ばれた男は浮かべていた笑顔を捨て、眼光を鋭くして使用人を呼んだ。その声に出てきた使用人が礼をする。

「あいつはどこだ。」

「フュリエル様は……」

「私かなあに？」

言葉をさえぎり、2階の踊り場から声が響き渡り、1人の美女が姿を現した。

「次の誓はどうした。」

「いいのがないのよねえ。」

手摺に寄り掛かつて薄らと笑みを浮かべる彼女、フュリエルに舌打ちをし、オルニスは書齋へと足を向かわせる。

慌てて使用人がその後を追うが、一度立ち止まり、振り向かず声を荒立てる。

「さつさと次のを用意しろ！儀式は明日なんだからな！」

「せっかちな男は嫌われるわよお？」

「嫌い！」

ボタン！

書斎の扉が大きな音を立てて閉じる。

「これだから人間は。」

「あ……」

「あら、もういいわよ。」

フュリエルが声をかけると、柱の陰から使用人の少女がユーナを連れて現れた。

足枷も外され、汚れた服のまま。

「面倒だから送っては上げないけどお、さっさと出て行って頂戴ねえ。」

少女がユーナを玄関の扉まで誘導し、扉を開く。

踊り場から降りてきたフュリエルを見て、ユーナは外に出る前に振り向き彼女を見た。

最初はその冷たい表情が恐怖の対象でしかなかった。

しかし、今は不思議な感覚で……怖いとは違うものが心にある。でも、これだけは言わなければいけないのだろう。

「あの……あり、がとう。」

その言葉に彼女は顔を歪めた。

「人間に感謝されるのは虫唾が走るからやめて頂戴。」

そう言つて向けられた背にユーナは小さく礼をして扉から外へと飛び出して行つた。

屋敷の3階。

窓辺に寄りかかり、門を出ていく小さな姿を見ながら口元に笑みを浮かべる。

ワイングラスを手で弄ぶが口をつけることはない。

赤く潤つた唇は妖しげに弧を描く。

「知ってる？カトラ。」

グラスを差し出せば、すぐにボトルで注がれる。

横に立つ少女……カトラは表情をピクリとも動かさずにフュリエルの言葉を待つ。

「最初に裏切つたのは人間なのよ……だから」

「あの子には『餌』として頑張ってもらわなきゃ、ね？」

「……はい。」

木製の机に向かい、精神を集中させる。

頭に描くのは複雑な記号と図形を組み合わせた複雑な魔法陣で探査魔法の応用のようなもの。

勉強なんてしたことはなく、ただ感覚で理解ができる自分が最初は怖かったが、そんなことでこの世界を生きてはいけないという思いが勝った。

書物を読む機会もあったが、実戦で試した方が自分にとって一番有効だと確信したため全ては自己流だ。

頭に瞬時に思い描いたその陣は机の上に小さく輝いていた。

その上に道具袋から取り出した拘束用魔具を取り出し置く。

かつて、奴隷だったユーナが付けられていたものだ。

様々な色が混じったその光を見ながら、いなくなつたユーナのことを考える。

魔力を持たないユーナは探査魔法では見つけることができない。

しかし、人間には魔力の他にも生命力というものがある。

長い間ユーナに付けられ、声を封じていたこの魔具には僅かながらユーナの生命力の名残があつた。

生命力は本人が死ねば消失し、存在そのものがなくなる。

つまり、ユーナが生きれば生命力はそのまま残っていることになる。

魔力を注ぐと、魔法陣の上に置かれた魔具から小さな光が漏れ始め

た。

「元気そうだ。」

温かく漏れてくるそれを見て、安堵する。

明日に迫った祭に備え、蓮の魔力操作の特訓を続けているが進展はなかなかしなかった。

蓮自身の才能云々という話ではなく、彼の厄介な魔力の性質故の難題なのだ。

カザスに手当てされた手を見てため息をつく。

人によって魔力は様々だ。

それぞれに属性があるように、向き不向きが存在するように、魔力は個性がある。

雄呀の場合は馬鹿でかい魔力と全ての属性を持つ規格外のものだが、魔力自体には何の特殊性もない。

しかし、蓮の場合は違った。

彼の魔力に触れただけでこの手は傷ついた。

蓮の魔力はとてつもなく攻撃性がある。

魔力が水だとするならば、雄呀の水は量は多いけれど触れる分には誰にでも触れられるが、蓮の水は触れただけで感電、火傷、凍傷なんかが起きる変異的な水。

無意識の自己防衛……とでも言おうか。

魔力操作の訓練をしたところであいつは基本的な魔法すら習得はできないうら。

だから操作だけでもできるようにさせたいのだが……

「もっとあいつは自分を見直すべきだな……」

机をトンツと指で叩くと魔法陣は空気に溶け、魔具だけが残された。立ち上がりながらそれを袋に戻し、着替えを持つとドアがノックされる。

ドアを開ければ、そこには同じように服を抱えている蓮が立っていた。

「あの、一緒にお風呂しませんか？」

この宿は女性の入浴時間と男性の入浴時間が分かれているそうで、と足した蓮にそうだな、と答える。

「あれ？カザスさんはいないんですね。」

同室のはずのカザスがいないのが珍しかったらしい。少し買い出しを頼んだことを教えると、ほっとしたような顔をした。

「まあ、俺たちだけでゆっくりすんのもありだろ。ほれ、行くぞー。」

「あ、持ちますよ。」

雄呀の着替えを自然に持った蓮に少しカザスが重なったような気がして、持て余していた左手で少し下にある頭を掻き撫でた。

「うわぁ……この世界にも温泉あるんだ。」

全裸のまままで立ち尽くす蓮に少し笑いながら浴槽に近づく。

「正確にはただの水に火の魔石を当てて湯を沸かしてるんだけどな。ほら、そこら中に赤い石が嵌まつてるだろ？」

岩風呂のような、それでいて人工的な様式に所々に赤い魔石が散りばめられている異様な風景の中、蓮が浴槽を覗き込み、「本当だー」と目を輝かせていた。

興奮気味ながらもきちんと身体を洗ってから入る様子はさすがは日本人、と感心した。

「はぁー、気持ちいい。」

この世界に来てから初めての風呂だという蓮は今までで一番リラックスしている表情だった。

それを見て笑みをこぼしながらも魔法で出した湯を頭からかける。

風呂はあってもシャワーなどはない為、荒い場に小さな滝のように流れるお湯を掬って洗うのだが、雄呀にとっては魔法に頼った方が楽だ。

洗った髪を後ろに撫でながら、そういえば俺も風呂はフィニアを出て以来だった……と思い出す。

フィニアには住み始めた時から魔法で温泉を作って置き、毎日入るのが好きだった。

旅に出れば入れないと分かっていたが、いざ入れると嬉しいものだ。

リラックスモードになって湯船に浸かっている蓮の横に入り、足を伸ばした。
あと4人くらいは余裕で入りそうな大きさの風呂は、こういった宿にしては珍しい。

「やっぱり風呂はいいなあー。」

「ですよねー。」

「俺、地球にいた時はどうってことなかったけど、こういう小さいことが大切だつてこと……こっち来てから思い知らされてばっかだ。」

蓮は雄呀の湯に浸かっている今はない右腕の部分に目をやり、息を詰まらせた。

「（そういえば、ユーガさんの腕っていつも包帯してたっけ）」

右腕を失っていることは知っているが、それ以上は見たことも聞いたこともなかった。

今、彼の右腕だった部分には何の覆いもなく、すっぱりと平面になっているがそこは皮膚で覆われ、最初からそこには何もなかったように見えるほど綺麗だ。

しかし蓮の目に一番残ったのは違うものだった。

まるで肩から切断面に這うように刻まれたそれは魔法陣に似たもので、黒い刺青にも見えた。

「そっついやあさー」

雄呀が話しかけてきたことではつとし、眼を逸らす。

「レンはカザスのこと苦手なのか？」

「え？そんなことないですけど……」

「嘘つけ。さっき、あいつがいないってわかってホツとしてたくせに。」

にやりと笑って言う雄呀に凶星を突かれ、湯に沈む。

美形率が高いこの世界でもわかる、カザスの異様に整っている顔。その目が時々自分に向けられ鋭く光るのを蓮は知っていた。

「カザスさんが苦手ってわけじゃなくて……なんか、僕嫌われてるような気がして。」

「そうか？」

「ちゃんと会話もしたことないし、時々睨んでくるし……」

「基本無口なのはしょうがないけど、睨むってのは……目付きの悪さか？」

たぶん違います、と蓮のツッコミは出ることはなかった。

雄呀の顔を見て、何も言えなかったのだ。

「（ユーガさんは時々僕の母さんと同じ表情をする）」

僕がくだらないことで泣いて帰って来た時や、元気がない時、「し

ようがないな」と困ったような、それでいて優しい表情。

カザスのことを話すとき、雄呀は無自覚でそういった顔をしているのに蓮は気づいていた。

雄呀とカザスの詳しい関係は師弟であること、カザスが雄呀の右腕であること以外、知ることはない。

「まあ、あいつは不器用なだけだからさ。優しい奴だってことは覚えといてくれよ。」

「それは……知ってます。」

「つつーか、今度睨まれたらお前もガン飛ばせって。」

「それは無理です!」

「ぶはあー。ついでだからお前のそのチキンも矯正してやるうか?」

「い、いいですよ!っていうか、それお酒ですよね?!」

どこから、というかいつからあったのか、風呂には小さな御盆が雄呀の前に浮かび、その上には熱燗とお猪口が乗っている。

雄呀は器用に注いでは勢いよくぐつと飲み干していた。

「温泉と言ったらこれだろ?よくテレビで見たんだけど、これ結構癖になるよな!。」

お前もどうだ、とお猪口を渡されそうになったが断固拒否をした。

「僕、まだ16ですから。」

「成人成人。」

「地球じゃ未成年です！」

風呂に入って温まっているせいか、雄呀の頬が少し赤くなり、酔っているように見えるが酔ってはいない。

「地球じゃ未成年、か……俺にはどっちにしろ関係ないことだな。」

そう言ってお猪口に口をつける。

雄呀は見た目の成長がなくても26歳、十分大人になってしまった。いつから大人の境界線を越えてしまったのか曖昧で、成人も何も関係なかったように感じる。

16歳、雄呀は地球に帰れることを支えに生きてきた。いろいろなものを失いながらもいつか地球に帰れると信じ、進んできた自分が今では懐かしい。

蓮が来た時の地球の時間とこの世界の時間の経過は同じだということがわかったのは最近だったっけ。

「ユーガさん。もし、地球に帰れたら帰りたかって思ったことありますか？」

「最初は思ったさ、帰れるって。でも、俺はもう帰れないから。」

腕のことも、カザスのことも、10年間の空白も……帰れない理由はたくさんあるが、帰りたい理由はない。

家族に会いたいと思うことも、地球が恋しいという気持ちも、遣り残したことも、どこかに捨てて行ってしまった。

「こっちに骨を埋めるって決めちまつたし。」

なくなつた熱爛を再び作り出し、今度はきつめのものにする。

飲んでも飲んでも酔えないのは有り余る魔力が異質なものを排除しようとして勝手に処理しているからで、体質のせいとかではない。

こっちに来てからいろんなことが変わってしまい、それに慣れてしまつた。

もう戻れない、とわかっているから。

風呂から出て脱衣所に入ると冷えた空気が気持ち良い。
置いてあつた着替えに手をつける蓮に話しかける。

「安心しろよ、お前はちゃんと地球に帰してやるから。」

アンダーを着るのに四苦八苦しながらもやっと服の穴に手をかけられる。

いつもならカザスが手伝ってくれるが、今はいない。

「僕も、がんばります。」

「そんなの当然だ。」

「す、すみません!」

「謝る暇があるならちよつと手伝え……あ、頭が出ない……っ!」

「ぎゃー！ユーガさん、大丈夫ですかー！！？」

ガラアツ！！！！

「2人とも！大変だ！ユーナが帰ってきて……………いやあああああああああ！」

バチン！

バチン！

「ひゅーな、らいようぶらった？（ユーナ、大丈夫だった？）」

「あー、ほんほ、ぶじれよかつは（あー、ほんと、無事でよかった）」

「レン、ユーガ、だいじよぶ？」

少し汚れているが、無傷のユーナの姿……よりも重症に見える雄呀と蓮の赤く腫れた頬を見て彼女は眼を点にしていた。

「ほ、本当にすまなかった……つい驚いてしまって！守るべき相手を殴るとは私は騎士失格だ！！さあ、私も殴ってくれ！頼む！」

「ひや、ほんと、らいじょうぶらから！（いや、ほんと、大丈夫だから）」

女の子殴るなんてできないし、と付け加え、ユーガが作った氷水で冷やす。

雄呀はカザスがずっと丁寧に冷やしているため、大分楽そうだった。治癒魔法で治す程のことではないだろうと蓮に魔法は施してはいない。

着替え中に飛び込んできたジェスティアは二人の半裸を見て顔を真っ赤にし、思わず平手打ちをぶちかましたのだ。

女性の張り手は痛い。

しかも彼女は騎士という立場上、筋力トレーニングも怠っておらず、洗練されたフォームの如く綺麗な平手打ちでパワーも半端なく、蓮は危うく綺麗な川を渡りそうになっていたほど。

雄呀は二度目だが、ジェスティアは破廉恥な行為が苦手と、データ

に入れておいた。
だんだん腫れが落ち着いてくると、ジエステリアは剣を床に置き、
再び膝をついた。

「これははじめだ……さあ！思う存分殴ってくれ！私を助けると思
つて！」

「できないって！」

「お前はドM願望でもあるのか。」

「『どえむ』？とはなんだ？何かの生き物か？！私はその『どえむ』
という生き物と同じなのか？！」

「まあ、生き物を指す名称みたいなもんだが。まさにお前のことだ。
」

「ならば私はこれから『どえむ』のジエステリア・ルンブルクと名
乗らねばなるまい……」

「いや、ユーガさん、意味が分かっている相手に勝手なこと言っ
ちゃだめですよ！ジエティも信じないで！」

ギリギリジエステリアの尊厳を失うところだったが、蓮はなんとか
やめさせることに成功した。
面白がっているのが見え見えな雄呀は達が悪い、とジエステリアを
なだめながら思う。

「ちなみにドMの反対はドS……アウリアがそれに当てはまる。あ
いつは他人をからかうのが得意だし、何げに腹黒い。」

「『はらぐる』『とはよくわからんが……殿下が、『どえす』『というもののなか。』」

「そつだ。ドMとドSは究極的に相性が良い。よかつたな。」

「そつか、私と殿下は『どえむ』『と』『どえす』『……相性が良いのか
「！」

「ジエテイ、喜んでるところ悪いけど、本当にドSなのは君の目の前にいるからね。」

ジエスティアが本当の意味を知った時、羞恥に駆られ自害したくなるのはまた別の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530t/>

片腕の救世主

2011年12月8日00時45分発行